

# 上野町遺跡・顕徳寺遺跡

—大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ—

2004

大分県教育委員会





**上野町遺跡・顕徳寺遺跡全景（空中写真、西から）** 上野町遺跡と顕徳寺遺跡は、古代と中世を主体とする遺跡である。上野町遺跡では、8世紀末から9世紀前半にかけての土器群とともに多量の土錘が出土した。顕徳寺遺跡では、古代の包含層および16世紀後半に比定される溝を検出した。16世紀後半の溝は、遺跡の東側に展開する中世大友府内町跡との関連を予測させる。いずれも、大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査によって発見された遺跡である。



## 序 文

本書は、県教育委員会が大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した、大分駅付近連続立体交差事業に伴う上野町遺跡・顕徳寺遺跡の発掘調査報告書です。近年、この大分駅付近連続立体交差事業に伴う発掘調査で、戦国大名大友氏の中世大友府内町跡が発掘調査され、全国的にも大きな注目を受けています。本書に収録した上野町遺跡・顕徳寺遺跡は、大友府内町跡の西端部から約200m西側の沖積低地上に位置しており、府内町跡の最盛期である戦国時代より700年ほど古い平安時代を主体とした遺跡です。

上野町遺跡では、平安時代前期の遺構・遺物とともに、漁網に使用した土錘が460個以上発見され、遺跡の周辺に海の生活を基盤とする人々が住んでいたことが推定されました。顕徳寺遺跡では、平安時代の遺物包含層とともに室町時代の溝も発見され、遺跡の東側に展開する中世大友府内町跡との関連を予測させるものとなりました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成16年 3月31日

大分県教育委員会教育長

深 田 秀 生



# 例 言

1. 本書は、大分市上野町1番地に所在する上野町遺跡、大分市大字大分字顕徳寺に所在する顕徳寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業の実施に伴い、大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、大分県教育委員会が実施した。
3. 上野町遺跡の調査は平成14年1月7日から2月27日にかけて実施し、吉田寛・中田裕樹（大分県教育庁文化課）が担当した。また、顕徳寺遺跡の調査は平成13年7月5日から8月31日にかけて実施し、後藤晃一・中田裕樹（大分県教育庁文化課）が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構の実測等は、調査員が担当した。
5. 遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、調査員が担当した他、大分県教育庁文化課文化財資料室の整理作業員の多大な協力を得た。
6. 出土遺物ならびに図面・写真等は、大分県教育庁文化課文化財資料室（大分市大字中判田字ビワノ門1977）において保管している。
7. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。また、国土座標は2002年4月1日改正以前の座標値を使用している。
8. 本書の執筆は第1章および2章を吉田寛、第3章を後藤晃一、第4章をバリノ・サーヴェイ株式会社、第5章を吉田・後藤が担当し、編集は吉田・後藤の両名で協議して行った。なお、執筆分担は目次にも明記している。



# 目 次

## 第1章 調査の経緯と周辺の環境 (吉田寛)

- 1. 調査に至る経過..... 1
- 2. 遺跡の立地と環境..... 2

## 第2章 上野町遺跡 (吉田寛)

- 1. 調査の概要と基本層序..... 9
- 2. 遺構・遺物の概要
  - ①中世の遺構・遺物.....13
  - ②古代の遺構・遺物 1.....16
  - ③古代の遺構・遺物 2.....36
  - ④弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺構・遺物.....44
- 3. まとめ
  - ①古代の土器について.....46
  - ②土錘について.....50
  - ③長沙窯系黄釉褐彩水注について.....57

## 第3章 顕徳寺遺跡 (後藤晃一)

- 1. 調査の概要と基本層序.....59
- 2. 検出遺構
  - ①溝 (SD1・SD2).....60
  - ②包含層 (上層・下層).....61
- 3. 出土遺物.....63
- 4. まとめ.....69

## 第4章 自然科学的分析 (パリノ・サーヴェイ株式会社)

- 1. 上野町遺跡から出土した木製品の樹種.....70
- 2. 顕徳寺遺跡の出土獣骨.....75

## 第5章 結語 (吉田寛・後藤晃一) .....78



# 図版目次

## 第1章 調査の経緯と周辺的环境

第1図	上野町遺跡・顕徳寺遺跡と 周辺の遺跡①(1/25,000)……………	3
-----	---------------------------------------	---

第2図	上野町遺跡・顕徳寺遺跡と 周辺の遺跡②(1/3,000)……………	4
-----	--------------------------------------	---

## 第2章 上野町遺跡

第3図	上野町遺跡遺構変遷図(1/240)……………	10
第4図	調査区北壁・南壁土層図(1/60)……………	11・12
第5図	遺構配置図・中世(1/120)……………	13
第6図	土坑S K001実測図(1/30)……………	14
第7図	S K001出土遺物(1/3)……………	14
第8図	S X004検出状況……………	14
第9図	I層出土遺物(1/3)……………	15
第10図	遺構配置図・古代①(1/120)……………	16
第11図	土坑S K003実測図(1/30)……………	17
第12図	S K003出土遺物(1/3)……………	17
第13図	土器集中部S X007……………	17
第14図	S X007出土遺物(1/3)……………	17
第15図	土錘集中部S X006遺物出土状況(1/30)……………	18
第16図	S X006出土遺物(1/3)……………	18
第17図	S K006出土遺物(小型土錘① 1/3)……………	19
第18図	S K006出土遺物(小型土錘② 1/3)……………	20
第19図	S K006出土遺物(小型土錘③ 1/3)……………	21
第20図	S K006出土遺物(小型土錘④ 1/3)……………	22
第21図	S K006出土遺物(小型土錘⑤ 1/3)……………	23
第22図	S K006出土遺物(大型土錘① 1/3)……………	26
第23図	S K006出土遺物(大型土錘② 1/3)……………	27
第24図	S K006出土遺物(大型土錘③ 1/3)……………	28
第25図	S K006出土遺物(大型土錘④ 1/3)……………	29
第26図	II～IV層群出土遺物①(1/3)……………	30
第27図	II～IV層群出土遺物②(陶磁器 1/3)……………	31
第28図	II～IV層群出土遺物③ (硯関連資料 1/3)……………	31

第29図	II～IV層群出土遺物④(1/3)……………	32
第30図	II～IV層群出土遺物⑤(1/3)……………	33
第31図	II～IV層群出土遺物⑥(1/3)……………	34
第32図	遺構配置図・古代②(1/120)……………	36
第33図	V層群出土遺物① (墨書土器・円面硯 1/3)……………	37
第34図	V層群出土遺物②(1/3)……………	38
第35図	V層群出土遺物③(1/3)……………	39
第36図	V層群出土遺物④(1/3)……………	40
第37図	V層群出土遺物⑤(1/3)……………	41
第38図	V層群出土遺物⑥(瓦 1/3)……………	41
第39図	V層群出土遺物⑦(木製品 1/3)……………	42
第40図	遺構配置図・弥生時代後期末～ 古墳時代前期初頭(1/120)……………	44
第41図	S X009遺物出土状況……………	44
第42図	S X009出土遺物(1/4)……………	45
第43図	S X005遺物出土状況(1/30)……………	45
第44図	S X005出土遺物(1/4)……………	45
第45図	上野町遺跡出土土器編年図(1/4)……………	47・48
第46図	S X006大型土錘出土状況……………	50
第47図	土錘分布図(1/120)……………	51
第48図	9世紀中頃～後半における土錘の組成……………	52
第49図	土錘法量相関図……………	53
第50図	土錘分析グラフ……………	57
第51図	長沙窯系黄釉褐彩水注……………	58

## 第3章 顕徳寺遺跡

第52図	顕徳寺遺跡遺構分布図(1/100)……………	59
第53図	顕徳寺遺跡土層図(1/80)……………	60
第54図	府内古図(C類)……………	62
第55図	包含層上層出土遺物(1/3)……………	63
第56図	包含層上層出土遺物(1/3)……………	64

第57図	包含層下層出土遺物(1/3)……………	65
第58図	S D 1 出土遺物(1/3)……………	66
第59図	S D 2 出土遺物①(1/3)……………	67
第60図	S D 2 出土遺物②(1/3)……………	68



#### 第4章 自然科学的分析

第61図	上野町遺跡出土の木製品① (顕微鏡写真) .....	73
第62図	上野町遺跡出土の木製品② (顕微鏡写真) .....	74

第63図	顕徳寺遺跡出土獣骨 .....	77
------	-----------------	----

## 表 目 次

#### 第2章 上野町遺跡

第1表	S X 006出土小型土錘法量表① .....	24
第2表	S X 006出土小型土錘法量表② .....	25
第3表	S X 006出土大型土錘法量表 .....	29
第4表	II～IV層群出土土錘法量表 .....	31
第5表	木製品観察表 .....	43
第6表	上野町遺跡の層序と坪根・塩地編年 (2001)との比較 .....	49
第7表	土錘の分布と組成 .....	52

第8表	S X 006出土土錘法量分析表① (小型管状土錘) .....	54
第9表	S X 006出土土錘法量分析表② (小型管状土錘) .....	55
第10表	S X 006出土土錘法量分析表③ (大型管状土錘・有溝土錘) .....	56
第11表	II～IV層群出土土錘法量分析表 .....	56

#### 第4章 自然科学的分析

第12表	樹種同定結果 .....	70
------	--------------	----

第13表	下顎骨の計測値 .....	76
------	---------------	----

# 写真図版目次

## 上野町遺跡

写真図版 1	I層上面の遺構（中世） II層下面～IV層中の遺構 （9世紀中頃～後半） V層上面の遺構（8世紀末～ 9世紀前半・弥生時代後期末～古墳 時代前期初頭）……………81
写真図版 2	上野町遺跡調査区南壁土層 上野町遺跡調査区西壁土層……………82
写真図版 3	土坑 S K 001土層 土坑 S K 001完掘 杭列 S X 004 ……………83
写真図版 4	溝 S D 002全景 土坑 S K 003完掘状況 土器集中部 S X 007遺物出土状況 ……84
写真図版 5	土錘集中部 S X 006遺物出土状況 S X 006大型土錘出土状況（西から） S X 006大型土錘出土状況（北から） 85
写真図版 6	長沙窯系黄釉褐彩水注片出土状況① 長沙窯系黄釉褐彩水注片出土状況② 円面硯（圈足硯）出土状況……………86
写真図版 7	木製垂具出土状況 曲物底板出土状況 円面硯（圈足硯）出土状況……………87
写真図版 8	土器溜め S X 005遺物出土状況① 土器溜め S X 005遺物出土状況②(近景) S X 009複合口縁壺出土状況 ……………88

## 顕徳寺遺跡

写真図版22	調査区全景(東から) 調査区全景(北から) ……………102
写真図版23	S D 1 完掘状況(東から) S D 2 遺物出土状況(東から) S D 2 牛下顎骨出土状況 S D 2 遺物出土状況 ……………103
写真図版24	包含層上層出土遺物① ……………104

写真図版 9	I層出土遺物 S K 003出土土錘 S X 007出土遺物 ……………89
写真図版10	上野町遺跡 S X 006小型土錘 ……………90
写真図版11	上野町遺跡 S X 006大型土錘 ……………91
写真図版12	S X 006出土遺物 II～IV層群出土硯関連資料 II～IV層群出土遺物①……………92
写真図版13	II～IV層群出土遺物②……………93
写真図版14	II～IV層群出土遺物③……………94
写真図版15	II～IV層群出土遺物④ V層群出土遺物①……………95
写真図版16	墨書土器 墨書のアップ 円面硯(圈足硯)……………96
写真図版17	V層群出土遺物②……………97
写真図版18	V層群出土遺物③……………98
写真図版19	V層群出土遺物④……………99
写真図版20	V層群出土遺物⑤ V層群出土遺物⑥ S X 009・S X 007出土遺物 ……………100
写真図版21	V層群出土木製品 ……………101
写真図版25	包含層上層出土遺物② 包含層下層出土遺物① ……………105
写真図版26	包含層下層出土遺物② S D 1 出土遺物① ……………106
写真図版27	S D 1 出土遺物② ……………107
写真図版28	S D 1 出土遺物③ S D 2 出土遺物 ……………108

# 第1章 調査の経緯と周辺環境

## 1. 調査に至る経過

本書に収録した上野町遺跡と顕徳寺遺跡は、古代と中世を主体とする遺跡で、いずれも大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査によって初めて発見されたものである。大分駅周辺総合整備事業とは、国・大分県・大分市が一体となって進めている大分駅南側地域の再開発事業で、その内容には「大分駅付近連続立体交差事業」・「大分駅南土地区画整理事業」・「庄の原佐野線（地域高規格道路大分中央幹線道路）等関連街路事業」という大きな3つの柱がある。このうち、「大分駅付近連続立体交差事業」では、大分駅の東西に敷設されているJR日豊本線・JR豊肥本線・JR久大本線の鉄道を高架化することによって、鉄道を挟んだ南北市街地間の交通の円滑化と踏切事故等の危険性の解消を目的としている。また、鉄道による従来の地域分断が解消され、両市街地の一体的発展の促進が期待できる。事業対象地域は、日豊本線3.65km・豊肥本線1.60km・久大本線1.92kmの総延長7.17kmにおよぶ。事業の実施期間は、1996年（平成8年）から2010年（平成22年）までが予定されている。

大分県教育委員会では、大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて、1998年（平成10年）より大分駅周辺総合整備事業対象地域における埋蔵文化財の有無に関する試掘調査と遺跡の発掘調査を行い、現在に至っている。上野町遺跡と顕徳寺遺跡は、上記の大分駅付近連続立体交差事業に先立つ試掘調査によって初めて確認された。この二つの遺跡は大分市上野町と六坊北町付近のJR日豊本線とJR久大本線が合流する地点周辺に位置しており、上野町遺跡は久大本線、顕徳寺遺跡は日豊本線のそれぞれ南側に存在する。以下、上野町遺跡と顕徳寺遺跡の調査経過および調査組織等についてのデータを記す。

### 上野町遺跡

**所在地：**大分市上野町1番地

**発見の経緯：**大分駅付近連続立体交差事業（久大本線）に伴う埋蔵文化財試掘調査  
（1999年（平成11年）9月実施）

**調査期間：**2002年（平成14年）1月7日～2月27日      **調査面積：**約135m<sup>2</sup>

**事業主体：**大分駅周辺総合整備事業事務所      **調査主体：**大分県教育委員会

**調査組織：**総括 工藤正徳（大分県教育庁文化課長）

調査主任 坂本嘉弘（大分県教育庁文化課主幹 発掘調査大型事業担当）

調査担当 吉田 寛（同 主査）

中田裕樹（同 嘱託、現埋蔵文化財サポートシステム）

### 顕徳寺遺跡

**所在地：**大分市大字大分字顕徳寺

**発見の経緯：**大分駅付近連続立体交差事業（日豊本線）に伴う埋蔵文化財試掘調査  
（2001年（平成13年）6月実施）

**調査期間：**2001年（平成13年）7月5日～8月31日      **調査面積：**約100m<sup>2</sup>

**事業主体：**大分駅周辺総合整備事業事務所      **調査主体：**大分県教育委員会

**調査組織：**総括 工藤正徳（大分県教育庁文化課長）

調査主任 坂本嘉弘（大分県教育庁文化課主幹 発掘調査大型事業担当）

調査担当 後藤晃一（同 主査）

中田裕樹（同 嘱託、現埋蔵文化財サポートシステム）



## 2. 遺跡の立地と環境

上野町遺跡と顕徳寺遺跡は、大分川左岸域の沖積低地上に立地する遺跡である。2つの遺跡は近接した地点に位置しており、北側約2kmには別府湾、南側約0.6kmには上野台地が存在している。遺跡が立地する地点の周辺には、古代・中世以降、豊後国府の国衙関連施設や大友氏の守護所が設置され、また近世には譜代大名大給松平氏2万2千石の府内城下町が建設されるなど、現在中核市となった大分市の発展の基礎となった地域であった(第1図参照)。

試みに、上野町遺跡・顕徳寺遺跡を中心に半径約1.5kmの円を描くと、上記の沖積低地・上野台地、さらには中世の大友府内町跡、近世の府内城下町までを含む範囲となる。当該地域は、近年大分市街域の再開発事業に伴う発掘調査が頻繁に行われている地域のひとつであり、考古学的な新知見が数多く提出されている。この状況を踏まえて、時代ごと遺跡ごとに、当該地域の考古学的調査の成果を概観してみたい。

旧石器・縄文時代については、良好な遺跡が確認されていない。ただ、後述する中世大友府内町跡や近世府内城下町跡の整地層中から、二次的に移動した状態で縄文後晩期の土器片が出土することがあり、今後いずれかの地点で当該時期の遺跡が発見される可能性は考えられる。

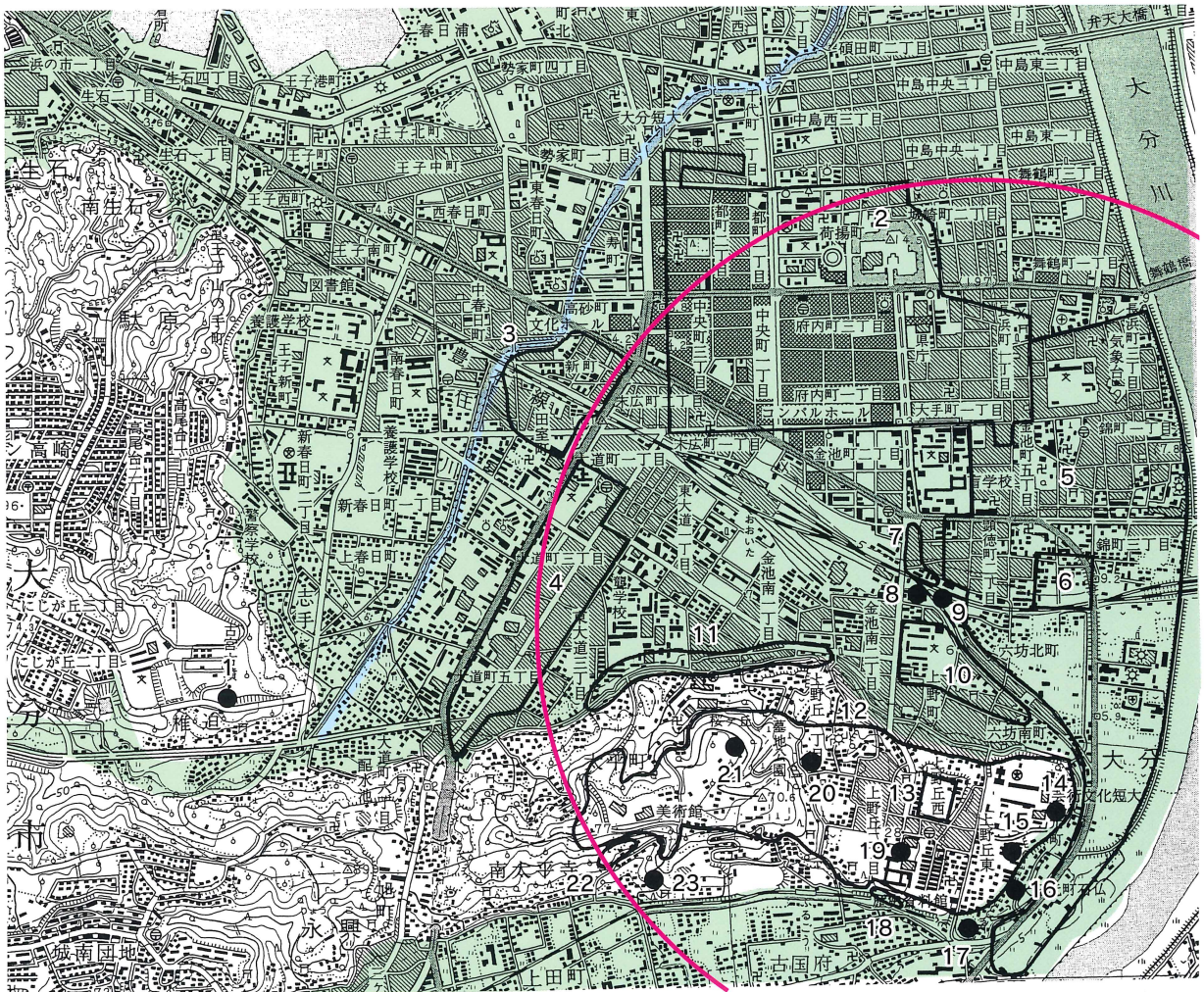
弥生時代・古墳時代になると、良好な集落遺跡の存在が知られてくる。**東田室遺跡**<sup>(1)</sup>は大分市田室町付近の沖積低地上に立地する遺跡で、マンション建設や大分駅周辺連続立体交差事業、市道春日田室線拡幅等に伴う調査が断続的に行われており、現在まで11次に及ぶ発掘調査が実施されている。弥生時代から中世までの複合遺跡であるが、弥生時代前期末と古墳時代前期の遺構群が主体となる。弥生時代前期末では袋状堅穴(貯蔵穴)群、古墳時代前期では集落を区画する溝遺構を伴う住居跡群が発見されており、それらは大分川を挟んで対岸(右岸)地域に位置する**下郡遺跡群**<sup>(2)</sup>に次ぐ規模をもつ拠点的な集落遺跡と評価してよい。2001・2002年度に大分県教育委員会が実施した3次調査では、壺形土器の肩部から胴部にヘラ描き文様を有する絵画土器が出土し、注目を集めた。庄の原佐野線建設に伴って発掘調査が実施された**東大道遺跡B地区**<sup>(3)</sup>では弥生時代後期前半の土坑が発見された。この遺跡からは、二次的に移動した状態ではあったが、後漢鏡片も採集されている。この周辺に当該時期の拠点的な集落の存在が想定される。さらに、2002年度に調査が実施された**東大道遺跡A地区**<sup>(4)</sup>や2003年度に調査が実施されている**若宮八幡遺跡**でも、弥生・古墳時代の住居跡・溝・流路等が調査されている。これらの遺跡が立地する沖積低地上に水田遺構や複数の集落跡の存在を予測させる事例が蓄積されているが、その詳細な解明については今後の課題となるであろう。また、上野台地にも弥生時代中期の集落跡が存在する。大分市美術館の建設に伴って、1992年に調査された**上野遺跡群**<sup>(5)</sup>では、弥生時代中期に比定される集落を区画するV字溝(環濠)・住居跡・貯蔵穴・内部に掘立柱建物を有する方形周溝遺構等が発見された。特に、方形周溝遺構の溝内部からは祭祀用の小型土器や丹塗り土器、鉄製ヤリガンナなどが出土しており、集落内における特殊な祭祀遺構としての位置づけがなされている。

古墳時代の墳墓である高塚古墳については、上野台地および駄ノ原・永興台地に存在する。このうち駄ノ原・永興台地は、今回の記述の対象外となる地域ではあるが、**亀甲古墳**については少し触れておきたい。この古墳は豊後地域で唯一の三角縁神獸鏡を出土した前期古墳で、その発見と調査は1911年(明治44年)に遡る<sup>(6)</sup>。主体部は箱形の石棺であるが、古い時期の調査であるため、墳丘の形状や遺物の出土状態等も不明な点が多く、古墳の名称や詳細な所在地についても研究史上混乱をきたしていた。近年、木村幾多郎氏によって名称や所在地についての再検討がなされた<sup>(7)</sup>が、残念ながら古墳の推定所在地はすでに宅地造成によって完全に消滅している。現在、東京国立博物館に所蔵されている出土遺物のうち、鏡については三角縁波文帯三神三獸鏡と仿製重圏文鏡が存在しており、舶載鏡と仿製鏡を副葬する前期古墳の中でも新相を呈する古墳と推定される。このような前期古墳と関連する集落遺跡としては、毘沙門川沿いの沖積低地である東田室遺跡が指摘され、亀甲古墳と同時期の4世紀後半代にも遺跡の最盛期が継続していることが確認されている。今後、東田室遺跡の調査が進行する中で、亀甲古墳との関連についても検討すべきテーマとなろう。一方、上野台地西端部には、前方後円墳として周知さ



れている大臣塚古墳がある。大臣塚古墳は江戸時代前期の寛永12年（1635）に大風によって墳丘上の巨松が倒れ、埋葬主体である石棺が露出している。当時の府内城主日根野吉明は、家臣の木口與左衛門・小倉九郎右衛門に命じて石棺を開口させた。石棺の中からは人骨・太刀・甲冑が出土し、これが伝説上の「百合若大臣」の墓であることを推定した。その後、出土遺物などの調書を作成し、遺物を石棺内に埋め戻した後、墳頂部に石碑を建立した（『豊府聞書』<sup>(8)</sup>）。これらの処置は元禄5年（1692）に徳川光圀が栃木県上侍塚古墳・下侍塚古墳<sup>(9)</sup>で行った調査に先立つこと57年前の出来事であり、近世前期段階での古墳調査と保護の事例としても注目すべき事象であろう。当該古墳は1997年に大分県教育委員会が実施した確認調査で円筒埴輪片等が出土し、その特徴から4世紀末～5世紀初頭の前方後円墳と考えられている。

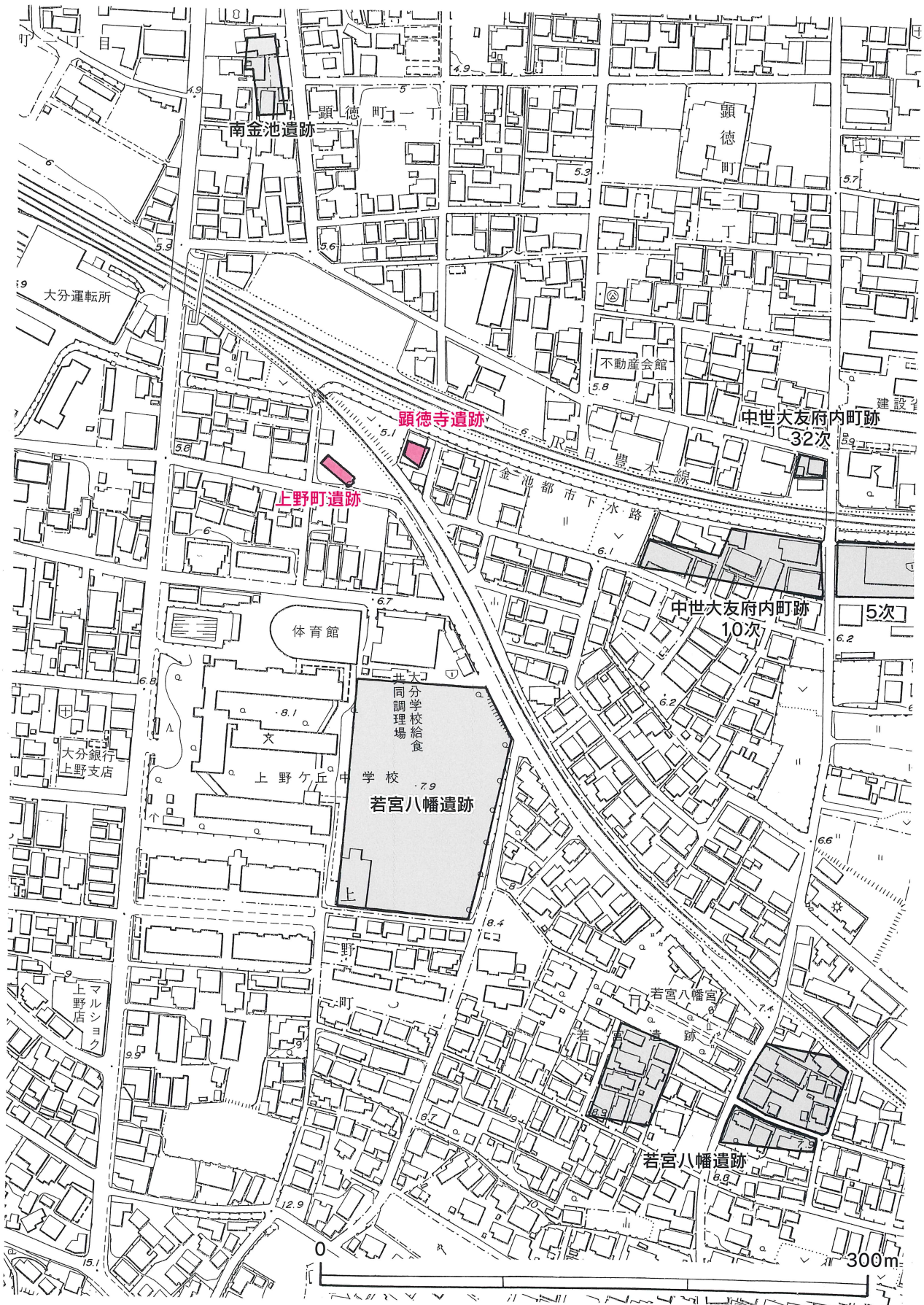
さて近年、豊後国府の中心施設が、当該地域に位置する上野台地周辺に設置されていたことを推定する仮説が有力になりつつある。従来、豊後国府は大分川左岸地域で上野台地の南側に所在する大分市古国府地区周辺の沖積低地上に想定されてきたが、この地域では国府関連施設の存在を考古学的に確認できない状況が長く続いている<sup>(10)</sup>。最近の古国府地区の発掘調査では、羽屋井戸遺跡・園遺跡<sup>(11)</sup>などの成果が注目される。特に、羽屋井戸



1. 古宮古墳 2. 府内城・近世府内城下町跡 3. 東田室遺跡 4. 大道条里跡 5. 中世大友府内町跡
6. 大友氏館跡 7. 南金池遺跡 8. 上野町遺跡 9. 顕徳寺遺跡 10. 若宮八幡遺跡 11. 東大道遺跡
12. 上野遺跡群 13. 上原館跡 14. 大臣塚古墳 15. 上野竜王畑遺跡 16. 大分元町石仏 17. 岩屋寺石仏
18. 岩屋寺横穴墓群 19. 上野遺跡群大分上野丘高校地区 20. 上野廃寺跡 21. 飯盛塚古墳 22. 南太平寺横穴墓群
23. 南太平寺伽藍石仏

第1図 上野町遺跡・顕徳寺遺跡と周辺の遺跡①(1/25,000)





第2図 上野町遺跡・顕徳寺遺跡と周辺の遺跡②(1/3,000)



遺跡では長大な規模の掘立柱建物や門状遺構・柵列などが検出されているが、それらの帰属年代は7世紀後半から8世紀初頭に遡り、評衙関連の遺構である可能性が想定されている。また、**園遺跡**<sup>(12)</sup>では一定のまとまりをもつ掘立柱建物や倉庫跡が確認されているが、出土遺物からは詳細な時期を確定できず、建物群の一部は古墳時代後期に遡る可能性もある。このように、古国府地域には今後の調査で7世紀後半から8世紀初頭に比定できる評衙関連施設の存在は想定されうるものの、8世紀以降の国衙関連施設の存在は、現状では困難であるという評価がなされつつあるのである。その一方、1997年に大分県教育委員会が実施した**上野遺跡群竜王畑遺跡**<sup>(13)</sup>の調査では、7世紀後半から10世紀代にかけてのまとまった大規模建物群が検出された。特に9世紀代の遺構群には、築地塀を構成すると推定される2条の溝遺構および築地塀の途切れる部分（門跡か？）・築地塀の南側に展開する掘立柱建物群などが、一定方位に沿って企画的に配置されている状況が看取され、これらが「国司館」の一部であった可能性が考えられている。竜王畑遺跡は上野台地の東端部に位置しており、遺構の展開がさらに西側に延びることが想定されることや遺跡の存続期間が7世紀後半から10世紀と奈良時代を前後する広範な時期におよんでいることなどが特記される。この調査を契機として、上野台地上に奈良時代以降の豊後国府関連施設の存在を想定する考え方が有力になってきた。翻って考えてみれば、上野台地上に豊後国府の国衙域を想定する考えは、竜王畑遺跡の調査以前にも存在した。1987年（昭和62年）、大分市史編纂委員会は上野台地の地籍図を検討する中で、平安時代後期に「高国府」と呼ばれた上野台地上の中央南端部、現在の**上野丘高等学校**付近に国衙域を想定している。ただし、大分市史の解説では、豊後国府が古国府から上野台地上に移転したのは「11世紀の中ごろ」以前としており、奈良・平安前期の国府はやはり古国府地域に考えていたようである<sup>(14)</sup>。2000年、上野丘高等学校の校舎改築工事に伴い、大分県教育委員会によって、大分市史による国衙想定地域内の一部の発掘調査が行われた（**上野遺跡群大分上野丘高校地区**）。当該調査は豊後国府の所在地問題に必ずや一石を投ずるものとして大きな期待が持たれたが、遺構残存状況の悪さと調査面積の制約から、極めて短期間で調査終了となった<sup>(15)</sup>。豊後国府の所在地問題は、いまだ未解決の課題として今後に残されている。

古代寺院に関する調査の進展もあった。上野台地の一面からは百済系単弁八葉軒丸瓦などの古代瓦が採集されることが知られており<sup>(16)</sup>、古代寺院（**上野廃寺**）の存在が想定されている地点があった。1997年、集合住宅建設に伴う発掘調査では8～9世紀代に比定される基壇遺構と基壇遺構上に梁行4間・桁行5間+ $\alpha$ の4面庇大型礎石建物が検出され、当該遺構が古代寺院を構成する堂宇の一部であることが判明した。軒丸瓦には百済系単弁八葉軒平瓦・複弁七葉蓮華文軒平瓦の2種がみられ、軒平瓦にも均整唐草文軒平瓦と豊後国分寺創建時所用瓦と同範の扁行唐草文軒平瓦の2種が認められた。しかしながら、伽藍配置や庇付大型建物の詳細な存続時期、軒瓦の組み合わせなど、現状で不明な点も多く、正式報告書の刊行が待たれる<sup>(17)</sup>。また、基壇遺構の下層には7世紀後半代の掘立柱建物遺構も複数棟確認されており、これらの建物群の性格解明も今後の課題となる。

上野町遺跡・顕徳寺遺跡が立地する上野台地北側の沖積低地に目を移してみよう。両遺跡はいずれも8世紀末～9世紀代を主体とするが、これらとはほぼ同時併存している集落遺跡が近隣で見つかっている。**南金池遺跡**<sup>(18)</sup>がそれで、全域に削平を受けているため、遺跡の遺存度がやや不良であるのが残念であるが、剝り抜きの井戸枠を有する井戸や焼塩用製塩土器が多量に廃棄された土坑などが検出されている。また、青銅製杓子の注口部破片など、特殊な遺物の出土もある。古代において、上野町遺跡・顕徳寺遺跡と南金池遺跡は一連の遺跡であった可能性も考えられ、特殊な遺構・遺物の状況は、国府周辺域の集落のあり方として注目すべき事象であろう。

11世紀後半以降、上野台地西部とその北・東側の沖積低地は、「高（隆）国府・勝津留」<sup>(19)</sup>と称されようになる。13世紀になると、大友氏がこの地域の支配権を掌握するようになり、この高国府勝津留の割譲を迫る文書が散見されるようになる。大友3代頼泰は、建長6年（1254）から文永6年（1269）の間に確実に関東から豊後に下向したといわれており、この点について渡辺澄夫氏は「頼泰が高国府を割譲させたことは守護所設置を前提」にしたもの<sup>(20)</sup>と解釈している。従って、これらの考え方を妥当なものとする、上野台地もしくはその北・東側の沖積低地上に大友氏の初期の守護所の存在が想定されることになる。この初期の守護所については、現在大分市顕徳町で調査が進行している「**大友氏館跡**」<sup>(21)</sup>あるいは上野台地上に位置する「**上原館跡**」を想定する考え

がある。しかし、大友氏館跡の発掘調査では16世紀後半代を最盛期として、15世紀前半代までの整地層・遺構群が確認されるのみで、13世紀代に遡る遺構は確認されていない。同様に上原館跡でも、館内部の調査データは不足しているものの、外郭土塁の断割り調査などで3段階の変遷が認められ<sup>(22)</sup>、一番古い時期でも15世紀を大きく遡らないことが明らかにされている。よって、このふたつの館跡が13世紀代に遡る施設である可能性は低く、初期の守護所はまた別の地点に求めなければならない。逆に、上野台地南側に位置する古国府地区の沖積低地上では、古国府字石明（石明遺跡）において13世紀代に限定される柱穴群、井戸、大型竪穴（池？）、溝状遺構（区画）が発見されている<sup>(23)</sup>。発掘調査は1978年から1984年にかけて数次にわたる調査が行われており、溝の規模や庭園遺構を思わせるような池状遺構のあり方は、これらが初期守護所の関連遺跡または当該時期の上級武士の邸宅跡である可能性を想起させる。しかしながら、当該遺跡は古代の豊後国府を探るという当時の考古学的な問題意識の中で、ネガティブな調査成果として提出された経緯もあり、調査時点で遺跡的確な評価が行われたとは言えず、また何よりも発掘調査の全貌がほとんど公表されていないという大きな制約がある。さらに、当該遺跡周辺に初期の守護館を想定するとしても、文献に記載された「高国府勝津留」の比定地問題や大友氏の豊後下向との関連についても再検討を行わなければならない。問題は山積している。大友氏の初期守護所の所在地についても、大きな検討課題として将来に残されている問題である。

戦国期で最も注目されるものは、大友氏館跡と中世大友府内町跡である。いずれも大分駅周辺総合整備事業など、近年の大分市内の再開発事業に伴って発掘調査が進められている。大友氏館跡と中世大友府内町跡は「中世大友城下町跡（中世大友府内城下町跡）」として周知されている遺跡で、大分川左岸地域における南北約2.2km、東西約0.7kmの沖積低地上に立地している。大友氏館跡は1998年に大規模な庭園遺構が確認されて以来、2町四方の規模を持つ大友氏の戦国期館跡と認定され、国庫補助事業によって、2004年1月現在14次にわたる調査が継続している。中世大友府内町跡は1996・1997年に行われた第1～3次調査で、幅10m以上の道路や備前焼大甕を並べた「甕倉」遺構が検出された。甕倉内の大甕あるいはその掘り方から、火災によって二次的に被熱した陶磁器類が多量に出土し、これらが天正14年（1586）12月の薩摩島津氏による府内侵攻に関連する遺物群であることが想定された。出土した陶磁器の中には備前や信楽など国内産の陶器とともに中国・朝鮮をはじめ、タイ・ベトナム・ミャンマーなど東南アジア産陶磁も認められ、大友義鎮（宗麟）の庇護のもとで行われた南蛮貿易の実態を物語るものとして、重要度の高い資料となった。中世大友府内町跡は2004年1月現在、37次にわたる調査が継続しており、大友氏の段米・大豆などを管理・収蔵した施設といわれる「御蔵場」の北西隅から北側の区画遺構の検出、キリスト教会である「ダイウス堂」に付属すると推定される墓地の調査、大友氏の菩提寺であり、迎賓館的な役割を果たしたといわれる「万寿寺」の北・東・南側の区画に関わる施設の調査など、多大な調査成果が掲げられる。特に、大友氏館正面の大路沿いに町屋が展開するなど、日本列島内の中世都市では従来知られていなかった都市景観が復元されつつあり、その調査成果は全国的にも大きな注目を集めている。

大友氏は22代義統の時期になると、急速に衰退を迎える。文禄2年（1593）、大友義統は文禄の役における朝鮮半島での失態を理由に、豊臣秀吉より豊後国を改易される。その後、大友領国であった豊後は複数の豊臣系大名によって分割統治されることになる。そのうちのひとつである大分郡には早川長敏、次いで福原直高が入部し、福原直高は新たに大分川河口付近の「荷落」（現在の大分市荷揚町）の地に、近世城郭としての府内城の建設に着手する。関ヶ原の戦い（1600年）以後、徳川政権に移行した後に府内藩主となるのは、竹中重利である。慶長6年（1601）、豊後高田から転任した竹中重利は府内城の増修築を行い、翌年慶長7年（1602）には旧府内町から新しい府内城下へと町の移転を行う<sup>(24)</sup>など、近世府内城と城下町の整備に尽力した。さらにその後、寛永11年（1634）に日根野吉明、万治元年（1658）に大給松平忠昭と城主が変わり、以後廃藩置県に至るまで大給松平氏が府内藩2万2千石を領有し、10代にわたる藩主を輩出している。近世府内城下町跡（府内城・城下町跡）<sup>(25)</sup>についても、大分県教育委員会・大分市教育委員会によって、15次にわたる考古学的調査が行われ、現在に至っている。

## 註

- (1) 大分市教育委員会『東田室遺跡—大分市田室町所在遺跡の発掘調査報告書—』(1999年)  
東田室遺跡は第1次調査の内容のみが報告書として刊行されており、第2次から第11次調査の概要については現在整理中あるいは報告書作成中である。
- (2) 大分県教育委員会『下郡桑苗遺跡—七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書—』(大分県文化財調査報告書第80輯 1989年)  
大分県教育委員会『下郡桑苗遺跡Ⅱ—弥生時代のブター—』(大分県文化財調査報告書第89輯 1992年)  
大分市教育委員会『下郡遺跡群』(大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(1) 1990年)  
大分市教育委員会『下郡遺跡群』(大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(2) 1991年)  
大分市教育委員会『下郡遺跡群』(大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(3) 1992年)  
大分市教育委員会『下郡遺跡群』(大分市下郡地区土地区画整理事業に伴う発掘調査概報(4) 1993年)
- (3) 大分県教育委員会『東大道遺跡(B地区)—庄の原佐野線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(1)—』(大分県文化財調査報告書第145輯 2002年)
- (4) 大分県教育委員会によって、2004年3月報告書刊行予定。
- (5) 讃岐和夫「上野遺跡群」(『大分市文化財調査年報3—平成3年度—』大分市教育委員会 1992年)
- (6) 日名子軸軒「大分三芳の古墳発見」(『考古学雑誌』第1巻第9号 1911年)
- (7) 木村幾多郎「大分市亀甲古墳の所在地について」(『おいた考古』第11集 1999年)
- (8) 大分市史編纂審議会『大分市史』(上巻 1955年)472・473頁参照。
- (9) 斎藤忠・大和久震平『那須国造碑・侍塚古墳の研究』(1986年 吉川弘文館)
- (10) 讃岐和夫「豊後国府推定地周辺の発掘調査—大分市古国府・羽屋地区の調査から—」(『大分県地方史』第117号 大分県地方史研究会 1985年)
- (11) 坪根伸也・塩路潤一「豊後国府推定地周辺の発掘調査Ⅱ—羽屋・井戸遺跡のその周辺の調査から—」(『大分県地方史』第163号 大分県地方史研究会 1996年)
- (12) 大分市教育委員会『園遺跡—大分市都市計画道路古国府木ノ上線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—』(1992年)
- (13) 高橋信武「上野遺跡群竜王畑遺跡の発掘調査—豊後国府関連遺跡の発見—」(『大分県地方史』第173号 大分県地方史研究会 1999年)
- (14) 大分市史編さん委員会「大分市史(中巻)付図Ⅰ—上野台地の地籍図—」(『大分市史』中巻 1987年)
- (15) 大分県教育委員会『上野遺跡群大分上野丘高校地区—大分上野丘高校管理棟増築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—』(大分県文化財調査報告書第123輯 2001年)
- (16) 小田富士雄「百済系単弁軒丸瓦考・その1」(『史淵』95 1966年)(後に『九州考古学研究 歴史時代篇』学生社 1977年に収録)  
また、1989年に大分市教育委員会が金剛宝戒寺東側で実施した発掘調査でも、中世の遺構から混入の状態で大分瓦が多量に出土した。  
大分市教育委員会『上野遺跡—金剛宝戒寺東側における発掘調査報告書—』(1990年)
- (17) 讃岐和夫「上野遺跡群(上野廃寺)」(『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 大分市教育委員会 1999年)
- (18) 姫野公徳・宮田剛「南金池遺跡第2次調査」(『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10 大分市教育委員会 1999年)
- (19) 木村幾多郎「高国府・勝津留考」(『Funai—府内及び大友氏関係総合調査研究年報Ⅴ—』大分市歴史資料館 1996年)参照。
- (20) 渡辺澄夫「豊後国府と守護所」(『増訂豊後大友氏の研究』収録 1982年)
- (21) 大分市教育委員会『大友館跡—発掘調査概報Ⅰ—』(2000年)  
大分市教育委員会『大友館跡—発掘調査概報Ⅱ—』(2001年)  
大分市教育委員会『国指定史跡大友氏館跡—発掘調査概報Ⅲ—』(2002年 『大分市市内遺跡確認調査概報—2001年度—』収録 2002年)  
大分市顕徳町に所在する大友氏関連の守護館は、当初「大友館跡」と命名されていたが、2001年度における国の史跡



指定を契機に「大友氏館跡」と遺跡名を改称した。以後、「大友氏館跡」が遺跡の正式名称となる。

(22) 河野史郎「上野大友館（上原館）跡第4次調査」（『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 大分市教育委員会 2000年）

(23) 註(10) 文献および大分市教育委員会『市立豊府小学校建設建設地緊急発掘調査概報』（1974年）

(24) 木村幾多郎「豊後府内城下町移転と旧府内町」（『大分・大友土器研究会論集』2001年）

慶長7年（1602）に竹中重利が行った中世府内町から近世府内町への町人移転により、中世大友府内町は遺跡としての終焉を迎えることになる。従って、この時期（慶長7年＝1602）を中世大友府内町跡の時期的な下限と解釈することができる。

(25) 近世府内城下町関係で、報告書・概報が刊行されているものは、以下の通りである。

大分県教育委員会『府内城三ノ丸遺跡－大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（1993年）

大分県教育委員会『府内城三ノ丸遺跡Ⅱ－大分県共同庁舎前広場モニュメント建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（1994年）

大分県教育委員会『府内城三ノ丸北口跡－大分中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（1996年）

大分県教育委員会『府内城下町遺跡－国道197号線高砂歩道橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』（1996年）

大分市教育委員会『府内城・城下町遺跡－第13次発掘調査概報－』（2000年）

## 第2章 上野町遺跡

### 1. 調査の概要と基本層序

上野町遺跡は、大分県大分市上野町1番地に所在する古代（平安時代）を主体とした遺跡である。遺跡は大分川左岸の標高約3.6mを測る沖積低地上に立地し、南側約600mの地点には上野台地が展開する。近年、この上野台地上に豊後国府および国衙関連施設の存在を推定する考え方が有力となってきており、上野町遺跡は豊後国府周辺域に存在する平安時代の遺跡のひとつとして注目される。また、遺跡の西側約50mには本書に収録した顕徳寺遺跡があり、平安時代の遺物包含層が検出されている。

上野町遺跡は、1999年（平成11年）9月に大分県教育委員会が実施した大分駅付近連続立体交差事業に伴う試掘調査で、初めて確認された。試掘調査では古代の土器と土錘などを包含する遺物包含層の存在を確認したため、本調査の必要性を開発主体である大分駅周辺総合整備事務所に回答した。遺跡の本調査は2002年（平成14年）1月7日から2月27日までの約2箇月間実施する運びとなり、遺物包含層の分布範囲や排土置き場などを考慮しながら、最終的な発掘調査面積を約135m<sup>2</sup>に絞り込んだ。

上野町遺跡では、旧表土上に近年の造成による置土が2.5mほど堆積している。この造成土を除去すると、旧表土と近代・近世以降の水田層（0層群）が堆積する。発掘調査では0層群以上を大型重機によって除去し、I層以下については発掘作業員を投入して手掘りによって掘り下げを行った。上野町遺跡では中世・古代・弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構・遺物が良好な状態で重層的に堆積しており、複数の遺構面が存在している。調査区の南壁および西壁に接する部分に設定したトレンチによる土層の観察所見から、調査対象とする堆積層を5層に大別し、I層上面・II層下面からIV層中・V層上面で遺構検出を行った。その結果、それぞれの面で16～13世紀、9世紀中頃～後半、8世紀末～9世紀前半および弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の遺構・遺物を確認することができた。

遺跡の基本層序は下記の通りである（第4図）。

**I層**（黄褐色粘質土）は調査区全域を覆うように堆積しており、近世以降の水田形成により、上面を若干削平されている可能性がある。I層中から出土した遺物で、原位置を確認できたものはすべて13世紀代に限定されることから、当該土層の形成年代は13世紀代と推定される。この層の上面からは16世紀代の遺構が掘り込まれており、当該土層の上面は戦国期の遺構の検出面となっている。

**II層～IV層群**はI層下位に堆積する土層群で、平安時代（9世紀中頃～後半以降）の遺物を包含する。いずれも調査区南側を斜めに横走するように堆積しており、堆積の範囲は調査区南側で検出された落ち込み（S X 008）の上面部分とはほぼ一致する。III層（暗灰褐色粘質土）は黒色化が進んでいる部分が認められ、一時期旧地表面であった可能性が考えられる。II層はIII層上位に堆積する整地層と考えられる。また、調査区西側で検出された溝遺構S D 002は、南壁土層の観察から、III層上面より掘り込まれていることが確認された。さらに、土錘1個体が出土した土坑S K 003はII層中もしくはIII層上面から掘り込まれており、土師器坏5個体が一括廃棄された土器集中部S X 007はIV層群の上面で検出している。IV層群はIII層下に堆積する土層群で、シルト層・粘質土・砂質土などで構成される。このうちIV-2層（黄褐色砂質土）・IV-3層（灰青褐色砂質土）中には多量の土錘が包含されており、この堆積部分はS X 006と呼称することにした。IV層群中には砂層と粘質土の互層が認められる部分が存在し、落ち込み（S X 008）がほぼ完全に埋没した後にわずかではあるが、流水が認められた時期があったことが確認された。II～IV層群については各層の堆積が調査区全域に及んでいるわけではないので、個々の遺物の層位的な帰属が曖昧にならざるを得なかったものが存在する。従って、本報告では当該層からの出土遺物を一括して報告するが、当該層群の形成については一定時間の経過が認められ、出土遺物にもやや長い時間幅の遺物を包含する可能性が考えられる。出土遺物の中には、円面硯（圈足硯）や風字硯状土製品などの硯関連資料や全国的にも出土事例が少ない長沙窯系黄釉褐彩水注片などがあり、注目される。

V層群はIV層群を除去した段階で検出された土層群で、平安時代（8世紀末～9世紀前半）の遺物を包含する。この土層群は落ち込み（S X008）の埋土となり、一部に砂質土の堆積が認められるものの、大部分は滞水の状況を示している。そのため、出土遺物の中には一定量の流木や植物遺体、木製品が認められた。V層群から出土した土器群は、II層～IV層群のものより、型式学的に見て明らかに古相を呈しており、その特徴から8世紀末～9世紀前半の年代を推定している。出土遺物として注目されるものには、「草」「字代」「一」「春」と判読できる墨書土器や円面硯（圈足硯）などが掲げられる。

その他、調査区北西側の地山面と考えた層の直上より、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の土器を少量検出している。

以上で記述してきた検出遺構と層位との関係を時代別にまとめると、下記のようなになる（第3図）。

#### 中世

層位：I層

遺構：土坑S X001（16世紀後半）  
杭列S X004

#### 古代1（9世紀中頃～後半）

層位：II～IV層群

遺構：溝S D002・土坑S K003・  
土錘集中部S X006・土器集中部  
S X007・落ち込みS X008

#### 古代2（8世紀末～9世紀前半）

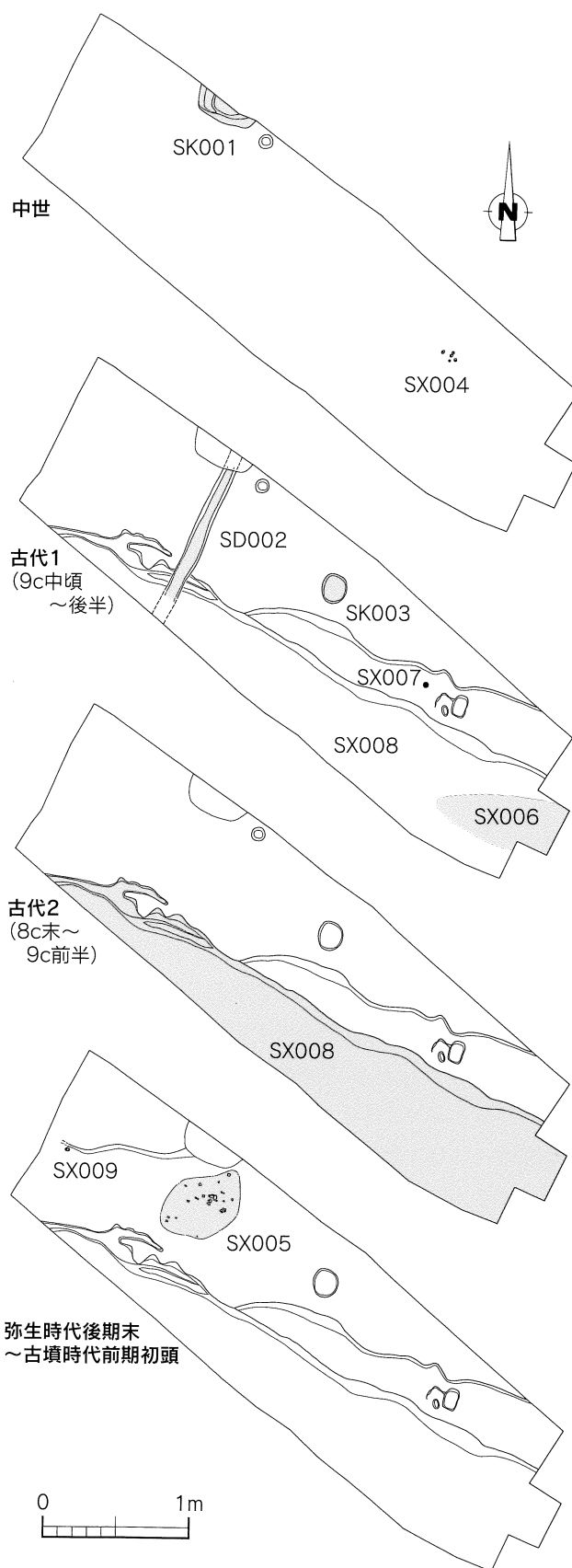
層位：V層群

遺構：落ち込みS X008

#### 弥生時代後期末～古墳時代前期初頭

層位：調査区北西側の地山直上

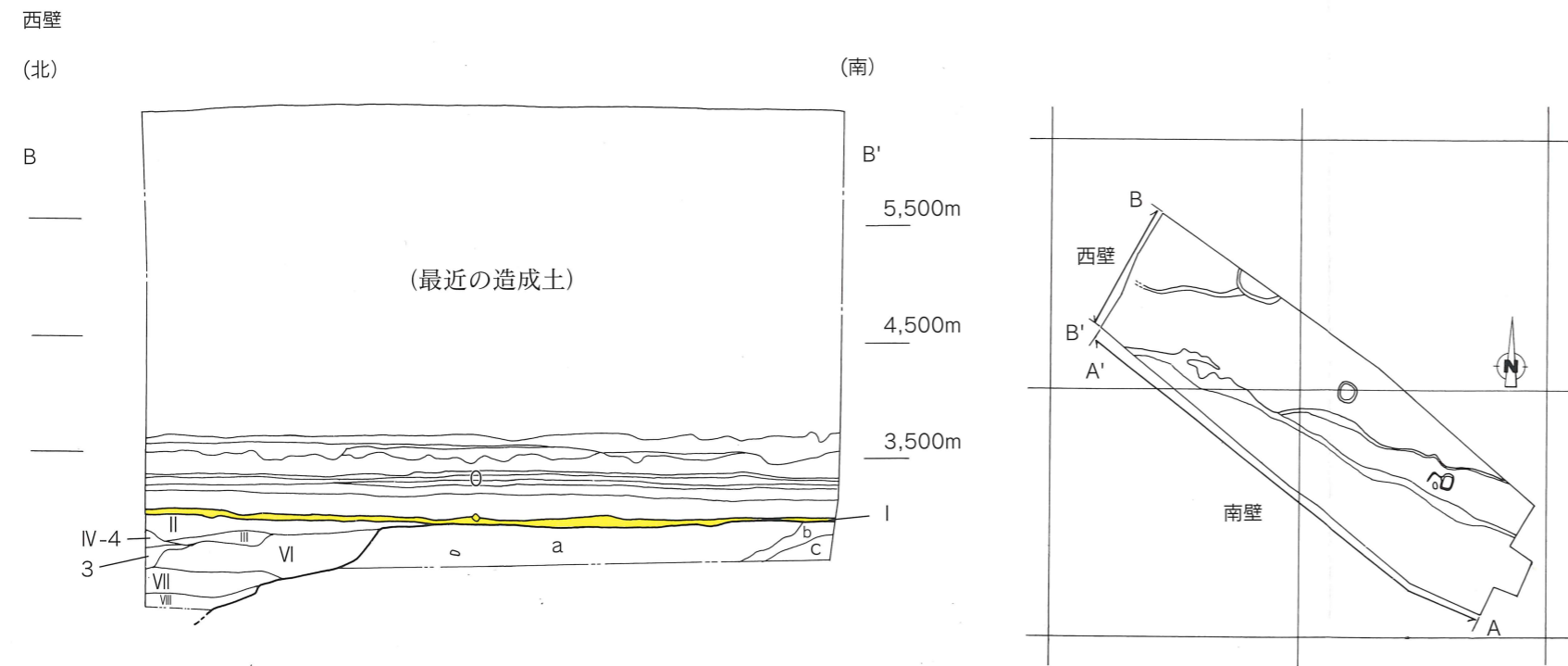
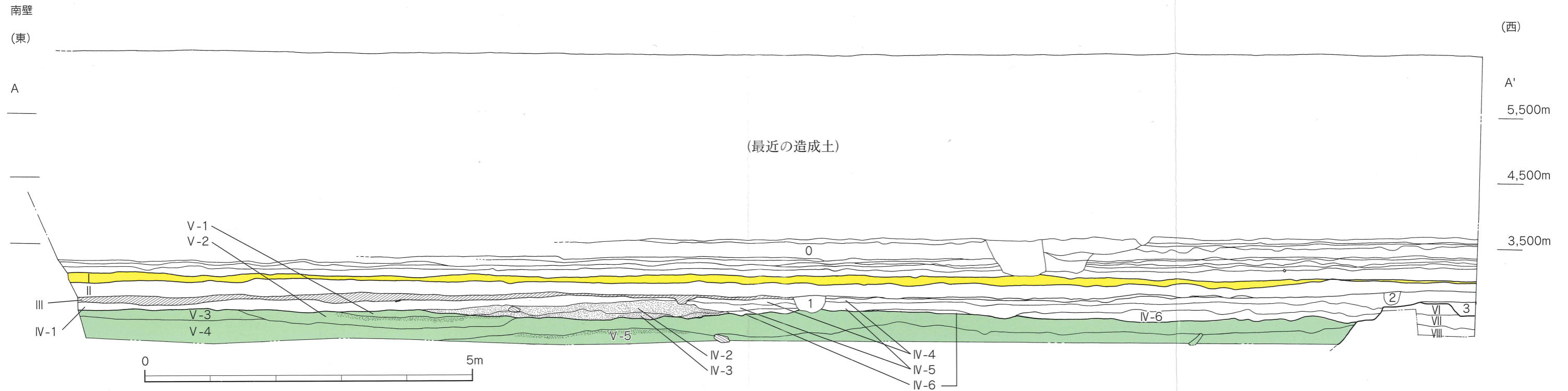
遺構：土器溜めS X005・  
複合口縁壺出土地点S X009



第3図 上野町遺跡遺構変遷図(1/240)

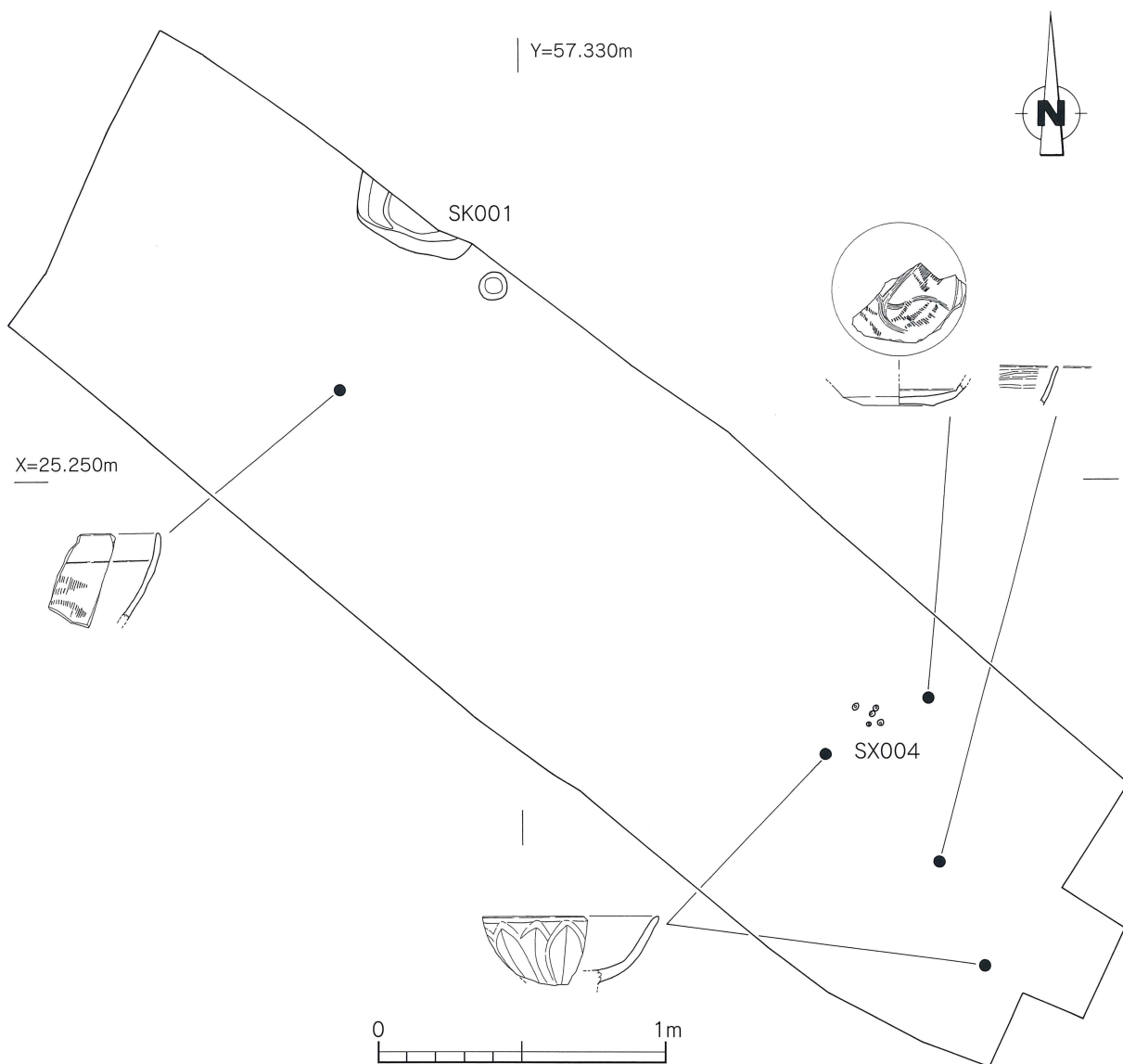
以下、時代順に遺構・遺物を紹介する。





第4図 調査区北壁・南壁土層図(S=1/60)

- 0 現代の整地土および近世の水田層
  - I 黄褐色粘質土 (13世紀代の整地層)
  - II 灰黄褐色粘質土 (古代…9世紀中頃～後半の包含層)
  - III 暗灰褐色粘質土 (古代…9世紀中頃～後半の包含層)
  - IV-1 灰黄褐色砂質シルト (マンガンの一部含む)
  - IV-2 黄褐色砂質土 (土錘を多量に含む・S X006に対応)
  - IV-3 灰青褐色砂質土
  - IV-4 暗黄褐色粘質土
  - IV-5 暗灰褐色粘質土
  - IV-6 黄灰褐色粘質土
  - V-1 灰褐色砂質シルト
  - V-2 灰褐色砂質シルト (砂質土を多く含む)
  - V-3 灰青褐色砂質シルト
  - V-4 灰茶褐色粘質土
  - V-5 深緑灰色砂質シルト
  - VI 暗赤褐色粘質土  
(極めて硬い。上位に古墳時代初頭の土器が散布)
  - VII 黄灰白色砂質シルト
  - VIII 淡灰青色砂質シルト
- 1 暗褐色粘質土 (S D003の埋土)
- 2 暗灰色粘質土 (遺構埋土か?)
- 3 暗褐色粘質土 (遺構埋土か?)
- a 青灰茶褐色砂質土 (粗砂層)
- b 黄褐色砂質土  
(細かい砂であるが、締まっている。硬め。)
- c 青灰茶褐色砂質土



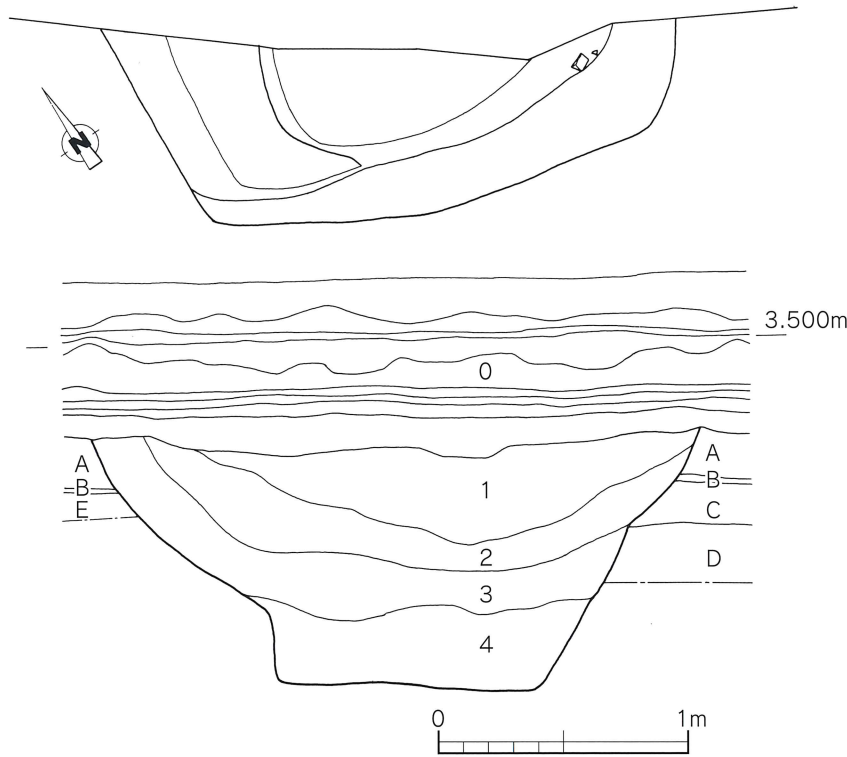
第5図 遺構配置図・中世(1/120)

## 2. 遺構・遺物の概要

### ①中世の遺構・遺物

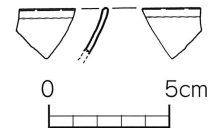
**概要** 本報告でI層とした黄褐色粘質土は10~20cmを測り、調査区全体をパックするような状況で堆積している整地層である。その上位には近世以降の水田(湿田)層と判断される層群が堆積している。I層出土遺物として取り上げた遺物には12~16世紀代のものが混在するが、原位置で把握できた特徴的な遺物はすべて13世紀代に限定されるため、I層の形成時期は13世紀代と判断した。このI層は近世以降の水田層形成時に上面を削平されていると考えられるが、当該層の上面を遺構面として土坑・柱穴・杭列等が検出された。

中世の遺構については、I層上面で検出された土坑S K001、径約50cm、深さ10cmを測る柱穴1基および杭列S X004がある(第5図)。土坑S K001は出土遺物から16世紀後半代に比定されるが、柱穴については出土遺物がないため、詳細な時期は不明である。また、調査区の制約のため、柱穴の性格も現時点では不明といわざるを得ない。杭列S X004は少なくともI層上面以上の層位から打ち込まれているものと推定され、その形成時期が近世以降に降る可能性も考えられるが、詳細な時期は不明である。



第6図 土坑SK001実測図(1/30)

- 0 近世以降の堆積層
- 1 暗茶褐色粘質土
- 2 灰白色砂質土  
(下面と整合。下面は掘り直し時の土坑下底ラインか?)
- 3 灰青粘質土
- 4 灰青褐色粘質土
- A 黒褐色粘質土  
(中世以降の遺物包含層か?)
- B 黄褐色粘質土  
(本文のI層に対応)
- C 黄茶褐色砂質土
- D 黄褐色砂質土
- E 黄茶褐色砂質土  
(多くの砂利を含む)

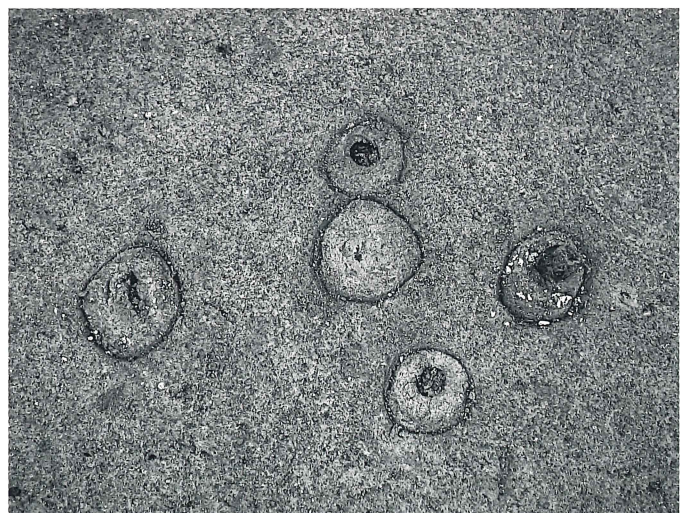


第7図 SK001出土遺物(1/3)

**土坑SK001** (第6図) 調査区北西側で検出された土坑である。最大長約2.3m、最大幅約0.65m、深さ約90cmを測る。北側は調査区の制約のため、検出できていない。断面形態は見かけ上、2段掘りのような形態を呈する。土層観察の結果から、2基の土坑が重複しているか、あるいは掘り直しが行われた可能性が高い。出土遺物は上位の土坑から中国産青花と備前焼甕片が出土したのみで、下位の土坑からの出土遺物は認められなかった。遺構の年代は16世紀後半代に比定される。

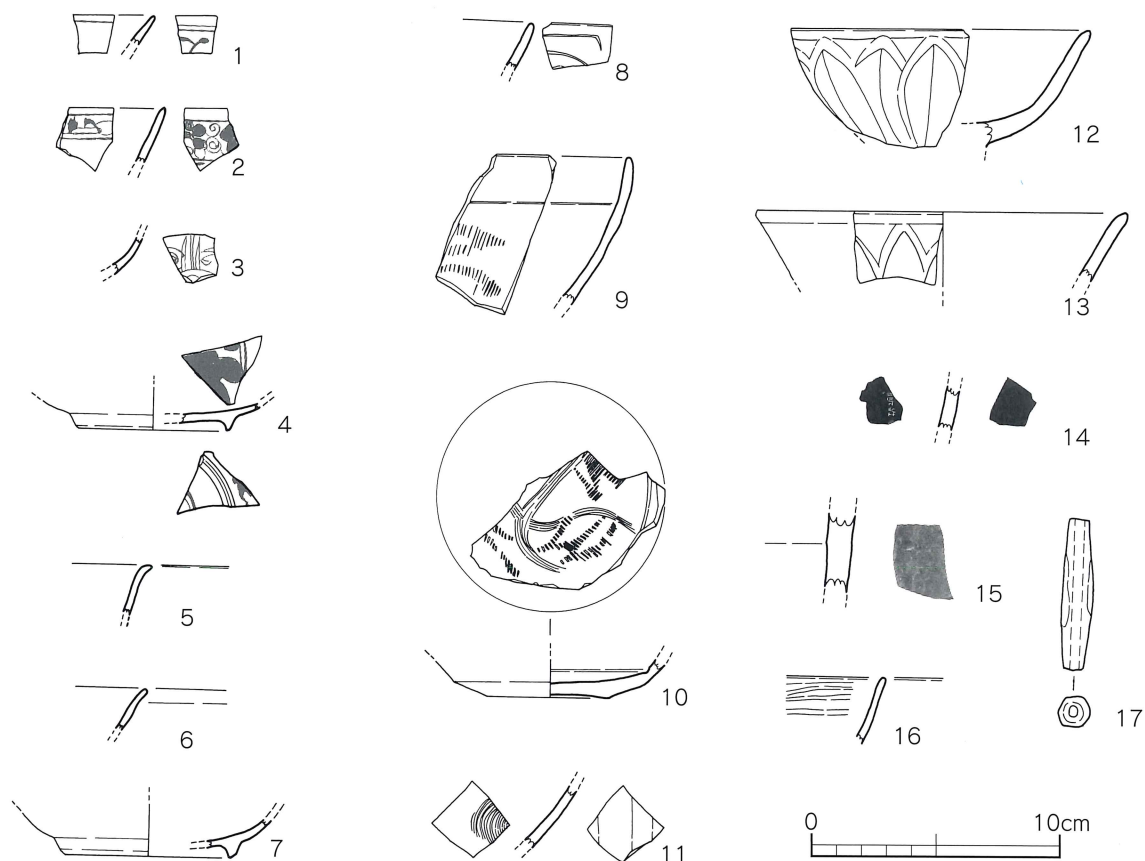
**出土遺物** (第7図) 第7図は中国景德镇系青花碗の口縁部破片である。口縁部付近の内外面に1条の圈線を巡らす。文様・器形の特徴から、小野正敏分類E群青花碗(饅頭心碗)の口縁部と推定され、16世紀後半代の所産と思われる。その他、図示していないが、備前焼大甕と思われる胴部破片が1個体出土している。

**杭列SX004** (第8図) 調査区東側で検出された杭列である。5本の杭が少なくともI層上面以上の層位から打ち込まれていることが観察された。しかし、この層の上面が削平を受けているため、杭が打ち込まれた層位の確認は不可能であった。そのため、当該遺構の形成時期は近世以降に降る可能性も考えられるが、その詳細な時期は不明である。周辺にも当該遺構に関連するような出土遺物は認められなかった。



第8図 SX004検出状況



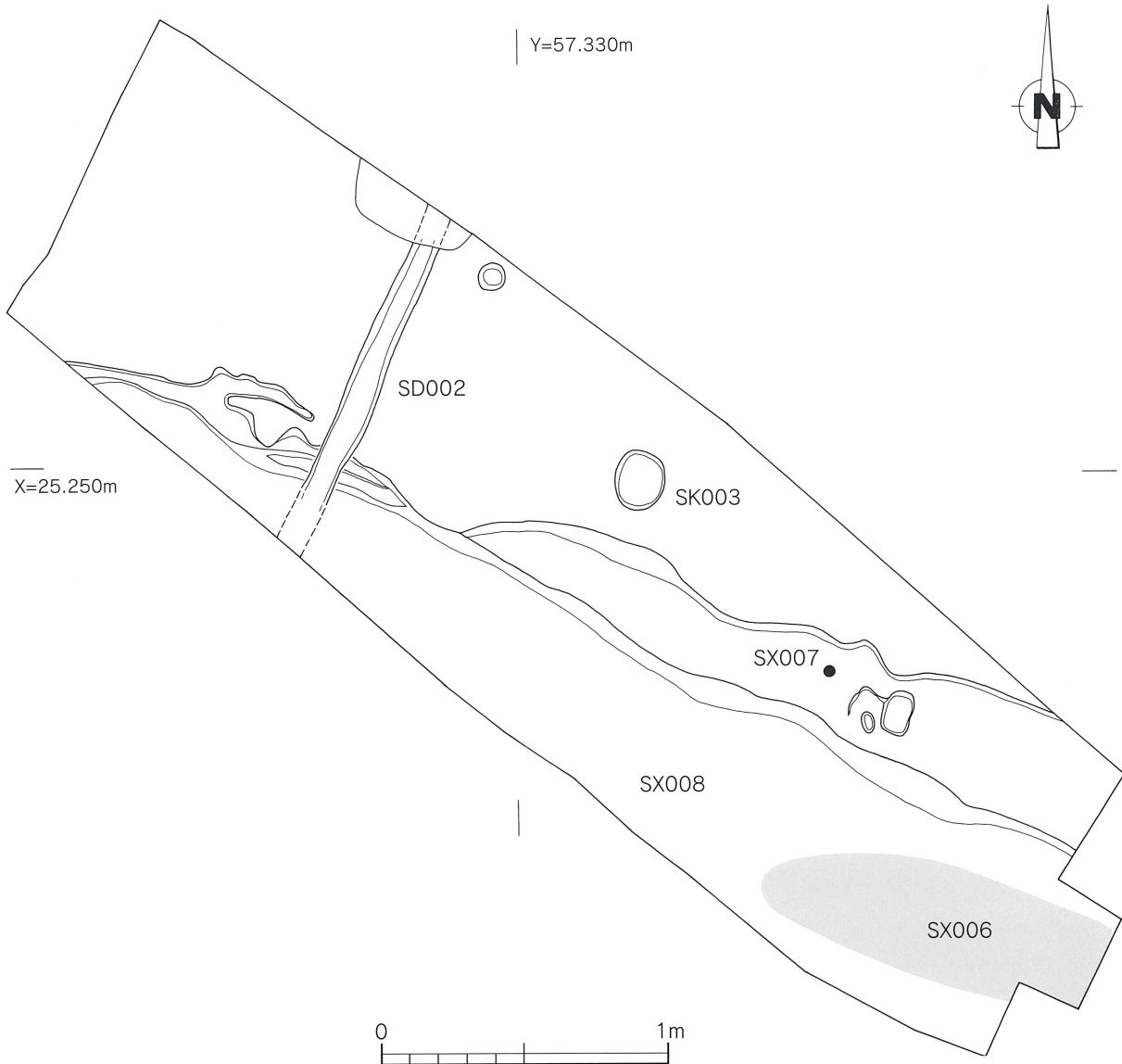


第9図 I層出土遺物(1/3)

**I層出土遺物**（第9図） 1～4は中国景德鎮系青花である。1・2はE群青花碗の口縁部で、16世紀後半代の所産である。3は青花碗高台付近の胴部片で、外面のみに文様が描かれる。16世紀末から17世紀前半代の製品。4はE群青花皿で、内底部に二重圏線が描かれる。おそらくこの圏線内に銘款を有している製品と思われるが、欠損のため不明である。16世紀後半代の製品である。5～7は中国景德鎮系白磁皿の口縁部および底部で、これらも16世紀代の製品である。8は中国龍泉系雷文帯青磁碗の口縁部で、14世紀後半から15世紀前半代に比定される。9は中国同安系青磁碗で、横田賢二郎・森田勉分類の碗I-1類に相当する製品である。外面は無文で、内面には櫛状工具によるジグザグ文様を施す。また、内面上位には沈線が施文される。13世紀代の製品。10は中国同安系青磁皿で、I-1 b類に分類される。内面には片彫りと櫛によるジグザグ文様が認められる。これも13世紀代の製品である。11は中国龍泉系青磁碗で、外面に鎬蓮弁文、内面に櫛描文を有する。13世紀代の製品。12・13は中国龍泉系鎬蓮弁文青磁碗（I-5 b類）で、12世紀後半から13世紀代に比定される。14はいわゆる「禾目天目」といわれる中国産天目碗の胴部小片である。12～13世紀代の製品であろう。15は瀬戸美濃産灰釉陶器瓶の胴部小片で、これも12～13世紀代の製品である。16は和泉型瓦器碗の口縁部破片で、内外面にヘラミガキを施す。13世紀前後の製品と推定される。17は管状土錘である。土錘は後述するII～IV層中（9世紀後半代）から多量に出土しており、当該遺物も本来この層に帰属する遺物であった可能性が高い。

以上、I層からの出土遺物は12～16世紀代のものが混在するが、原位置で把握できる特徴的な遺物はすべて13世紀代に限定される（第5図参照）。従って、I層の形成時期は13世紀代に比定されるものであろう。





第10図 遺構配置図・古代①(1/120)

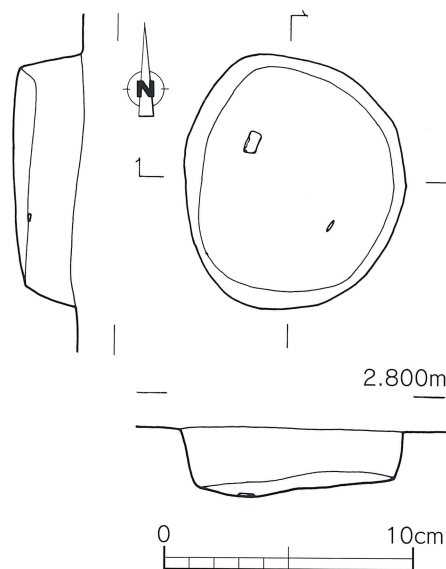
## ②古代の遺構・遺物 1

**概要** 本報告でⅡ～Ⅳ層群とした土層群は、古代（9世紀中頃～後半）の遺物を含む包含層である。当該層群は南側に厚く、北側に薄く堆積しており、地形に沿った堆積の状況が認められる。このうち、Ⅲ層は旧地表土と考えられる暗褐色粘質土で、調査区南東半分を主体に分布する。Ⅱ層はⅢ層の上位に堆積する整地層の可能性が高い。Ⅳ層群は後述する落ち込み（S X008）の最上位に堆積する層群で、上位に相当する灰黄褐色砂質土等と下位に相当する黄褐色砂質土から構成されており、下位の砂質土中には土錘の集中部（S X006）が包含されている。落ち込み（S X008）がほぼ完全に埋没し、機能停止した後に堆積した層群である。

本期に帰属する遺構群としては、溝S D002、土坑S K003、土師器坏5個体の集中部S X007、土錘集中部S X006がある。Ⅲ・Ⅳ層群の分布が調査区全体に及ばないため、各遺構と層位の関係を厳密には特定できないものがあるが、溝S D002はⅢ層上面から、土坑S K003はⅡ層中あるいはⅢ層上面から掘り込まれて構築されている。また、土師器坏の集中部S X007および土錘集中部S X006はⅣ層群中に包含されている。

Ⅱ～Ⅳ層群中には、土師器類や土錘を主体に多量の遺物が包含される。調査時にはそれぞれの遺物を層位毎に取り上げることが意図したが、各層の堆積が調査区全域に及んでいるわけではないので、個々の遺物の層位的な

帰属については曖昧にならざるを得なかったものも存在する。そのため、本報告ではⅡ～Ⅳ層群の出土遺物を一括して報告したい。従って、本層群中に含まれる遺物は一定の時期幅を含むものと判断されるが、その年代幅は出土遺物の様相から9世紀中頃から後半を主体とするものと推定される。注目すべき遺物としては、S X006から出土した大型土錘79個、小型土錘339個のほか、包含層中から長沙窯系黄釉褐彩水注片、円面硯（圈足圈）2個体、風字硯形土製品等がある。



第11図 土坑SK003実測図(1/30)

**土坑SK003** (第11図) 調査区中央北側で検出された平面形態が円形を呈する土坑である。最大長約1m、最大幅約0.75m、深さ26cmを測る。遺物は床面付近から管状土錘1点が出土したのみで、他は土師器細片数点が認められるのみである。遺構が調査区北側に位置しているため、掘り込み面は確定できないが、Ⅱ層中あるいはⅢ層上面から掘り込まれて構築されている。層位的な所見から、9世紀後半の遺構と考える。

**出土遺物** (第12図) 第12図は上端部を欠損する管状土錘である。遺物はこの1点に留まる。



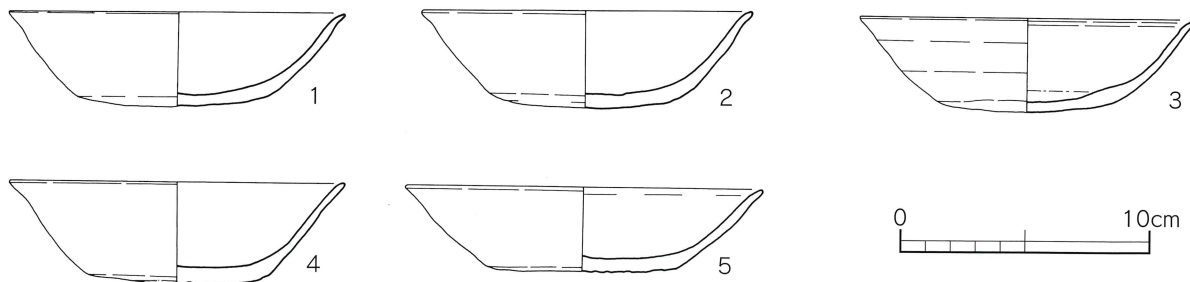
第12図 SK003出土遺物(1/3)

**土器集中部SX007** 調査区西側中央付近に位置する約0.5m四方の地点で、土師器坏5個体の集中部を検出した。この集中部をS X007とする。S X007はⅣ層群中に包含されており、周囲に土色・土質の変化が認められないことから、土坑等の掘り込み遺構を伴うものではない。遺物の出土状態から当該地点に一括廃棄されたものと考えられ、出土した土師器坏5個体は良好な一括資料と考えられる。

**出土遺物** (第14図) 1～5は土師器坏である。黄白色系の色調を呈し、口縁部が若干外反する器形となる。底部はいずれもヘラ切りによるものであるが、ヘラ切り後にナデ調整を施すもの(1～3)とナデ調整をほとんど行わず、粘土紐巻き上げの痕跡を顕著に残すもの(4・5)とがある。内外面はナデ調整を主体とし、ヘラミガキは認められない。9世紀後半の所産と考える。

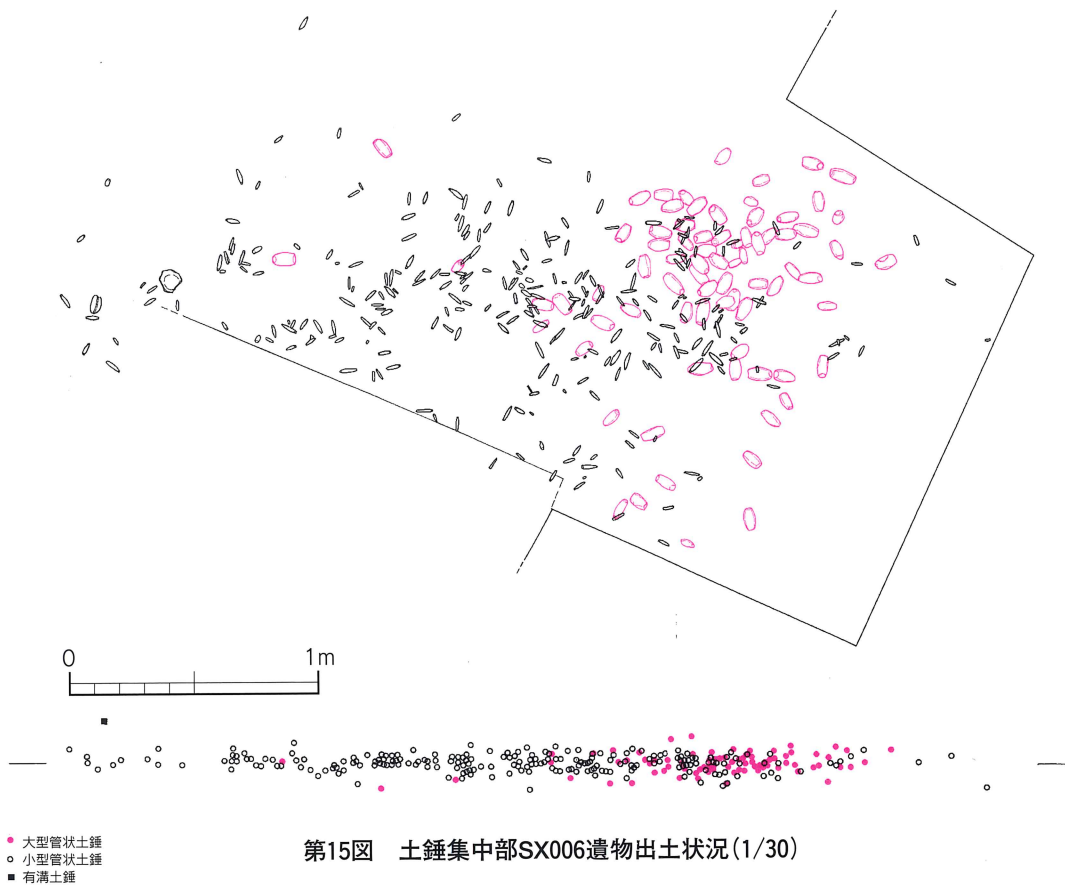


第13図 土器集中部SX007



第14図 SX007出土遺物(1/3)

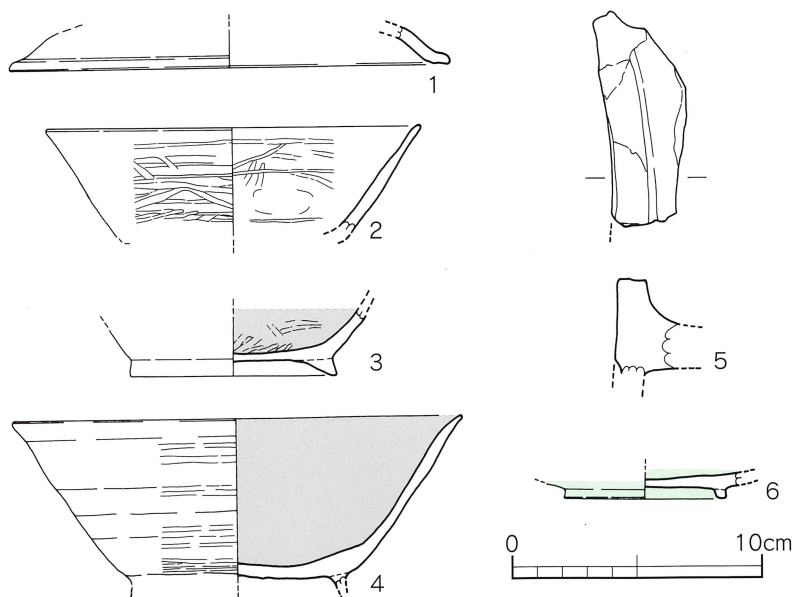
**土錘集中部SX006** (第15図) Ⅳ層群下位の砂質土中から検出された土錘の集中部である。検出地点は調査区南東隅部付近で、遺物の出土状況に応じて調査区を東側に拡張している。土錘は大型の管状土錘78個、大型の有溝土錘1個、小型の管状土



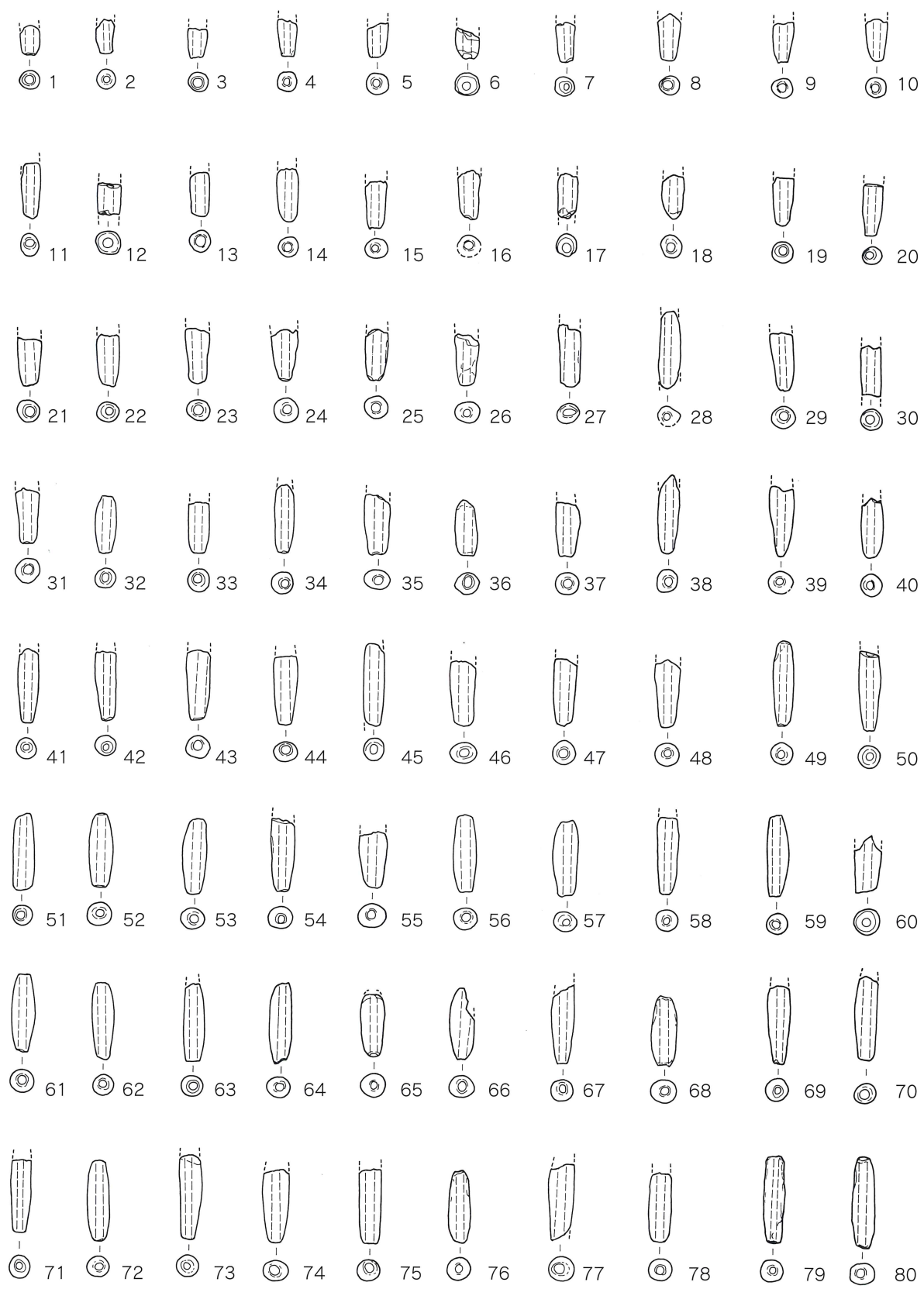
第15図 土錘集中部SX006遺物出土状況(1/30)

錘339個からなる。個々の土錘には、水流などにより若干の移動が認められるものもあるが、その出土状況から魚網が廃棄された状況を示している可能性が考えられる。大型土錘はその大半が約1.5m×1.2mの範囲でまわっており、海洋性の魚類を捕獲するための漁網に装着されていたものと思われる。小型土錘は約3m×1.3m程度の楕円状の分布範囲を呈するが、大型土錘と比較するとやや疎散的な分布といえる。大型土錘と小型土錘の分布範囲は重複する部分も認められるが、両者はセットで使用されていたわけではなく、複数の漁網が廃棄された状況を呈していると解釈した。土錘集中部周辺の土層には土色・土質の変化が認められないことから、土坑等の掘り込み遺構を伴うものではない。後述する落ち込み（SX008）がほぼ埋没し、機能停止した時点で、自然に生じた窪地状の地点に漁網を廃棄したと推定される。なお、土錘類に混在して、土器片等の遺物も少量出土している。層位的な所見や出土土器類の年代観から、9世紀後半の所産と思われる。

**出土遺物**（第16～25図） 第16図1～6はSX006から出土した土器類である。1は土師器蓋で、口縁内面の折り返しが沈線状に退化している形態を呈する。2は土師器杯の口縁部と思われ、内外面に粗いヘラミガキを施す。3・4は黒色土器A類の壺で、3は高台付の底部付近の破片、4は杯部である。4の外表面には粗いヘラミガ

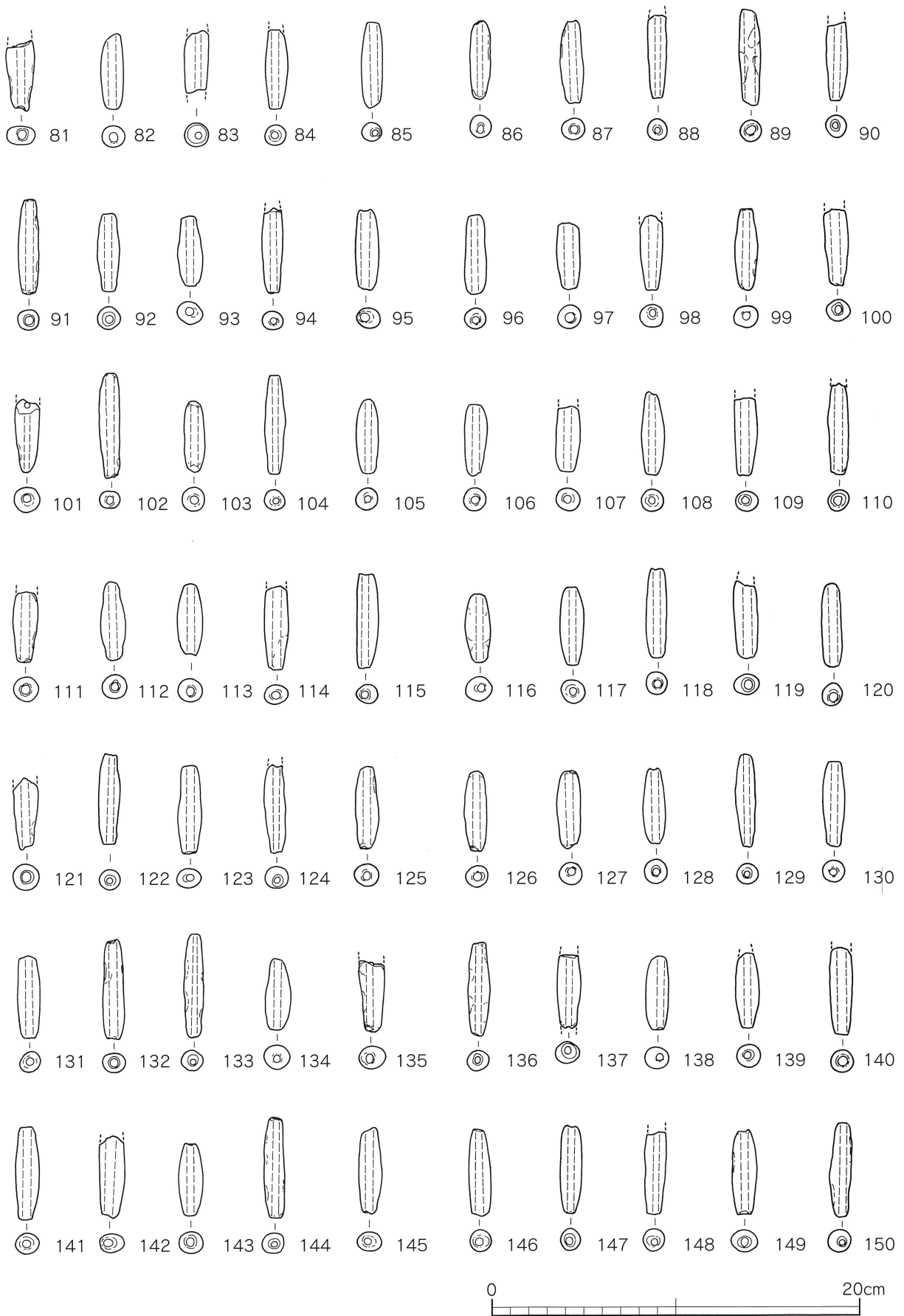


第16図 SK006出土遺物(1/3)



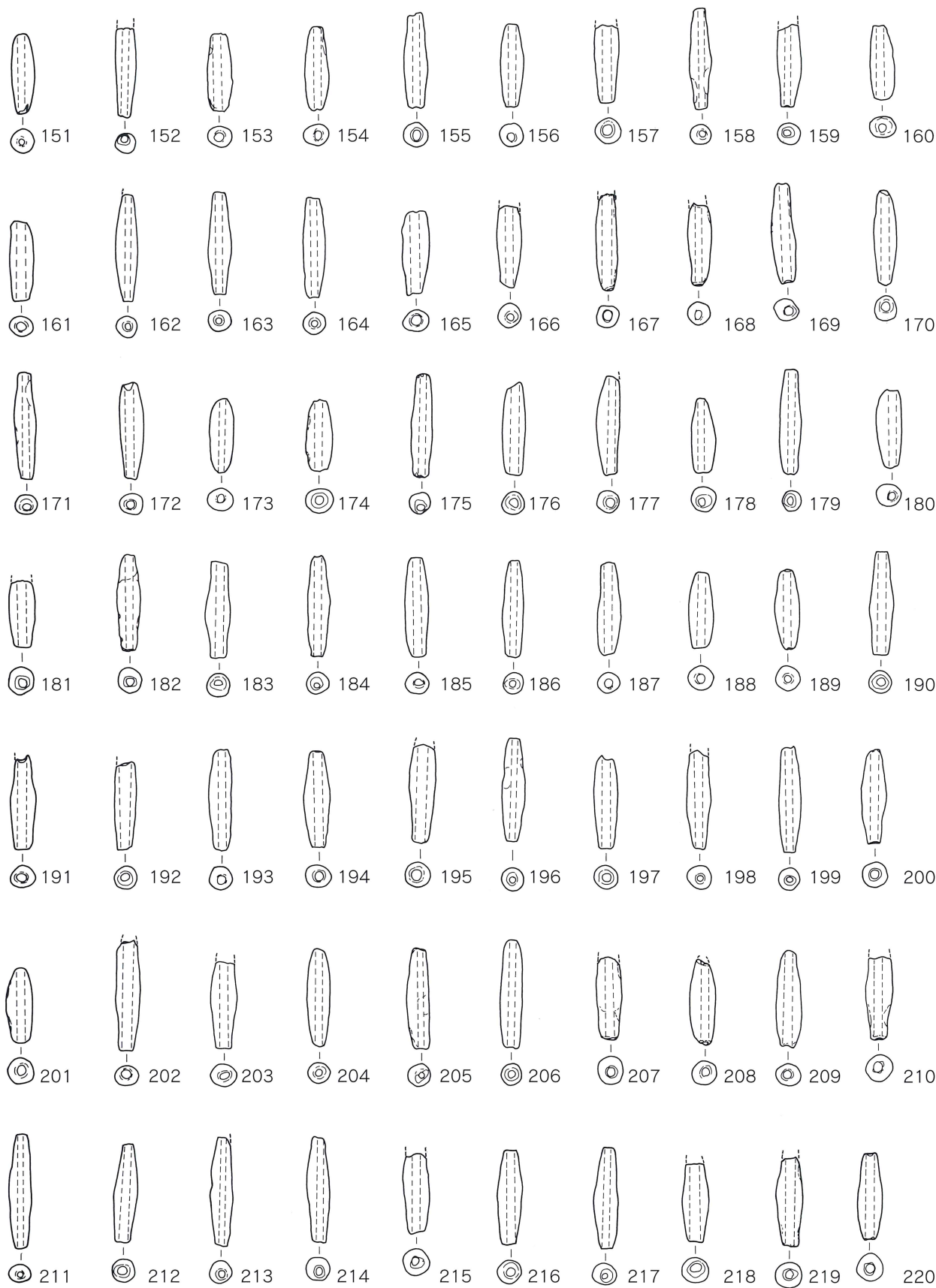
第17图 SX006出土遺物(小型土錘① 1/3)





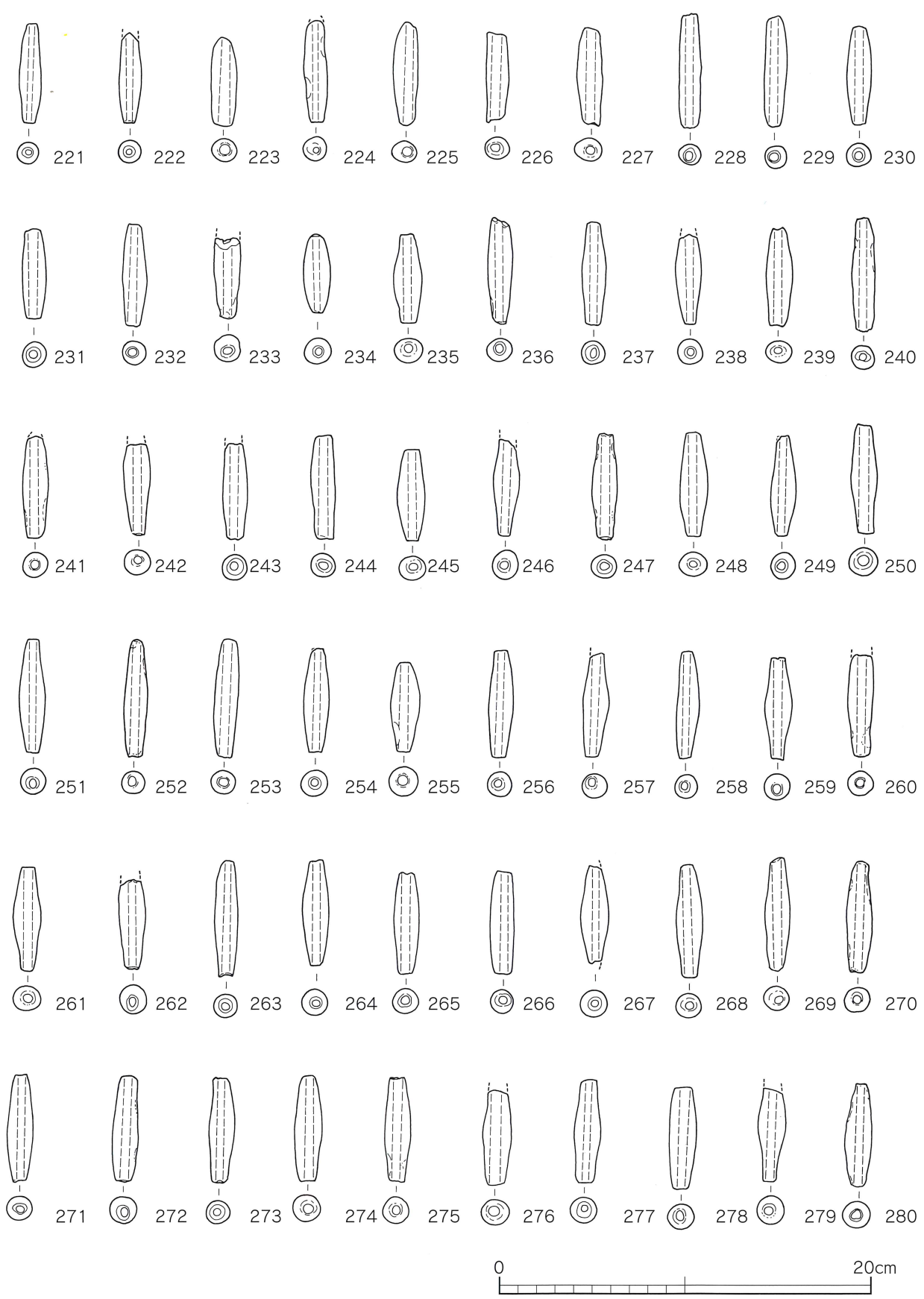
第18図 SX006出土遺物(小型土錘② 1/3)



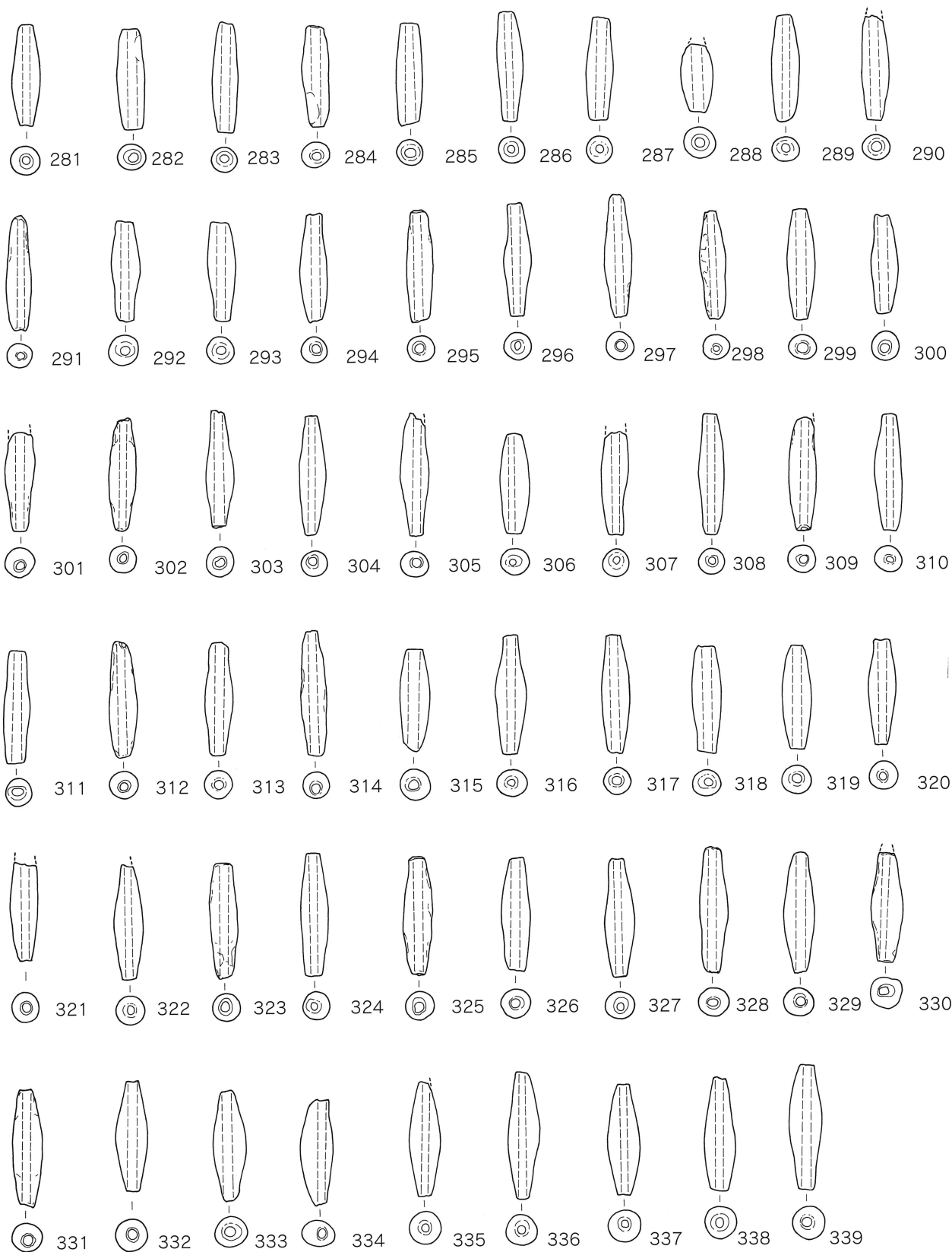


0 20cm

第19图 SX006出土遺物(小型土錘③ 1/3)



第20図 SX006出土遺物(小型土錘④ 1/3)



第21図 SX006出土遺物(小型土錘⑤ 1/3)

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第17図1	1.5	1.0	1.0	0.4	一部欠損
2	1.7	0.9	1.3	0.2	一部欠損
3	1.5	1.0	1.3	0.5	一部欠損
4	1.9	1.0	1.8	0.2	一部欠損
5	1.8	1.1	1.9	0.3	一部欠損
6	1.7	1.3	1.9	0.3	一部欠損
7	2.1	1.0	2.0	0.2	一部欠損
8	2.5	1.0	2.1	0.3	一部欠損
9	1.9	1.1	2.3	0.4	一部欠損
10	2.1	1.1	2.4	0.3	一部欠損
11	2.8	1.0	2.4	0.4	一部欠損
12	1.6	1.3	2.4	0.5	一部欠損
13	2.2	1.1	2.4	0.4	一部欠損
14	2.6	1.0	2.5	0.3	一部欠損
15	2.4	1.2	2.5	0.2	一部欠損
16	2.4	1.2	2.6	0.3	一部欠損
17	2.3	1.2	2.7	0.3	一部欠損
18	2.3	1.2	2.7	0.3	一部欠損
19	2.5	1.1	2.9	0.3	一部欠損
20	2.6	1.0	3.1	0.3	一部欠損
21	2.4	1.2	3.1	0.4	一部欠損
22	2.7	1.2	3.2	0.3	一部欠損
23	2.8	1.3	3.4	0.4	一部欠損
24	2.7	1.3	3.4	0.3	一部欠損
25	2.7	1.2	3.4	0.3	一部欠損
26	2.7	1.2	3.5	0.2	一部欠損
27	3.2	1.2	3.5	0.2	一部欠損
28	4.0	1.1	3.5	0.2	
29	3.0	1.2	3.6	0.4	一部欠損
30	2.6	1.0	3.6	0.3	一部欠損
31	2.8	1.3	3.6	0.3	一部欠損
32	3.0	1.1	3.7	0.3	
33	2.6	1.1	3.8	0.3	一部欠損
34	3.5	1.5	3.8	0.3	一部欠損
35	3.0	1.3	3.9	0.4	一部欠損
36	2.8	1.3	3.9	0.3	一部欠損
37	2.7	1.2	4.0	0.4	一部欠損
38	4.0	1.2	4.1	0.3	一部欠損
39	3.4	1.3	4.2	0.2	一部欠損
40	3.1	1.1	4.3	0.2	一部欠損
41	3.8	1.1	4.3	0.2	一部欠損
42	3.6	1.1	4.4	0.2	一部欠損
43	3.6	1.3	4.5	0.4	一部欠損
44	3.5	1.3	4.6	0.4	一部欠損
45	4.3	1.1	4.8	0.3	一部欠損
46	3.3	1.4	4.9	0.3	一部欠損
47	3.4	1.2	4.9	0.4	一部欠損
48	3.5	1.3	4.9	0.3	一部欠損
49	4.4	1.1	4.9	0.2	
50	3.9	1.1	5.0	0.2	一部欠損
51	3.8	1.1	5.0	0.3	
52	3.8	1.2	5.1	0.2	
53	3.8	1.3	5.1	0.3	
54	3.8	1.2	5.1	0.2	一部欠損
55	2.9	1.4	5.1	0.2	一部欠損
56	4.0	1.2	5.2	0.3	
57	3.8	1.3	5.2	0.2	
58	3.9	1.1	5.2	0.2	一部欠損
59	4.2	1.1	5.2	0.3	
60	3.0	1.4	5.2	0.2	一部欠損

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第17図61	4.1	1.2	5.2	0.3	
62	4.0	1.1	5.3	0.2	
63	4.0	1.1	5.3	0.3	一部欠損
64	4.1	1.2	5.3	0.3	
65	3.2	1.3	5.3	0.2	
66	3.7	1.3	5.4	0.3	一部欠損
67	4.1	1.1	5.4	0.2	一部欠損
68	3.6	1.3	5.4	0.3	
69	4.1	1.1	5.4	0.2	一部欠損
70	4.3	1.2	5.4	0.3	一部欠損
71	3.8	1.1	5.4	0.2	一部欠損
72	4.2	1.2	5.5	0.2	
73	4.3	1.2	5.5	0.2	
74	3.7	1.4	5.5	0.4	一部欠損
75	3.8	1.2	5.6	0.3	一部欠損
76	3.8	1.2	5.6	0.2	
77	3.9	1.3	5.7	0.4	一部欠損
78	3.6	1.2	5.7	0.3	
79	4.5	1.1	5.7	0.2	
80	4.8	1.2	5.7	0.3	
第18図81	3.8	1.6	5.7	0.4	一部欠損
82	4.1	1.2	5.7	0.3	
83	3.2	1.3	5.7	0.2	一部欠損
84	4.3	1.3	5.8	0.2	
85	4.7	1.1	5.8	0.2	
86	4.3	1.3	5.8	0.3	
87	4.4	1.3	5.8	0.3	
88	4.5	1.1	5.8	0.2	一部欠損
89	5.2	1.2	5.9	0.3	
90	4.3	1.1	5.9	0.2	
91	5.2	1.1	5.9	0.3	
92	4.3	1.3	5.9	0.2	
93	3.9	1.4	5.9	0.2	
94	4.6	1.2	5.9	0.2	一部欠損
95	4.3	1.3	5.9	0.3	
96	4.2	1.2	6.0	0.2	
97	3.6	1.2	6.0	0.3	
98	4.1	1.3	6.0	0.2	一部欠損
99	4.5	1.3	6.0	0.2	
100	4.1	1.3	6.0	0.2	一部欠損
101	3.9	1.4	6.1	0.2	一部欠損
102	5.7	1.2	6.1	0.2	
103	3.9	1.3	6.1	0.2	
104	5.3	1.1	6.2	0.2	
105	4.0	1.2	6.2	0.2	
106	3.8	1.3	6.2	0.3	
107	3.5	1.3	6.2	0.3	
108	4.5	1.2	6.2	0.2	
109	4.2	1.2	6.2	0.3	一部欠損
110	5.0	1.2	6.2	0.3	一部欠損
111	3.8	1.4	6.2	0.4	一部欠損
112	4.3	1.4	6.2	0.3	
113	3.8	1.3	6.2	0.3	
114	4.5	1.3	6.3	0.3	
115	5.1	1.2	6.3	0.2	
116	3.7	1.4	6.3	0.2	
117	4.3	1.3	6.4	0.2	
118	4.8	1.2	6.4	0.3	
119	4.2	1.4	6.4	0.3	一部欠損
120	4.5	1.2	6.4	0.3	

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第18図121	3.8	1.5	6.4	0.3	一部欠損
122	4.9	1.2	6.4	0.2	
123	4.8	1.3	6.5	0.2	
124	4.8	1.1	6.5	0.2	
125	4.4	1.3	6.5	0.2	
126	4.4	1.3	6.5	0.3	
127	4.2	1.2	6.5	0.3	
128	4.1	1.2	6.5	0.2	
129	5.0	1.2	6.5	0.2	
130	5.1	1.2	6.6	0.2	
131	4.5	1.2	6.6	0.2	
132	5.4	1.3	6.6	0.3	
133	5.6	1.2	6.6	0.2	
134	3.8	1.4	6.6	0.2	
135	3.9	1.4	6.6	0.2	一部欠損
136	5.0	1.2	6.6	0.2	
137	4.0	1.3	6.6	0.2	一部欠損
138	4.0	1.3	6.6	0.2	
139	4.1	1.3	6.6	0.2	一部欠損
140	4.7	1.2	6.7	0.4	
141	5.0	1.3	6.7	0.3	
142	4.5	1.3	6.7	0.3	
143	3.9	1.3	6.7	0.3	
144	5.5	1.2	6.7	0.2	
145	4.7	1.3	6.7	0.2	
146	4.7	1.2	6.8	0.2	
147	4.7	1.1	6.8	0.2	
148	4.5	1.2	6.8	0.2	一部欠損
149	4.6	1.5	6.8	0.2	
150	5.1	1.2	6.8	0.2	
第19図151	4.3	1.3	6.9	0.2	
152	4.7	1.1	6.9	0.2	一部欠損
153	4.2	1.3	6.9	0.3	
154	4.6	1.3	6.9	0.3	
155	5.2	1.3	6.9	0.4	
156	4.5	1.3	6.9	0.3	
157	4.2	1.4	7.0	0.3	一部欠損
158	5.5	1.2	7.0	0.2	
159	4.4	1.3	7.0	0.2	一部欠損
160	3.9	1.4	7.0	0.2	
161	4.3	1.3	7.1	0.3	
162	5.6	1.1	7.1	0.1	
163	5.4	1.2	7.1	0.1	
164	5.4	1.2	7.2	0.1	
165	5.4	1.4	7.2	0.4	
166	4.4	1.3	7.2	0.3	
167	5.2	1.2	7.2	0.4	
168	4.4	1.3	7.2	0.3	一部欠損
169	5.3	1.4	7.2	0.3	
170	5.1	1.2	7.3	0.3	
171	5.7	1.2	7.3	0.2	
172	5.3	1.2	7.3	0.2	
173	3.8	1.3	7.3	0.2	
174	3.9	1.5	7.3	0.3	
175	5.5	1.1	7.3	0.2	
176	5.0	1.2	7.4	0.3	
177	5.3	1.2	7.4	0.3	一部欠損
178	3.9	1.3	7.4	0.2	
179	5.6	1.1	7.4	0.2	
180	4.3	1.4	7.4	0.2	

第1表 SX006出土小型土錘法量表①



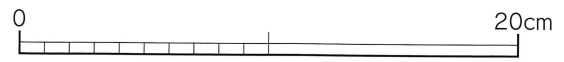
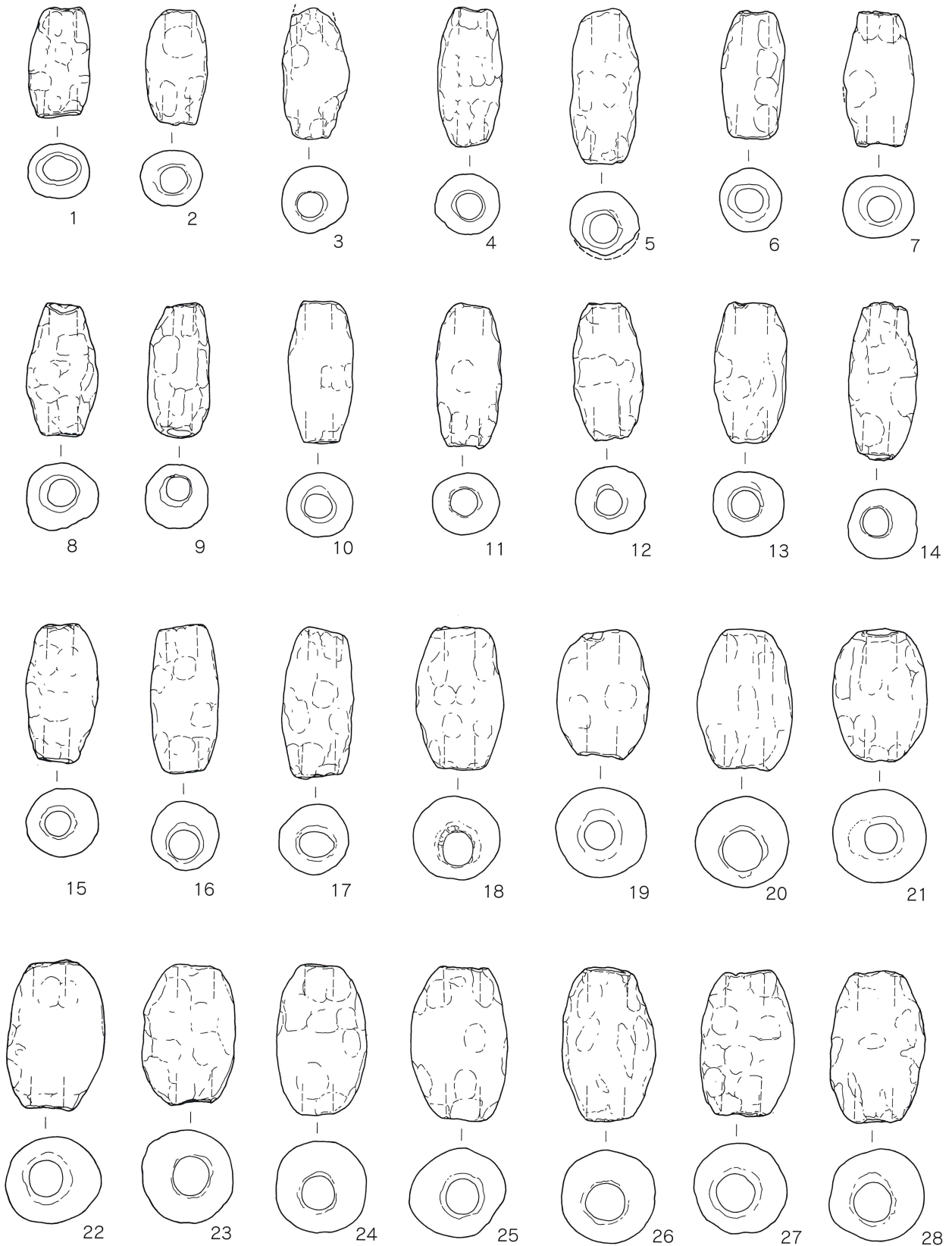
挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第19図181	3.6	1.5	7.4	0.3	一部欠損
182	5.2	1.4	7.4	0.2	
183	5.2	1.2	7.5	0.2	
184	5.4	1.2	7.5	0.2	
185	5.4	1.3	7.6	0.2	
186	5.2	1.1	7.6	0.2	
187	5.0	1.3	7.6	0.3	
188	4.1	1.3	7.6	0.3	
189	4.3	1.4	7.7	0.2	
190	5.5	1.3	7.7	0.3	
191	5.0	1.4	7.7	0.4	
192	4.7	1.2	7.7	0.3	
193	5.4	1.2	7.7	0.3	
194	5.1	1.4	7.7	0.3	
195	5.2	1.4	7.7	0.4	一部欠損
196	5.5	1.2	7.7	0.2	
197	5.0	1.3	7.8	0.3	
198	5.2	1.3	7.8	0.2	
199	5.6	1.2	7.8	0.2	
200	5.0	1.4	7.8	0.3	
201	4.0	1.4	7.8	0.3	
202	5.7	1.3	7.9	0.3	
203	4.6	1.4	7.9	0.3	
204	5.2	1.2	7.9	0.2	
205	5.4	1.2	7.9	0.2	
206	5.8	1.1	8.0	0.2	
207	4.5	1.5	8.0	0.3	
208	4.6	1.4	8.0	0.3	
209	5.2	1.4	8.0	0.3	
210	4.4	1.5	8.0	0.3	一部欠損
211	5.1	1.2	8.1	0.1	
212	5.3	1.2	8.1	0.3	
213	5.8	1.2	8.1	0.2	
214	5.7	1.3	8.1	0.2	
215	4.3	1.5	8.1	0.3	一部欠損
216	5.0	1.3	8.2	0.3	
217	5.4	1.4	8.2	0.2	
218	4.1	1.5	8.2	0.3	一部欠損
219	4.8	1.5	8.2	0.3	
220	4.7	1.5	8.2	0.3	
第20図221	5.3	1.2	8.2	0.2	
222	4.8	1.2	8.2	0.2	一部欠損
223	4.7	1.4	8.3	0.5	
224	5.5	1.2	8.3	0.2	
225	5.6	1.3	8.3	0.4	
226	4.8	1.3	8.3	0.3	
227	5.2	1.4	8.4	0.3	
228	6.0	1.2	8.4	0.3	
229	5.9	1.2	8.4	0.3	
230	5.4	1.3	8.4	0.3	
231	4.8	1.3	8.4	0.3	
232	5.5	1.3	8.5	0.3	
233	4.3	1.5	8.5	0.3	一部欠損
234	4.2	1.5	8.5	0.2	
235	4.7	1.5	8.6	0.3	
236	5.7	1.4	8.6	0.3	一部欠損
237	5.5	1.3	8.7	0.2	
238	4.9	1.4	8.7	0.2	一部欠損
239	5.2	1.4	8.8	0.2	
240	6.1	1.2	8.8	0.2	

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第20図241	5.5	1.3	8.8	0.3	
242	4.8	1.4	8.9	0.2	
243	5.2	1.3	8.9	0.3	
244	5.5	1.3	9.0	0.4	
245	4.9	1.5	9.0	0.3	
246	5.2	1.4	9.0	0.3	一部欠損
247	5.7	1.3	9.1	0.3	
248	5.5	1.4	9.2	0.2	
249	5.4	1.4	9.2	0.3	
250	5.8	1.5	9.3	0.4	
251	6.1	1.4	9.3	0.3	
252	6.3	1.2	9.3	0.3	
253	6.3	1.3	9.3	0.4	
254	5.6	1.4	9.3	0.2	
255	4.3	1.6	9.4	0.3	
256	5.7	1.4	9.4	0.2	
257	5.6	1.4	9.4	0.2	
258	5.7	1.2	9.4	0.2	
259	5.6	1.4	9.4	0.3	
260	5.5	1.4	9.4	0.3	一部欠損
261	5.6	1.5	9.5	0.4	
262	4.8	1.5	9.5	0.3	一部欠損
263	6.2	1.3	9.5	0.3	
264	5.7	1.4	9.5	0.3	
265	5.5	1.4	9.6	0.3	
266	5.5	1.2	9.7	0.3	
267	5.2	1.5	9.7	0.3	
268	6.1	1.4	9.8	0.3	
269	6.1	1.4	9.9	0.2	
270	9.0	1.4	9.9	0.3	
271	5.6	1.4	10.0	0.3	
272	5.6	1.5	10.0	0.3	
273	5.2	1.4	10.0	0.3	
274	5.6	1.5	10.1	0.4	
275	5.6	1.5	10.1	0.3	
276	5.0	1.5	10.2	0.3	
277	5.6	1.5	10.2	0.2	
278	5.4	1.4	10.2	0.3	
279	5.0	1.4	10.2	0.3	一部欠損
280	5.6	1.5	10.2	0.3	
第21図281	5.3	1.5	10.2	0.3	
282	5.3	1.5	10.3	0.3	
283	5.8	1.4	10.3	0.3	
284	5.4	1.4	10.4	0.3	
285	5.4	1.4	10.4	0.4	
286	5.8	1.4	10.4	0.2	
287	5.5	1.4	10.4	0.2	
288	3.6	1.7	10.5	0.3	
289	5.6	1.5	10.5	0.3	
290	5.5	1.5	10.6	0.3	
291	9.1	1.4	10.6	0.2	
292	5.3	1.5	10.7	0.3	
293	5.2	1.5	10.7	0.3	
294	5.6	1.4	10.7	0.3	
295	5.9	1.4	10.8	0.3	
296	6.1	1.5	10.9	0.2	
297	6.5	1.5	10.9	0.3	
298	5.8	1.4	10.9	0.2	
299	5.8	1.5	11.0	0.3	
300	5.3	1.4	11.0	0.3	

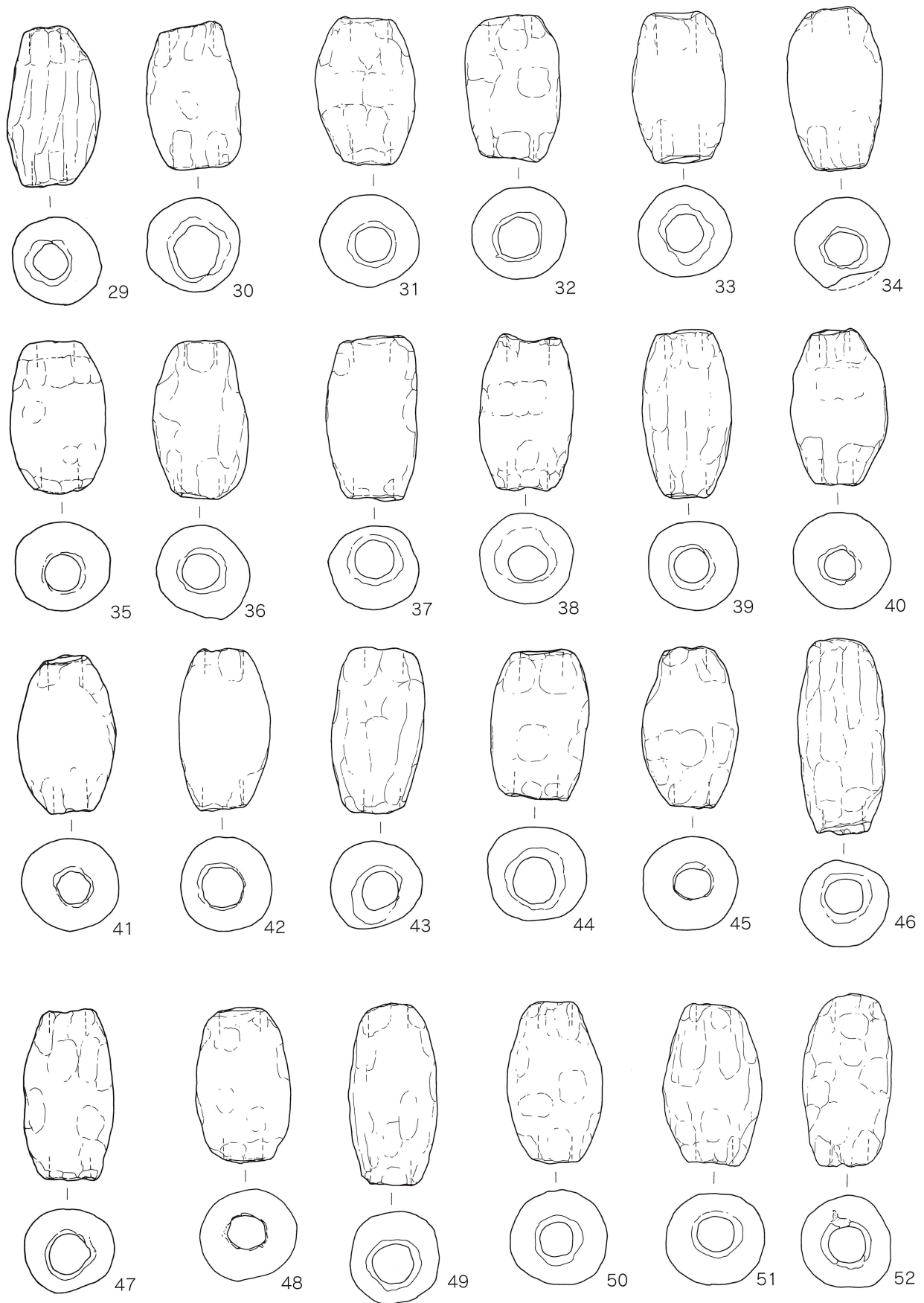
挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第21図301	5.2	1.6	11.0	0.3	
302	5.9	1.4	11.2	0.3	
303	5.2	1.5	11.2	0.3	
304	6.2	1.4	11.3	0.3	
305	6.5	1.5	11.3	0.3	一部欠損
306	5.2	1.6	11.6	0.2	
307	5.4	1.5	11.6	0.2	
308	6.3	1.3	11.6	0.2	
309	6.0	1.5	11.6	0.3	
310	8.1	1.45	11.7	0.2	
311	5.9	1.4	11.7	0.3	
312	6.1	1.5	11.8	0.3	
313	6.0	1.5	11.9	0.3	
314	7.6	1.4	11.9	0.3	
315	5.4	1.5	12.0	0.3	
316	6.3	1.6	12.1	0.3	
317	6.2	1.5	12.1	0.3	
318	5.1	1.5	12.2	0.3	
319	5.4	1.6	12.3	0.3	
320	5.6	1.5	12.3	0.3	
321	5.1	1.5	12.3	0.3	
322	6.0	1.5	12.4	0.3	
323	6.1	1.5	12.5	0.3	
324	6.5	1.4	12.6	0.3	
325	6.2	1.5	12.6	0.3	
326	5.9	1.6	12.9	0.3	
327	6.2	1.5	13.0	0.3	
328	6.6	1.7	13.1	0.3	
329	6.3	1.6	13.5	0.3	
330	5.8	1.7	13.5	0.3	一部欠損
331	6.2	1.6	13.5	0.3	
332	5.8	1.7	13.5	0.3	
333	5.9	1.7	13.8	0.4	
334	5.5	1.7	13.8	0.3	
335	6.0	1.7	14.3	0.2	
336	6.7	1.6	14.8	0.2	
337	5.8	1.7	15.4	0.2	
338	6.0	1.7	15.4	0.3	
339	6.6	1.7	15.8	0.3	

第2表 SX006出土小型土錘法量表②

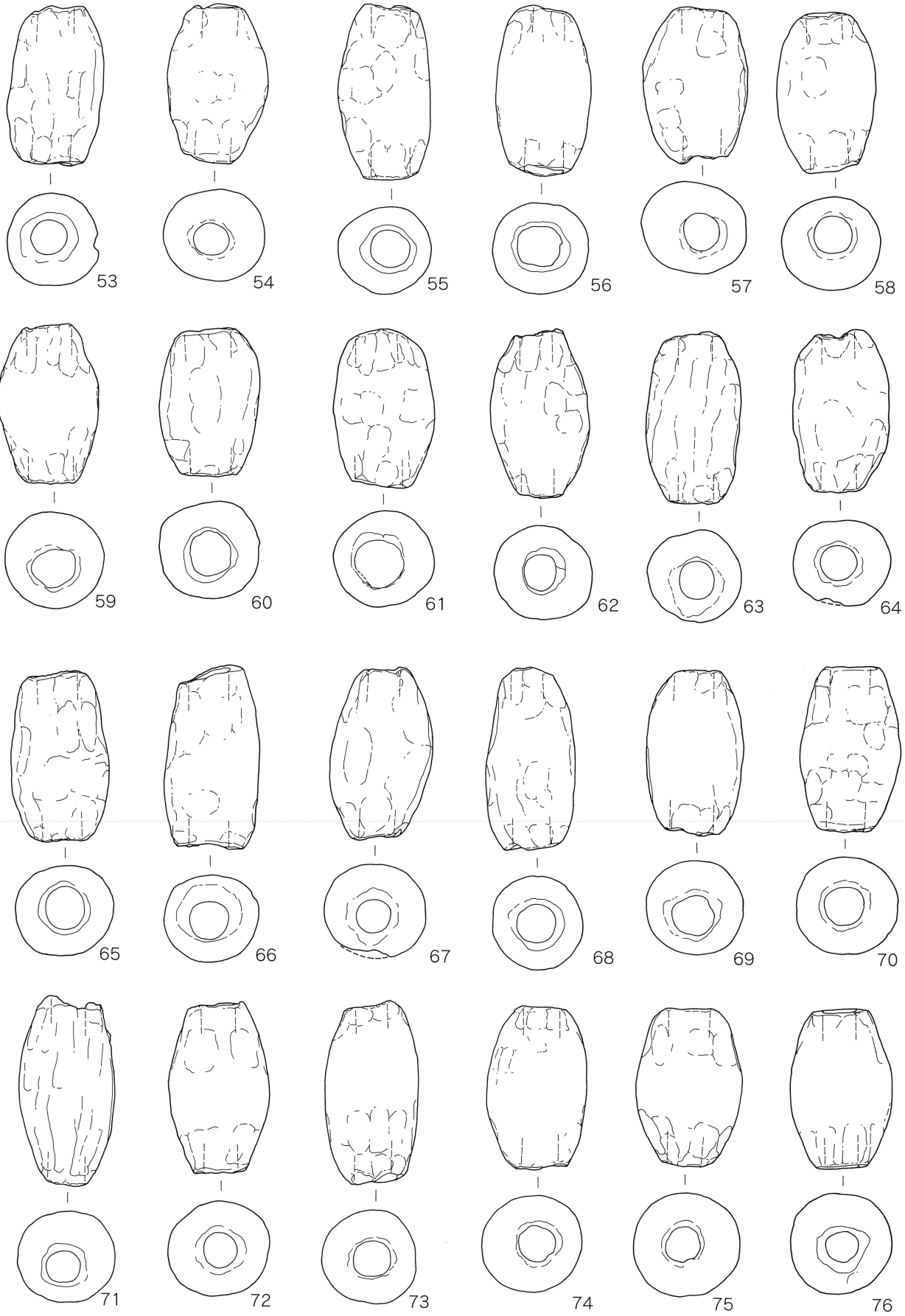




第22図 SX006出土遺物(大型土錘① 1/3)

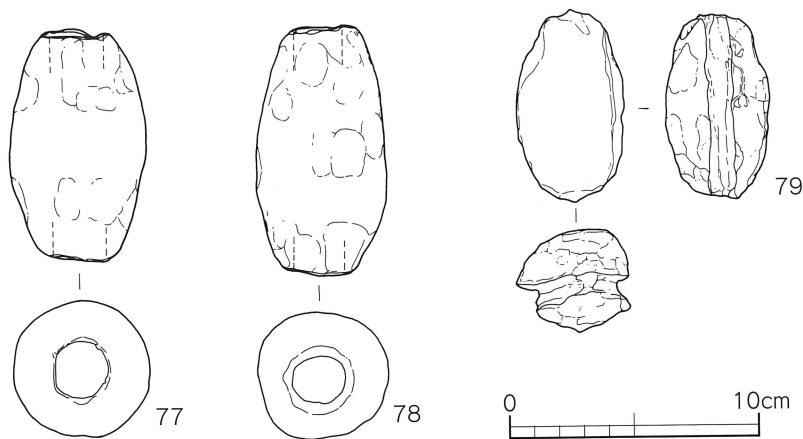


第23図 SX006出土遺物(大型土錘② 1/3)



第24図 SX006出土遺物(大型土錘③ 1/3)





第25図 SX006出土遺物(大型土錘④ 1/3)

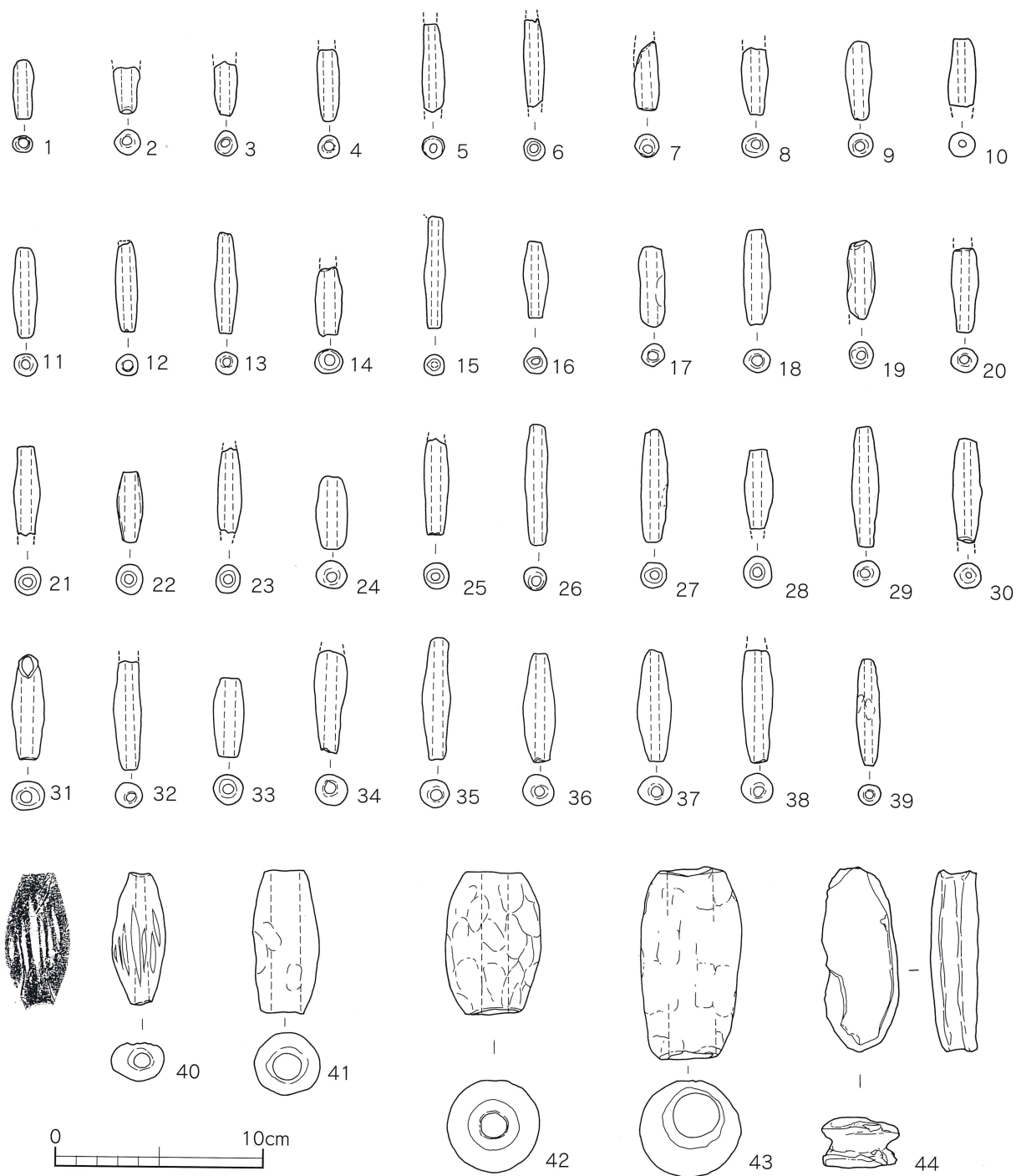
挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第22図1	5.8	3.2	50	1.3	
2	6.2	3.4	57	1.2	
3	7.0	3.5	60	1.3	
4	7.5	3.4	68	1.2	
5	8.4	3.6	72	1.3	
6	6.9	3.5	73	1.3	
7	7.2	3.7	74	1.3	
8	7.2	3.8	76	1.3	
9	7.2	3.3	79	1.2	
10	7.6	3.5	81	1.3	
11	7.8	3.5	82	1.3	
12	7.4	3.7	88	1.3	
13	7.5	3.7	91	1.4	
14	8.5	3.7	93	1.2	
15	7.5	3.8	95	1.2	
16	7.9	4.1	98	1.4	
17	8.2	4.2	105	1.3	
18	7.7	4.6	152	1.4	
19	6.9	4.8	155	1.5	
20	7.6	4.9	167	1.9	
21	7.1	5.0	168	1.5	
22	8.1	5.0	175	1.5	
23	7.5	5.0	177	1.8	
24	8.1	4.9	179	1.6	
25	8.2	5.1	184	1.6	
26	8.3	5.0	184	1.9	
27	7.8	5.4	190	1.9	
28	8.2	5.0	190	1.9	
第23図29	8.9	5.0	192	1.8	
30	8.2	5.1	195	2.3	
31	8.2	5.4	200	1.8	
32	8.1	5.1	201	2.1	
33	8.3	5.1	202	1.9	
34	8.9	5.2	204	1.9	
35	8.3	5.2	204	1.8	
36	8.7	5.3	206	1.9	
37	9.0	4.9	206	2.0	
38	8.6	5.1	207	1.8	
39	9.2	4.9	208	1.8	
40	8.7	5.8	210	1.6	

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第23図41	8.6	5.3	212	1.7	
42	8.9	5.2	213	2.2	
43	9.0	5.1	213	1.8	
44	8.3	5.4	214	2.2	
45	8.9	5.2	214	1.8	
46	10.7	4.8	214	1.9	
47	9.5	4.9	215	1.8	
48	8.5	5.3	215	1.9	
49	10.1	5.0	215	2.1	
50	8.9	5.3	218	1.7	
51	9.0	5.3	218	1.9	
52	9.5	5.0	221	1.9	
第24図53	8.8	5.1	221	1.9	
54	8.8	5.5	221	1.8	
55	9.6	5.1	223	1.9	
56	9.5	5.2	228	2.1	
57	8.6	5.7	228	1.8	
58	8.8	5.4	228	1.9	
59	8.8	5.4	232	2.1	
60	8.2	5.4	233	2.0	
61	8.8	5.5	234	2.5	
62	9.3	5.3	234	1.6	
63	9.5	5.0	234	1.7	
64	9.0	5.3	234	1.8	
65	9.3	5.3	234	1.9	
66	10.1	5.2	239	2.0	
67	9.6	5.5	241	1.7	
68	10.1	5.1	243	2.0	
69	9.1	5.2	244	2.1	
70	9.1	5.5	246	2.0	
71	10.6	5.3	248	1.8	
72	9.5	5.5	251	1.7	
73	10.0	5.2	252	1.9	
74	9.0	5.4	253	1.9	
75	8.8	5.8	255	1.7	
76	8.8	5.6	256	1.7	
第25図77	9.5	5.6	257	1.9	
78	10.1	5.3	259	1.9	
79	7.7	4.4	127	—	有溝土錘

第3表 SX006大型土錘法量表

キが認められる。5は土師器の移動式カマドの破片で、焚き口付近の一部と推定される。残存部には内外面ともにナデが施されている。6は緑釉陶器碗の底部片である。胎土は灰白色を呈する。以上の土器類はおおむね9世紀中頃から後半を主体とする時期に位置づけられる。

第17~25図はS X006から出土した土錘で、第17~21図1~339は小型の管状土錘、第22~25図1~78は大型の管状土錘、第25図79は大型の有溝土錘である。有溝土錘は平面形態が楕円状を呈し、側面に縄をかけるための溝を巡らしている。有溝土錘は上野町遺跡では出土例が少ないが、他に包含層から1点の出土が認められる。土錘の図版作成については、完存・欠損にかかわらず、出土した土錘のすべてについて実測図を作成し、小型・大型の管状土錘については重量の軽いものから重いものへと配置してレイアウトを行った。欠損のない完存品である小型土錘は重量3.5~15.8g、大型土錘は50~259gを測る。大型の管状土錘は密集して出土しており、これらは海洋性の魚類を捕獲するための漁網に装着されていたものと考えられる。また、大型の有溝土錘が1個のみ出土しているが、これらは大型の管状土錘が密集して出土した場所からはやや離れた地点から検出されているため、両者はセットで用いられたものではなく、別個の網に装着されていたものであった可能性を考えたい。以上の土器類も層位的な所見や共伴した土器類の年代観から、9世紀中頃から後半の所産であろう。



第26図 II～IV層群出土遺物①(1/3)

II～IV層群出土遺物（第26図） 第26図は1～44はII～IV層群中より出土した土錘類である。1～39は小型の管状土錘で、欠損のない完存品は重量2.4～12.2gを測る。40も管状土錘であるが、胴部に圧痕状の文様を有し、通常の土錘とはやや異なる印象を与えるものである。断面形態は文様の押圧時に圧迫を受けたような形態を呈し、楕円状となる。重さは31.1gを測り、形態や法量的にも本報告で報告する小型土錘と大型土錘の中間に属するもの（中型管状土錘）である。41～43は大型の管状土錘で、各々の法量等はS X006出土の大型土錘と同様である。44は有溝土錘で、S X006で出土したもの（第25図79）と同様の形態を呈する。以上の土錘類は、層位的な所見から9世紀中頃から後半を主体とする時期に比定される。

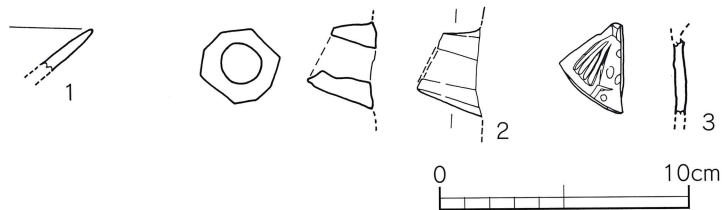
挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
第*図 1	2.9	1.0	2.4	0.4	
2	2.2	1.2	2.7	0.3	一部欠損
3	2.6	1.2	3.4	0.3	一部欠損
4	3.4	1.1	3.9	0.3	一部欠損
5	4.2	1.1	4.8	0.3	一部欠損
6	4.2	1.0	4.9	0.3	
7	3.2	1.2	5.0	0.2	一部欠損
8	3.2	1.3	5.0	0.3	
9	3.8	1.2	5.1	0.3	
10	3.3	1.3	5.3	0.2	
11	4.4	1.1	5.3	0.3	
12	4.4	1.1	5.4	0.3	
13	4.9	1.2	5.4	0.3	
14	3.2	1.4	5.5	0.4	
15	5.4	1.0	5.6	0.2	

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
16	3.7	1.2	5.7	0.3	
17	3.9	1.2	5.8	0.4	
18	4.6	1.3	5.9	0.4	
19	3.8	1.4	6.1	0.3	一部欠損
20	4.0	1.3	6.1	0.3	一部欠損
21	4.2	1.3	6.3	0.3	一部欠損
22	3.4	1.3	6.5	0.3	
23	4.1	1.2	7.2	0.3	一部欠損
24	3.5	1.5	7.4	0.3	
25	4.6	1.2	7.7	0.3	一部欠損
26	5.8	1.2	7.9	0.3	
27	5.4	1.3	8.1	0.3	
28	3.8	1.4	8.2	0.3	一部欠損
29	5.8	1.3	8.5	0.3	
30	5.0	1.4	8.6	0.2	

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)	孔径 (cm)	備考
31	5	1.6	8.7	0.4	
32	5.2	1.4	8.7	0.3	一部欠損
33	3.8	1.4	8.9	0.3	
34	4.9	1.6	8.9	0.4	一部欠損
35	5.9	1.3	9.4	0.4	
36	5.2	1.5	10.6	0.3	
37	5.4	1.6	10.8	0.4	
38	5.4	1.0	12.2	0.3	一部欠損
39	5.1	1.2	12.2	0.2	
40	6.2	2.6	31.1	0.7	中型土錘
41	6.7	3.1	61.2	1.3	大型土錘
42	6.8	4.5	166.9	1.1	大型土錘
43	5.2	9.4	213.0	2.1	大型土錘
44	8.7	3.6	82.5	—	有溝土錘

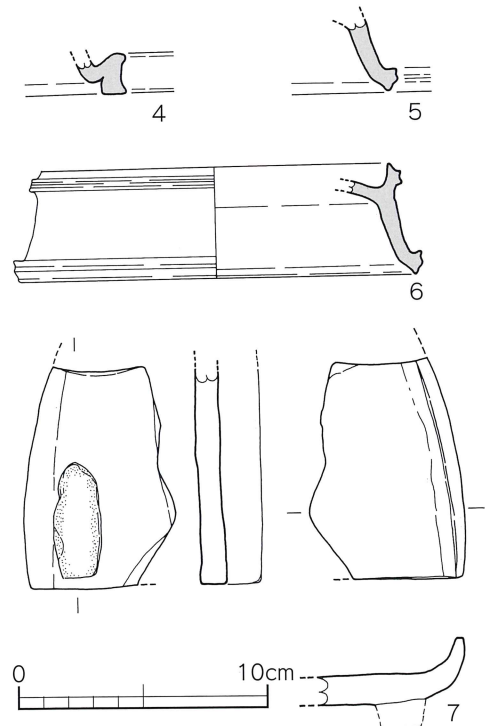
第4表 II～IV層群出土土錘量表

第27図1～3は、当該土層中から出土した数少ない陶磁器である。1は青磁碗の口縁部と推定され、青磁釉の釉調や出土層位から、中国越州窯系青磁碗である可能性が考えられる。II層出土で、9世紀代以降の製品であろう。2・3は中国長沙窯系黄釉褐彩水注の破片である。2は注口部で、面取りによって、横断面が八角形状を呈する。全体に黄釉を施し、さらに上半部には褐釉がかかる。3は頸部屈曲部付近の胴部破片で、上端部にわずかに把手がついていた痕跡が観察できる。型押し(貼花)による文様が確認でき、他の類例から椰棗文あるいは舞踏人物文の一部である可能性が考えられるが、小破片のため詳細は不明である。残存部外面の全体に褐釉が施され、内面は露胎である。胎土は灰褐色を呈する。長沙窯系黄釉褐彩水注は全国的にみても、その出土例が50数個体と少なく、注目すべき遺物である。製作年代は9世紀代に比定される。



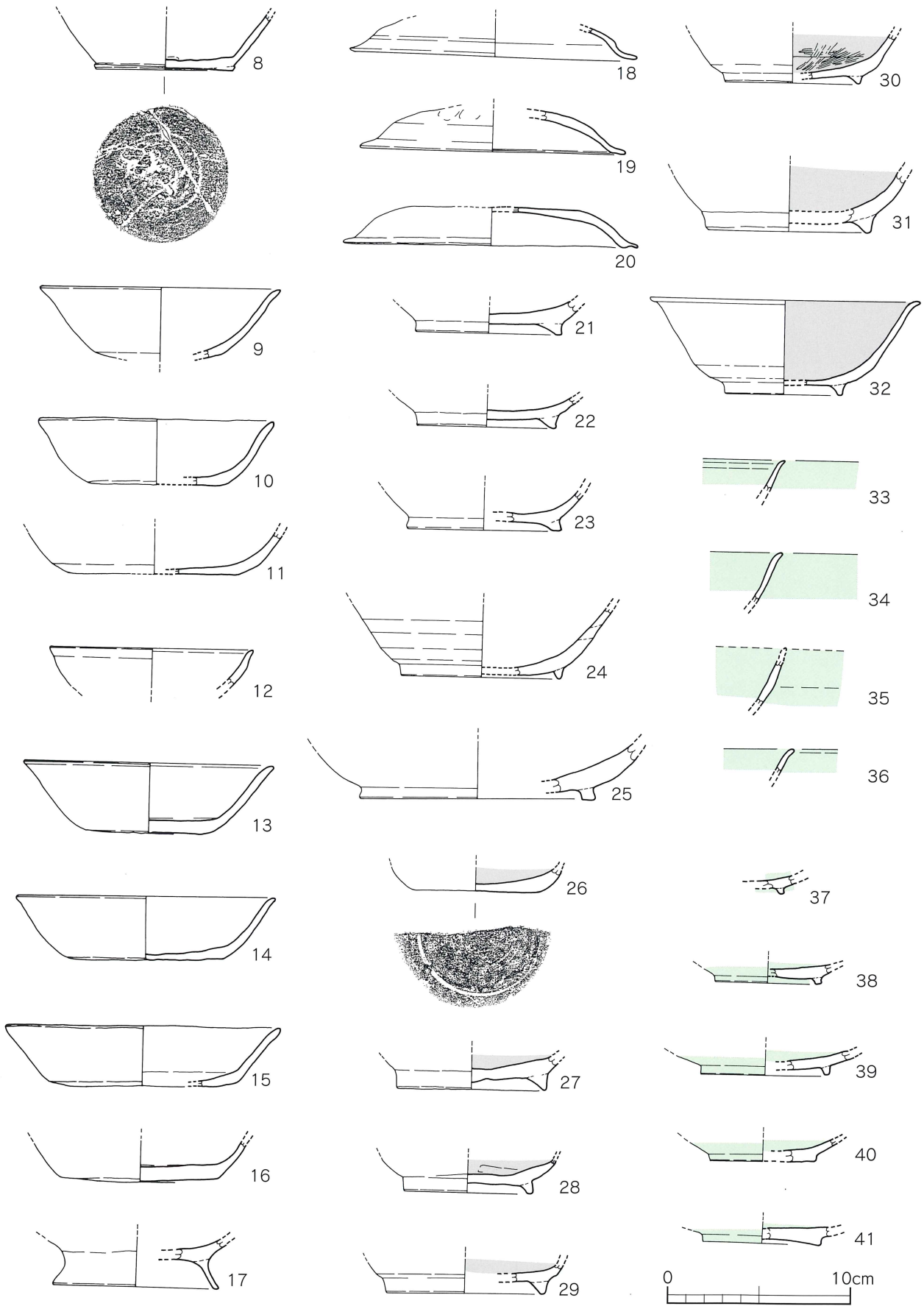
第27図 II～IV層群出土遺物②(陶磁器 1/3)

第28図4～7は、当該土層中から出土した硯関連の資料である。4～6は須恵器の円面硯(圈足硯)である。4は脚部小片で、破片資料であるため、透かし等の有無は明らかでない。5・6は同一個体と思われる、6については脚部端から口縁部までが残存し、硯面部の大部分を欠損するが、反転により図上復元が可能で資料である。脚端部には2条の凹線が認められる。残存部には透かしの痕跡は認められないが、本来透かしが認められない資料であるのかどうかは判断できない。7は平面形態がU字状を呈する土師質の製品である。裏面には脚部が剥離した痕跡が認められる。その形態は「風字硯」そのものであるが、通常風字硯は須恵器であり、当該製品とは材質が異なる。また、硯面に相当する部位にも使用の痕跡や墨の付着なども認められない。本報告では、取りあえず、風字硯形土製品として呼称しておくこととしたい。以上の硯関連資料は層位的な所見から、9世紀中頃から後半の製品と推定される。

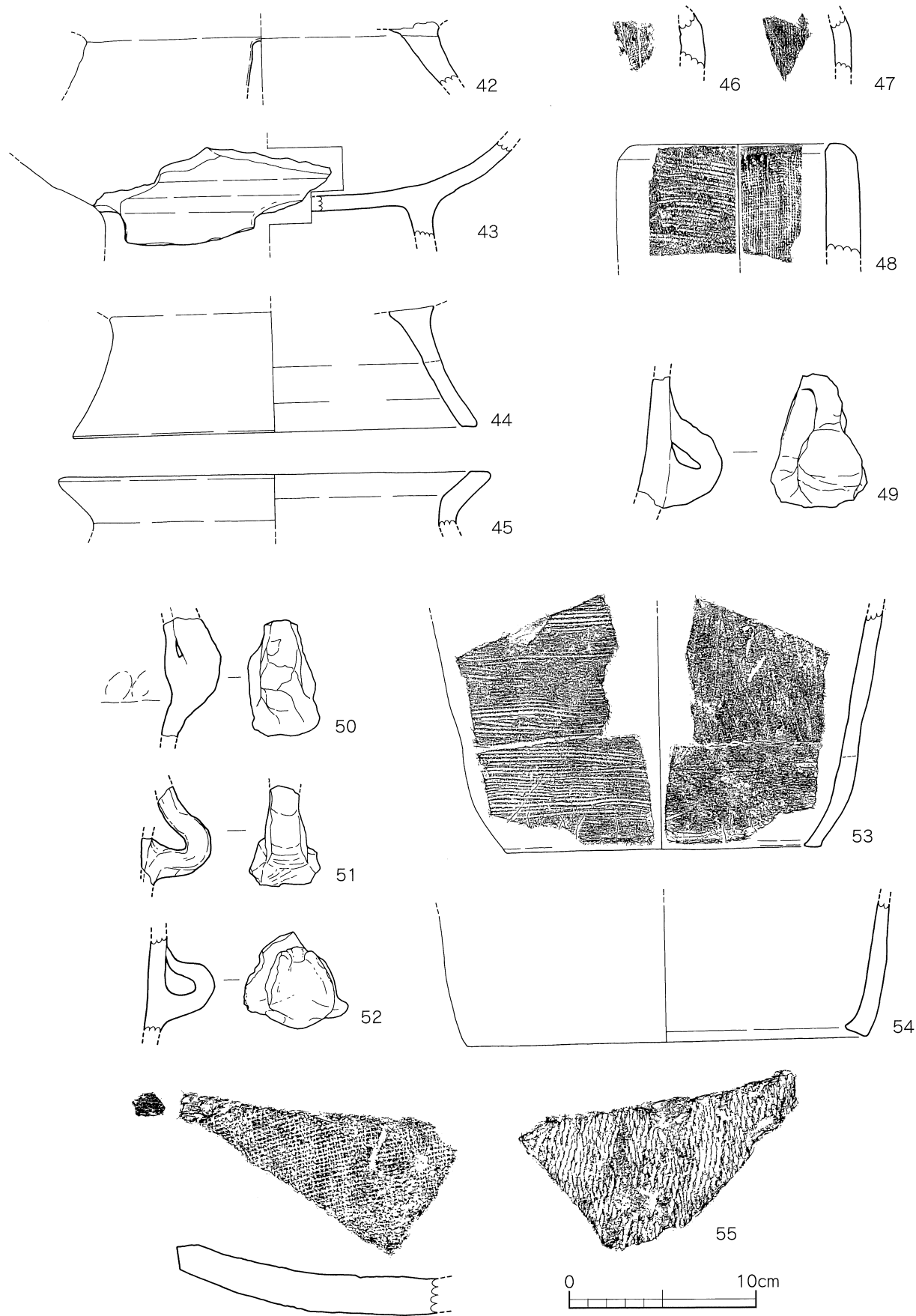


第28図 II～IV層群出土遺物③(硯関連資料 1/3)

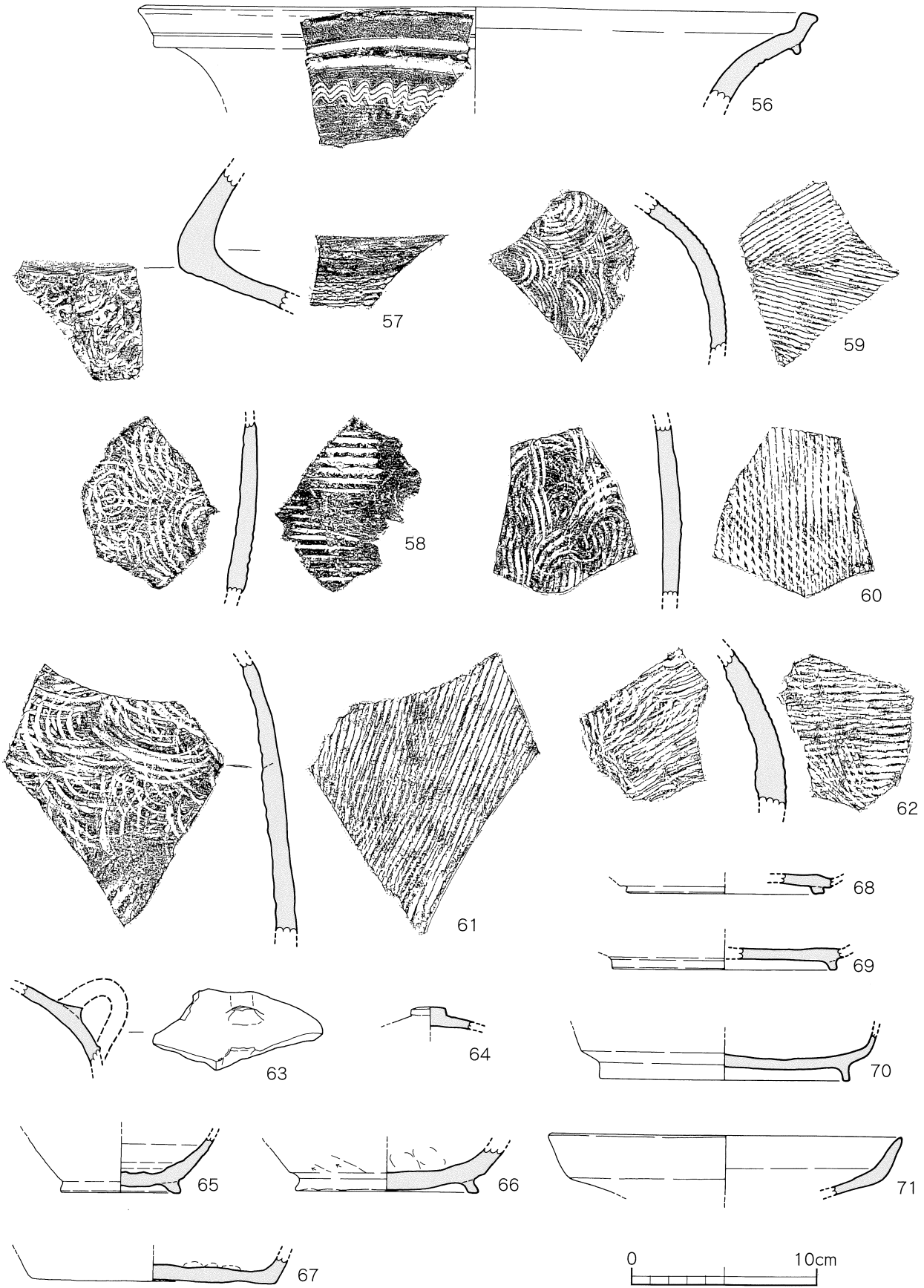




第29图 II~IV層群出土遺物④(1/3)



第30图 II~IV层群出土遺物⑤(1/3)



第31図 II～IV層群出土遺物⑥(1/3)



第29図8は土師器坏である。口縁部を欠損するが、円盤貼り付け状の底部を有し、ヘラ切り後ナデを施すのみの調整である。10世紀代の製品か。9～11は「坏d」タイプと判断した土師器坏である。口縁端部がわずかに外反する器形を呈し、底部はヘラ切り後ナデ等の調整を施すものが多い。内外面はナデ調整を主体とし、ヘラミガキは目立たないものとなる。12も土師器坏であるが、体部が丸味をもって底部に続いており、口縁端部付近はナデが施されることによってわずかに外反する器形となる。13～16は「坏a」タイプと判断した土師器坏である。やはり、口縁端部がわずかに外反する器形を呈する。内外面にはヘラミガキが施されず、ナデ調整が主体となる。底部はヘラ切り離し後ナデを施すか、ほとんど調整が行われずヘラ切り離しのままのものもある。17は土師器の高台付碗である。坏部の形態は欠損のため、推定の域を出ないが、内湾気味ないしは直立気味に立ち上がる形態を有するものである可能性も考えられる。18～20は土師器蓋で、口縁端部は嘴状口縁が退化した形態となる。調整はいずれもナデを主体とする。21～25は高台付碗で、21～24は高台の断面形態が三角形状を呈する小型・中型碗、25は断面形態が方形を呈する大型碗である。内底部はいずれもヘラ切り離し後、ナデを施す。

26～22は黒色土器A類である。26は高台を有さない坏で、底部付近にヘラ切り後ナデを施す。27～32は高台付坏である。27～31は断面三角形の高台を有する坏で、内外面・底部ともナデ調整を主体とする製品である。32は断面方形の高台を有する坏で、調整はやはりナデを主体とするが、高台付近の外面には回転ヘラ削りが施された痕跡が認められる。

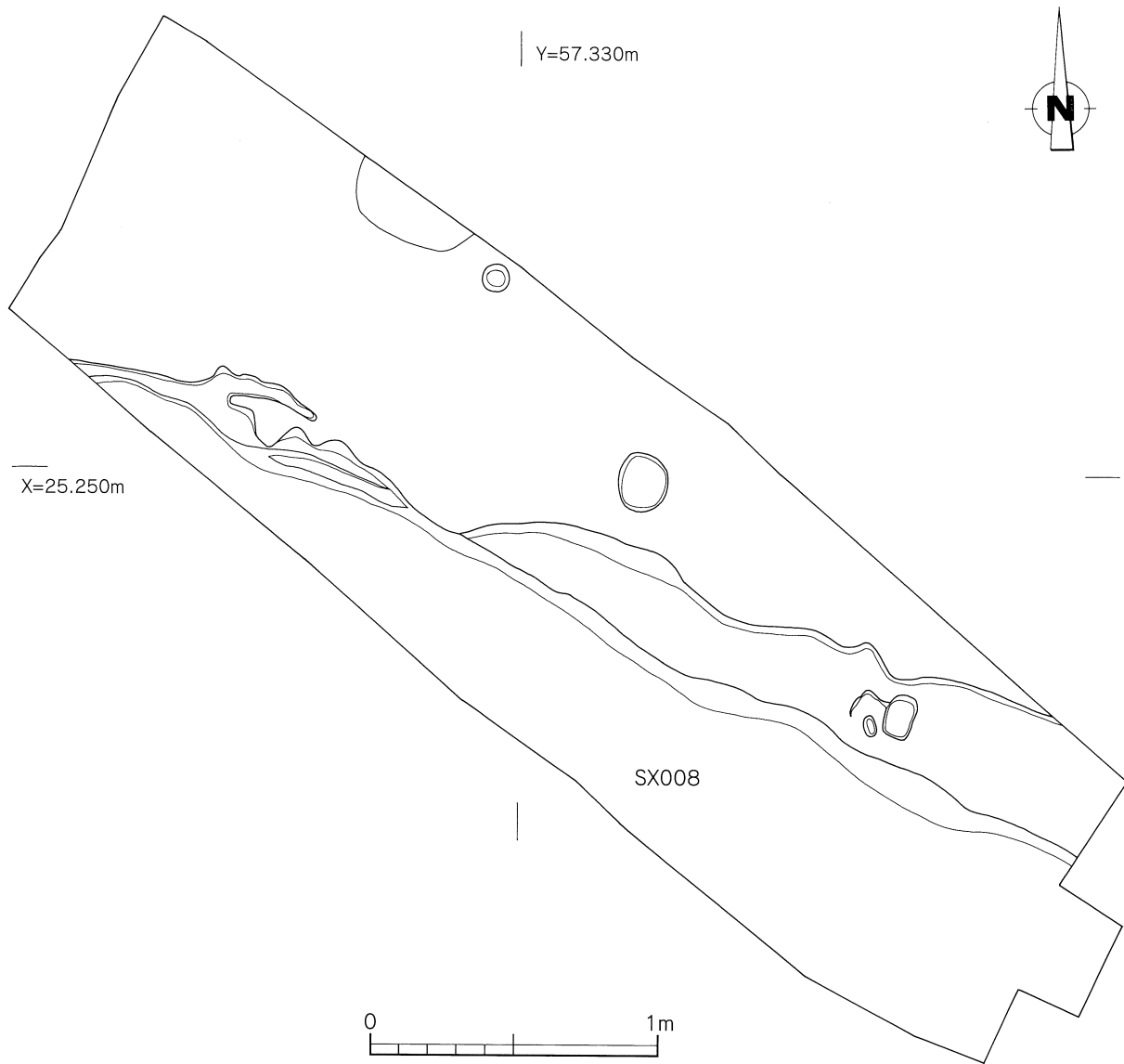
33～41は緑釉陶器で、いずれも細片となっているが、胎土が灰白色を呈する軟質の製品である。33～36は口縁部、他は底部である。底部については37～39が碗、40・41は皿と推定され、後者には回転糸切りの痕跡が認められる。

第30図42～44は器種不明製品であるが、脚台部の破片である。大型の土師器製品と推定され、脚台部には透かしを有するもの(42・43)も存在する。45は土師器甕で、その特徴的な口縁形態から、佐藤浩司氏分類による「企救型甕」の範疇に属するものである。ただし、当該製品が在地産のものであるか、北九州地方からの搬入品であるかは今のところ判断がつかない状況である。46～48はいわゆる「六連鳥式」と呼ばれる焼塩用の製塩土器で、46・47が胴部の小片、48が口縁部である。外面にナデないしカキ目状の調整、内面には布目痕を残す。小片となっているが、本来は筒状の胴部を有する器形を呈していた製品である。49～54は土師器の甑で、把手部の特徴的な形態から、坪根伸也氏によって「豊後大分型甑」と呼称されている製品である。49～52は把手部、53・54は底部から胴部にかけての破片である。53の外面にはカキ目状の調整が認められる。胴部がややすばまるような形態を呈し、底端部が若干内側に肥厚し、段を有する形態となる。

55は側面の一部が残存する古代の平瓦片である。凸面に縄目叩き、凹面に布目痕が認められる。凹面には模骨痕、凸面の縄目叩きは叩き締め円弧を描くことが観察され、当該製品が平瓦桶巻き造りによって製作された製品であることがわかる。

第31図には須恵器の製品を掲げた。56～62は大甕の破片である。56は口縁部で、頸部外面には3条を一単位とする工具で櫛描波状文が認められる。57は口縁部と頸部の境付近の破片、58～62は胴部の破片である。胴部外面にはいずれも平行叩き、内面には同心円当具痕が認められる。外面の平行叩きは58がやや粗く、他は細かく密に施されている。63は双耳壺の肩部破片と思われ、把手が貼り付いていた痕跡が観察できる。64は蓋のツマミ部の破片である。65～67は壺類の底部破片と推定され、65・66は高台が貼り付けられているが、67にはそれが認められない。68～70は高台付坏の底部、71は高坏坏部の破片と考えられる。

当該層には長沙系黄釉褐彩水注などの注目すべき遺物が含まれるほか、後述するV層群出土遺物と比較すると、黒色土器A類および緑釉陶器が新たな器種として出現していることが注意される。以上の遺物群は層位的な所見と個々の特徴から、若干の混入品を除いて、9世紀中頃から後半を主体とする時期に位置づけられる。



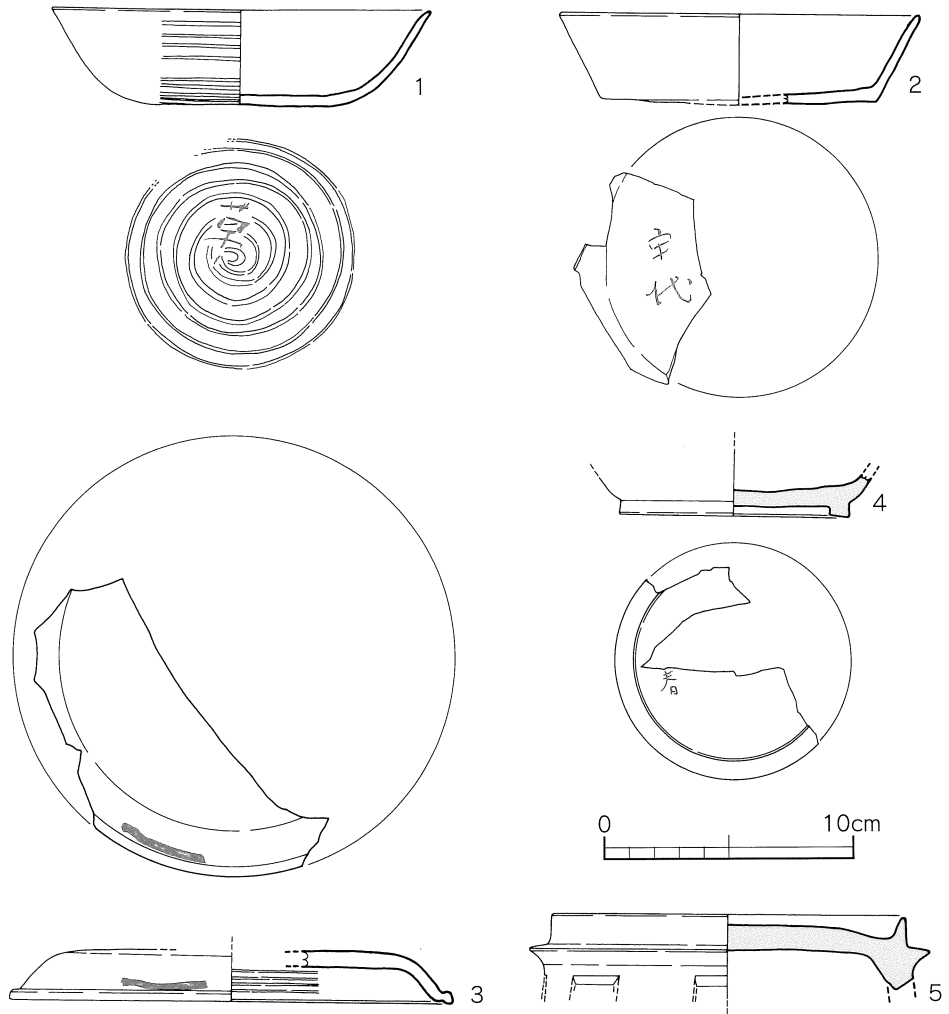
第32図 遺構配置図・古代②(1/120)

### ③古代の遺構・遺物 2

**概要** 本報告でV層群（深緑色粘質土）とした土層群は、古代（8世紀末～9世紀前半）の遺物を含む包含層である。当該土層はIV層を除去した段階で検出され、調査区南側で検出されたSX008の埋土となる。SX008は調査区を東西方向に縦断するような形で検出された落ち込みで、流路等の自然地形の一部である可能性が考えられる。従って、V層群の分布範囲はSX008が存在する調査区南半部に限られることになる。V層群は植物遺体を多く含む深緑色粘質土を主体に構成され、粘質土の間に砂層や砂質シルトを挟む部位が認められる。堆積状況からは一時期水流が生じた様相が観察されるものの、構成土層の大半は滞水の状況を呈している。V層群中からは流木や植物遺体、木器、土器類などが出土した。当該土層から出土した土器の大半は8世紀末から9世紀前半の様相を示し、注目すべき遺物としては、墨書土器や円面硯（圈足硯）がある。

**V層群出土遺物（第33～39図）** 第33図1～4には、墨書土器を掲げた。1はいわゆる「坏d」タイプといわれる土師器坏である。色調・胎土は赤褐色を呈する。口縁部がわずかに外反する器形を呈し、外面にはミガキ間に粗面を残すヘラミガキ（以下、「粗面ミガキ」と略称）、内面にはナデを施す。底部外面は回転ヘラ削りの後に粗面ミガキを施し、「草」と判読できる墨書が認められる。2は「坏a」タイプといわれる土師器坏で、口縁部は直立気味に立ち上がる器形を呈する。内外面はナデ調整で、底部はヘラ切り離しのままである。底部は3分の

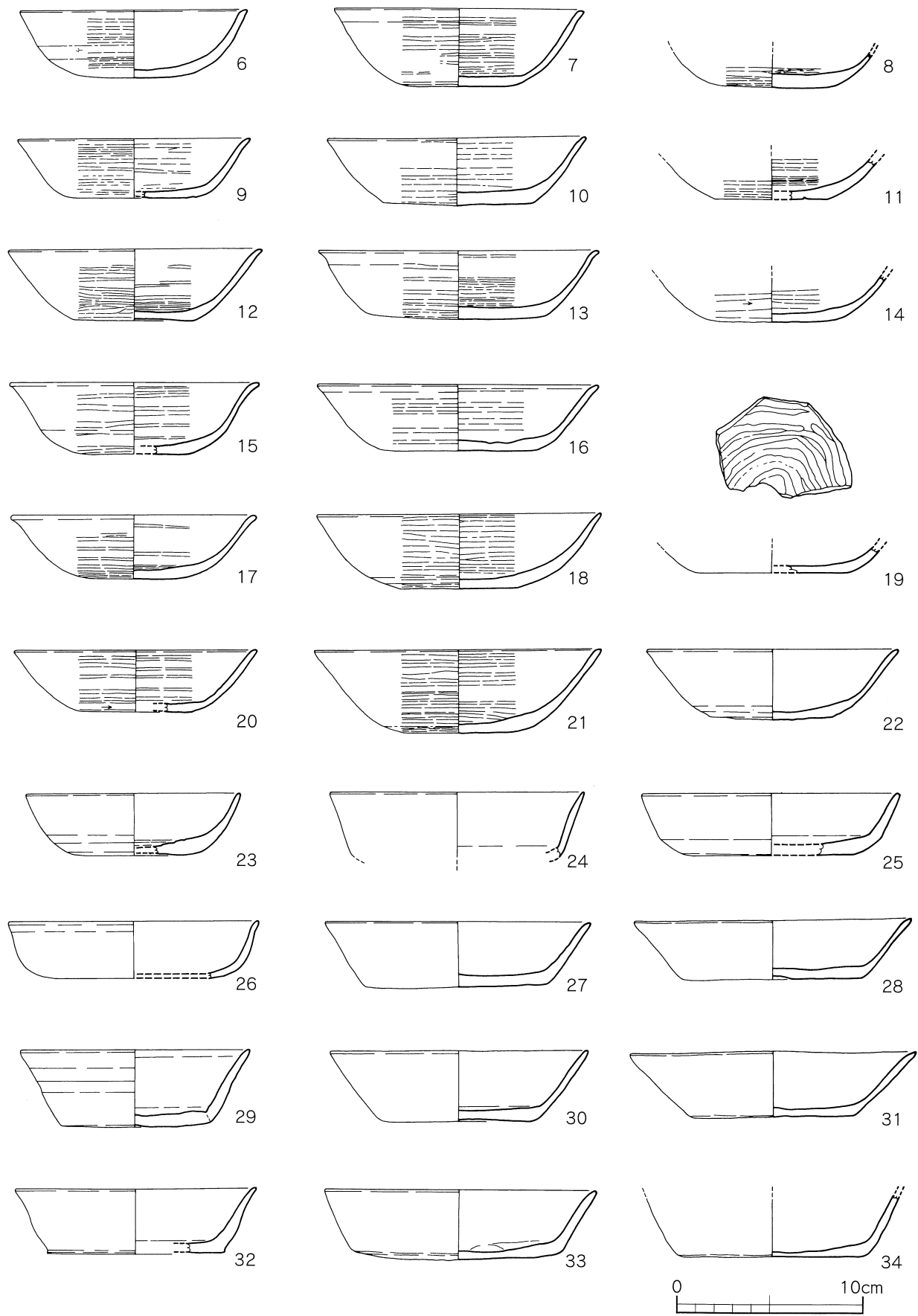
1 程度が残存し、残存部分に墨書が存在する。墨書は、現状では「字代」と判読し、人名などの固有名詞である可能性を考えておきたい。3は土師器蓋で、天井部が欠損しているため、ツマミの有無は不明である。内外面ともにミガキ間に粗面を残すヘラミガキが施されている。口縁部付近の外表面には「一」と判読できる墨書が認められる。4は須恵器高台付碗の底部である。内底部に墨書が認められ、正確には判読できないが、「春」と読める可能性を指摘しておく。5は円面硯（圈足硯）で、口縁部の3分の1強が残存する破片である。硯面部は磨り減っており、使用の痕跡が認められる。脚部は欠損しているが、わずかに残存する部位には透かしが存在した痕跡がみとめられる。



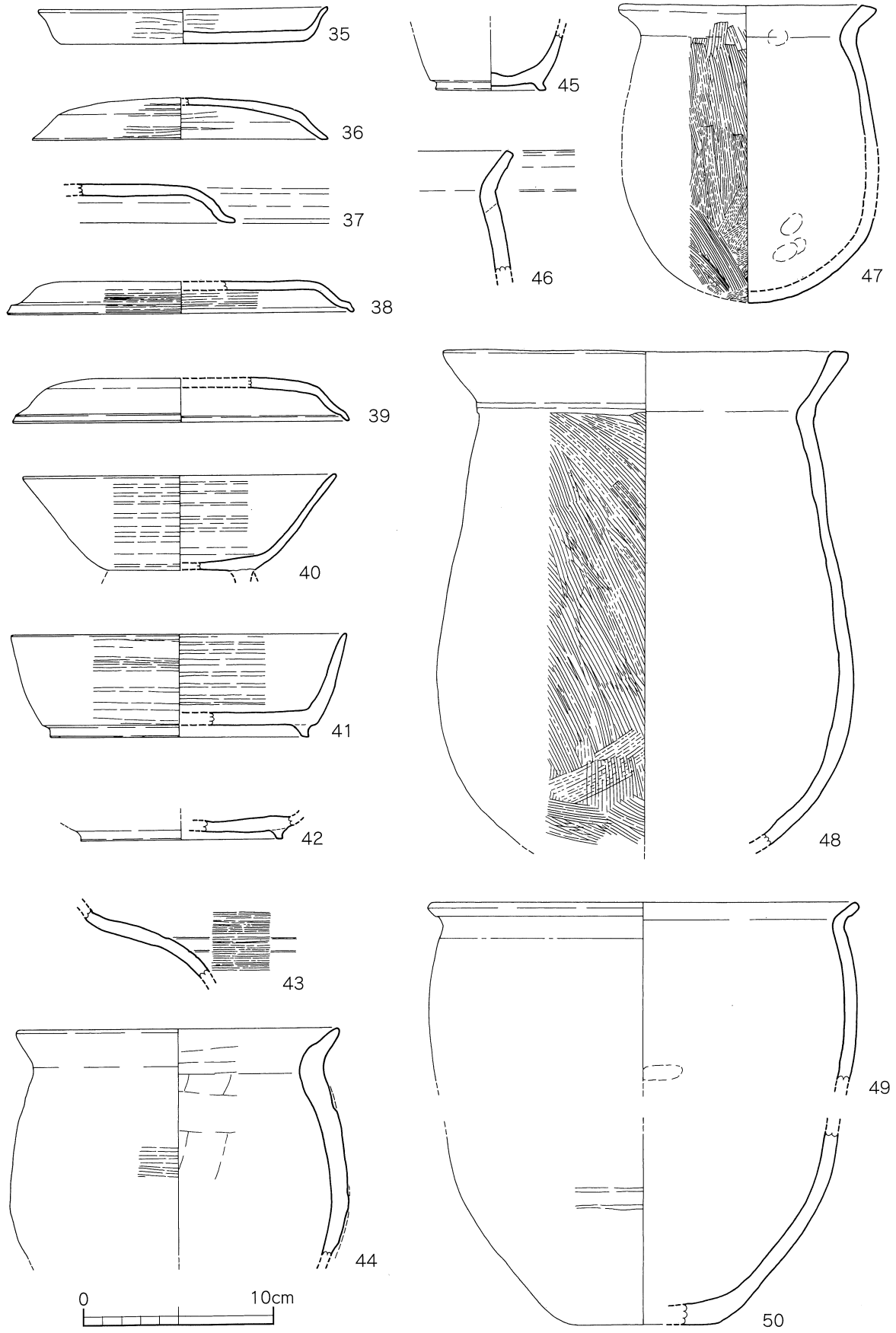
第33図 V層群出土遺物①(墨書土器・円面硯 1/3)

第34図6～21は「坏d」タイプに分類される土師器坏である。口縁部がわずかに外反する器形を呈し、底部には回転ヘラ削りを施した後にヘラミガキを施す。内外面にもヘラミガキが施されるが、その大半は粗面ミガキとなる。22・23も土師器坏で、底部外面に回転ヘラ削りを施すが、ヘラミガキはあまり目立たず、内外面ともナデ調整を主体とするものである。24～34は「坏a」タイプに分類される土師器坏である。底部は基本的にはヘラ切りのまま、あるいは若干のナデを施す程度の調整で、内外面もナデを主体とし、ヘラミガキは認められない。第35図は土師器皿で、口縁端部が外反する器形となる。底部には回転ヘラ削りが認められる。内外面ともに粗面ミガキが認められる。36～38は土師器蓋である。36・37は口縁部が外反する器形を呈し、前者にはヘラミガキが認められるものの、後者にはそれが目立たない。38・39は嘴状の口縁を有するもので、これも前者には内外面にヘラミガキが認められるものの、後者にはそれが目立たない。40・41は大型の部類に属する高台付碗で、前者は口縁部が外反する器形、後者は口縁部が内湾気味に立ち上がる器形を呈する。いずれも内外面には粗面ミガキを施す。42は黒色土器A類の坏の底部破片である。内底部はヘラ切り後ナデを施すもので、9世紀後半以降に下る製品の可能性も考えられる。小破片のため、混入品あるいは取り上げミスである可能性もある。43は器種不明の土師器である。壺等の器形を呈する製品であろうか。外面にヘラミガキ、内面にはナデ調整を施す。45は土師器壺の胴部から底部の破片で、内外面に丁寧なナデを施す。44・46は土師器甕で、44の内面には削り、46の内面にはナデが施されている。47・48は企救型甕で、内面に削りは認められず、外面には粗いハケ目が認められる。49・

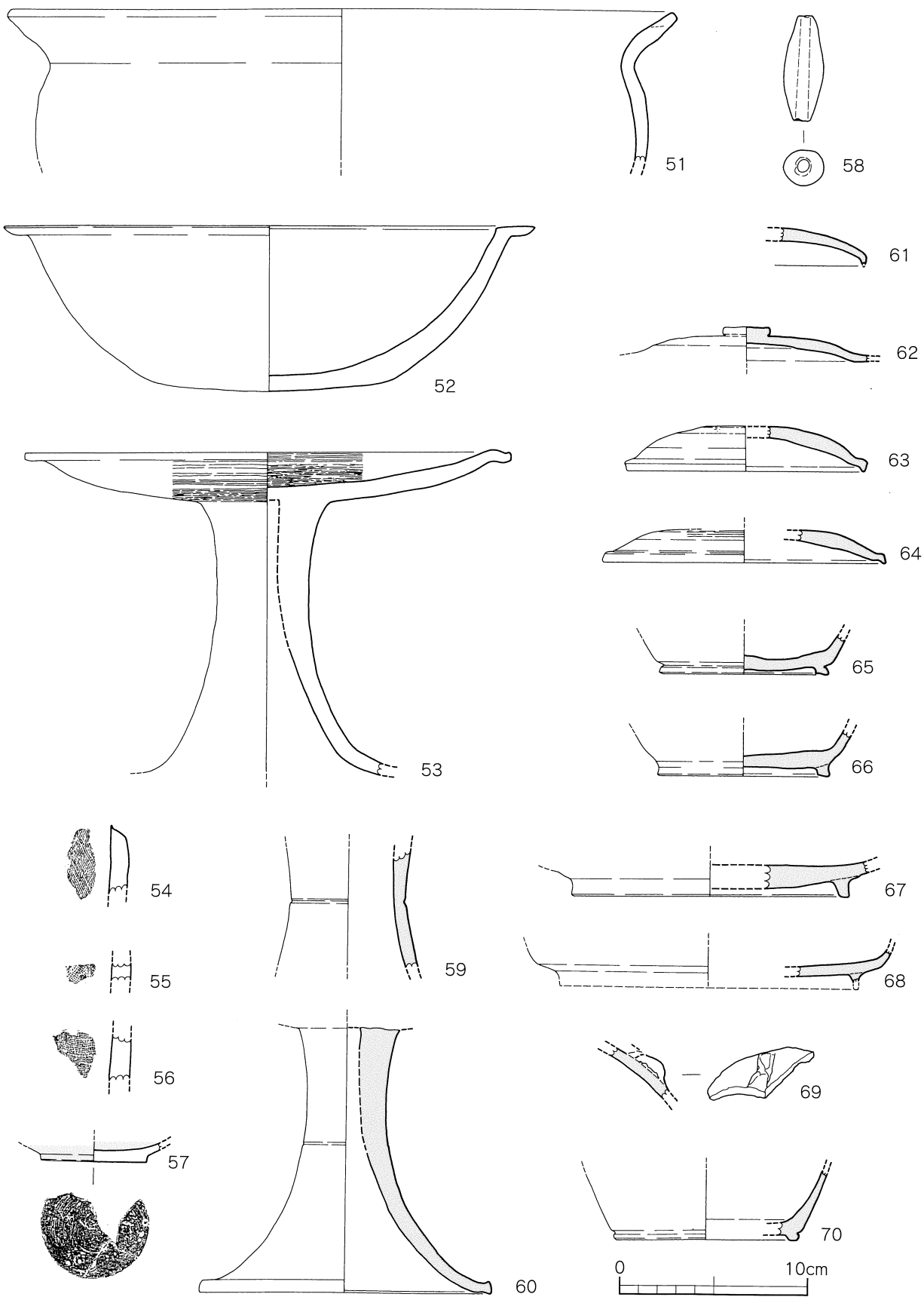




第34図 V層群出土遺物②(1/3)

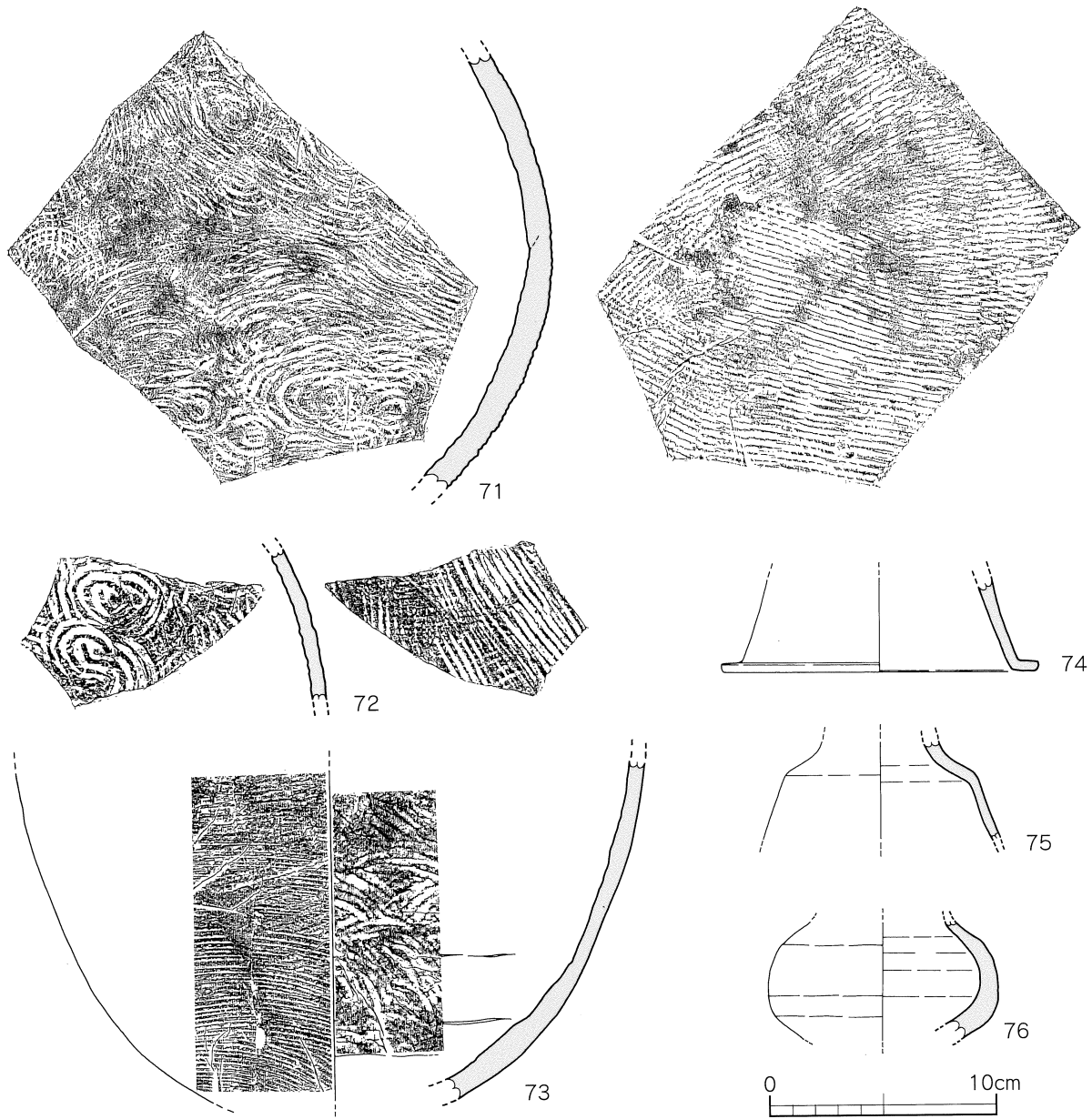


第35圖 V層群出土遺物③(1/3)



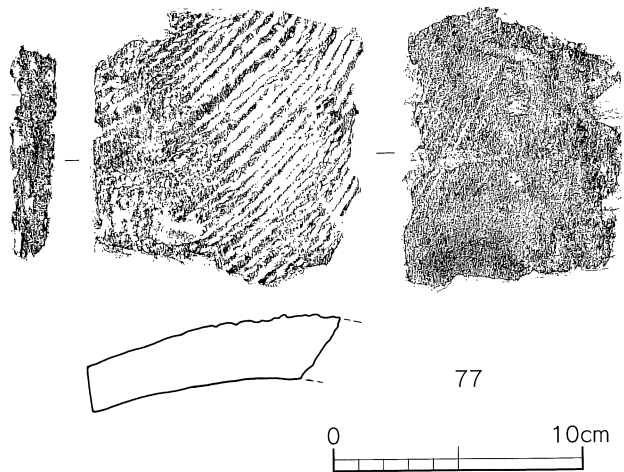
第36图 V層群出土遺物④(1/3)



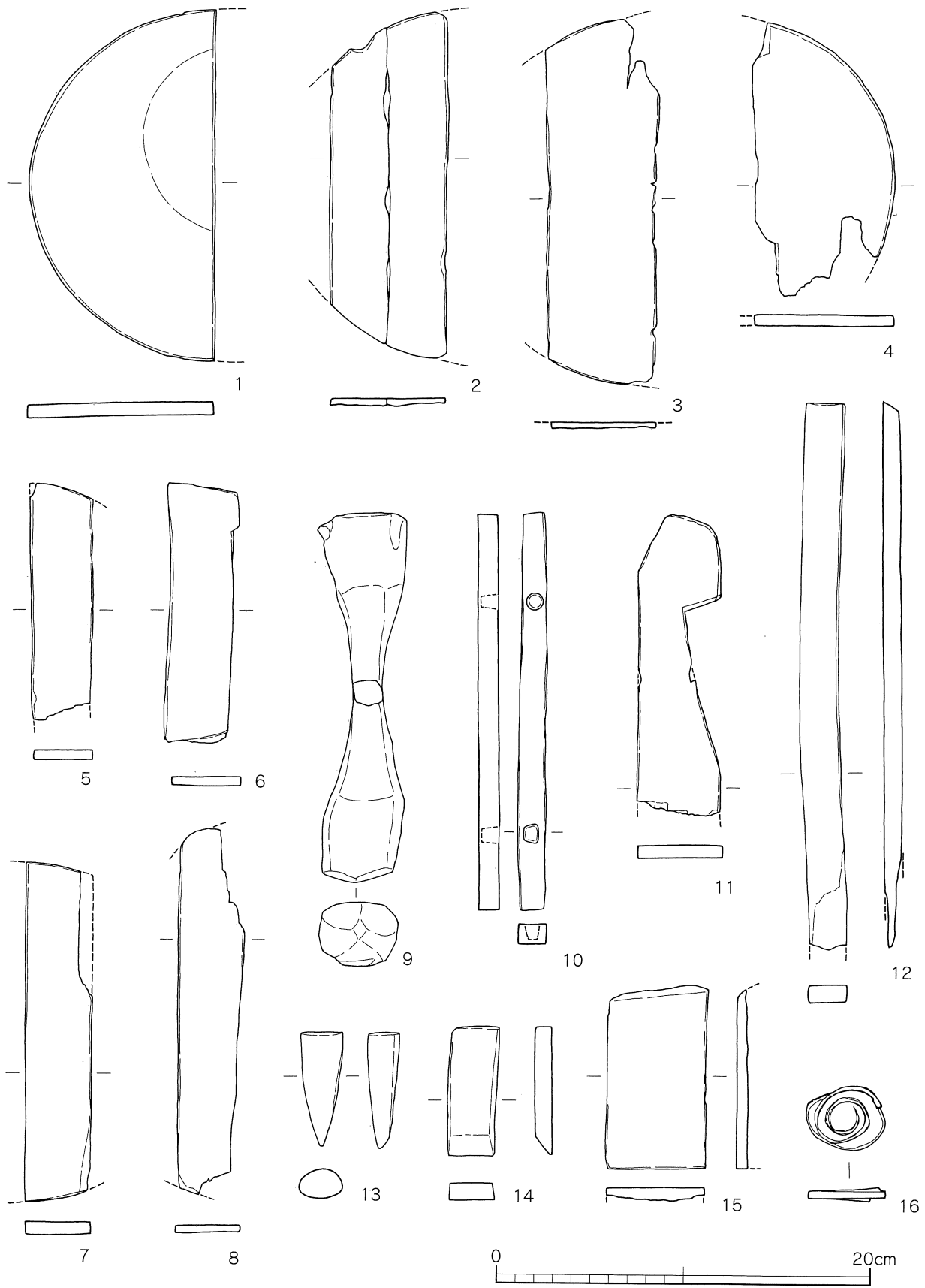


第37図 V層群出土遺物⑤(1/3)

50は同一個体の土師器甕で、内外面はナデ調整を主体とし、底部は平底となる。第36図51も内外面にナデ調整を施す土師器甕である。52は土師器鉢で口縁部が水平に屈曲する器形を呈する。底部外面には回転ヘラ削りを施す。53は土師器高坏で、浅い坏部に屈曲する口縁を有し、口縁端部がわずかに立ち上がる。54~56は「六連島式」と呼ばれる製塩土器で、54は口縁部、55・56は胴部の小片である。内面に布目圧痕が認められる。57は緑釉陶器皿の底部である。底



第38図 V層群出土遺物⑥(瓦 1/3)



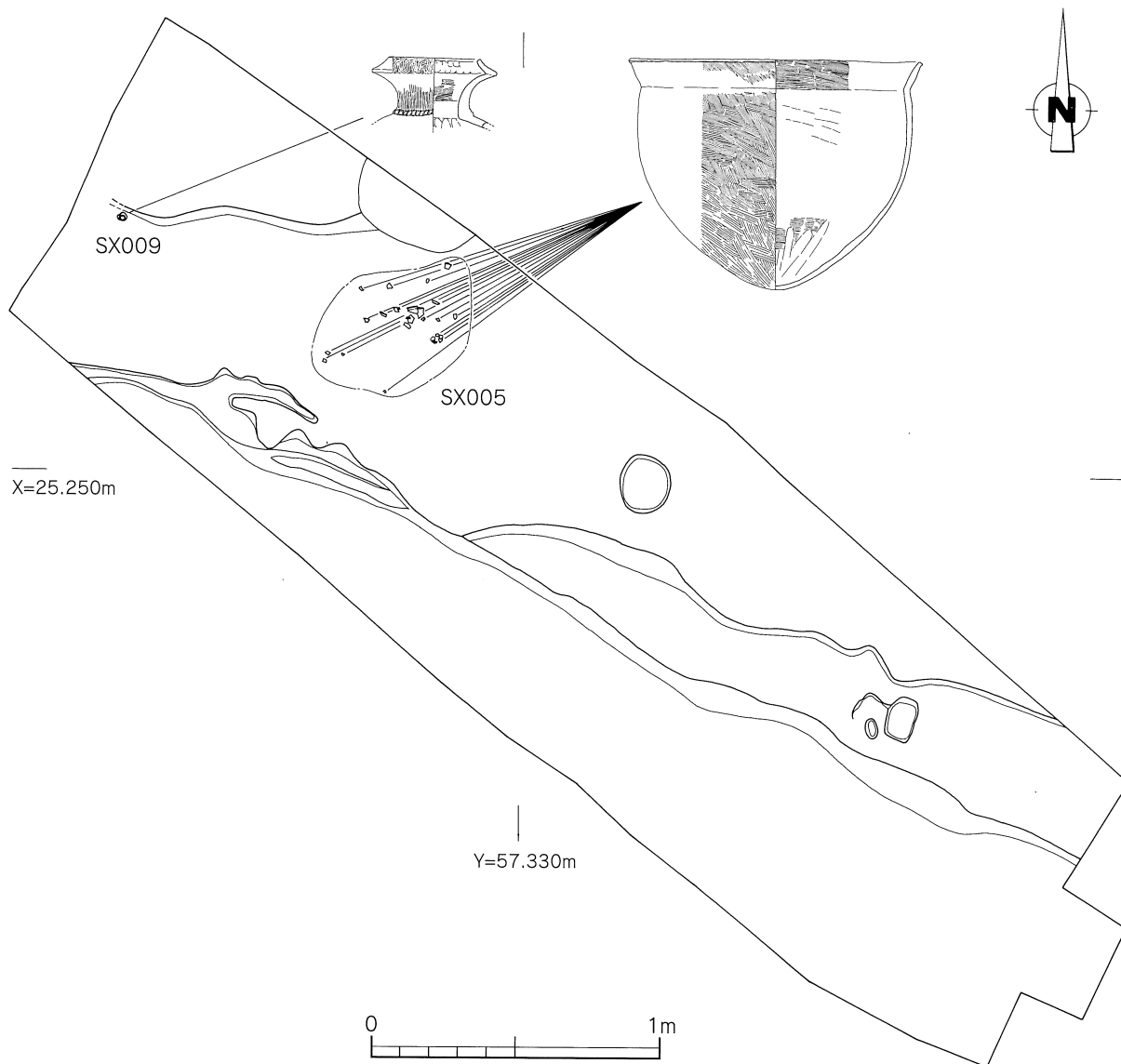
第39図 V層群出土遺物⑦(木製品 1/3)

挿図No.	遺物名称	長さ (cm)	幅 (g)	厚み (cm)	材 質	備 考 (取り上げNo.)
第39図 1	曲物底板	18.8	9.8	0.7	ヒノキ	B 2 -No.146
2	曲物底板	18.6	6.1	0.4	モミ属	B 2 -No.105
3	曲物底板	18.6	5.7	0.3	モミ属	B 2 -No.125
4	曲物底板	14.6	7.2	0.5	モミ属	B 2 -No.144
5	曲物底板	13.0	3.1	0.5	スギ	B 2 -No.138
6	曲物底板	13.7	3.3	0.4	ヒノキ	B 2 -No.192
7	曲物底板	18.0	3.4	0.7	ヒノキ	B 2 -No.147
8	曲物底板	19.4	3.2	0.4	ヒノキ	B 2 -No.169
9	垂具	19.8	4.4	3.1	ヒサカキ	B 2 -No.140
10	加工木材	21.1	1.4	1.0	ヒノキ	B 2 -No.165
11	加工木材	15.9	4.4	0.7	ヒノキ	B 2 -No.104
12	加工木材	29.1	2.1	0.9	ヒノキ	B 2 -No.164
13	楔?	6.0	2.2	1.4	コナラ属アカガシ亜属	B 2 -No.124
14	楔?	6.9	2.6	0.9	ヒノキ	B 2 -No.110
15	楔?	5.1	9.6	0.6	ヒノキ	B 2 -No.143
16	綴紐	—	—	—	樹皮	B 2 -No.141

第5表 木製品観察表

部外面には回転糸切り痕が認められる。胎土は灰黄褐色を呈する。58は管状土錘で、V層群から出土した土錘はこれが唯一のものである。59・60は須恵器高坏の脚部で、残存部分に透かしは認められない。61～64は須恵器蓋であるが、小破片のためツマミの有無が判明するものは62のみである。65～68は須恵器の高台付埴である。少なくとも、小型と大型の二法量が存在するようである。69は須恵器双耳壺の肩部の破片である。貼り付けによる把手の存在が確認できる。70は須恵器壺の底部と思われる破片である。第37図71～73は須恵器大甕の胴部破片で、いずれも外面に平行叩き、内面に同心円当具痕が認められる。74・75は須恵器の器種不明の製品で、74は脚部、75は肩部である。76は須恵器甕の胴部破片と思われ、古墳時代後期（6世紀後半代）の製品である。混入品であろう。77は凸面に縄目叩きが認められる平瓦である。凹面には布目痕とともに糸切り痕が残る。以上の土器類は、層位的な所見や個々の特徴から、その大半が8世紀末から9世紀前半に比定される。

第39図には、V層群から出土した木製品を掲げた。1～8は曲物底板である。素材としては、ヒノキ・スギ・モミ属が使用されている。1の中央付近には二次的な被熱による変色部分（焦げ）がある。9は「ツチノコ」等と通称される木製垂具で、編物や組紐の製作時に使用される道具である。ヒサカキが使用されている。10は断面方形の加工木材で、2箇所径5mm、深さ5mm程度の円形孔を有する。孔は未完通である。11・12も用途不明の加工木材である。以上の加工木材には、すべてヒノキが使用されている。13～15も用途不明の加工木材であるが、断面を台形状に加工していることから、楔のような機能を果たす製品である可能性を考えたい。コナラ属アカガシ亜属あるいはヒノキが使用されている。16は桜皮製の綴紐で、曲物側板の固定などに使用される素材である。以上の木器類もその層位的な所見から、8世紀末から9世紀前半に廃棄されたものと推定される。



第40図 遺構配置図・弥生時代後期末～古墳時代前期初頭(1/120)

#### ④弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺構・遺物

**概要** 調査区北西側で弥生時代後期末から古墳時代前期初頭の遺物を検出した。遺物は弥生土器2個体で、ひとつは複合口縁壺、今ひとつは甕である。これらは調査区北西側に堆積するI・II層を除去した段階で出土し始め、地山面と考えている暗赤褐色粘質土および灰青色粘質土の直上に分布していた。複合口縁壺は調査区西壁近くの段状の小地形付近から口縁部を下に向けた状態で検出され、甕は調査区北西側中央付近から散布状態で検出された。前者の複合口縁壺の出土地点をSX009、後者の甕の分布範囲を土器溜めSX005とする。

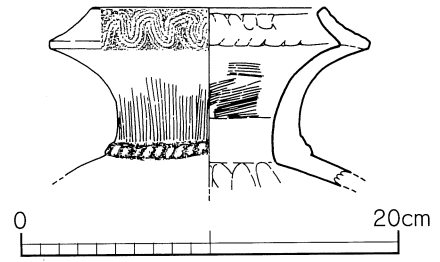
**SX009** (第41図) 調査区西壁近くの地点から複合口縁壺の口縁部が、口縁部を下に向けた状態で出土した。周囲に土質・土色などの変化は認められず、出土遺物もこの1点に留まる。



第41図 SX009遺物出土状況



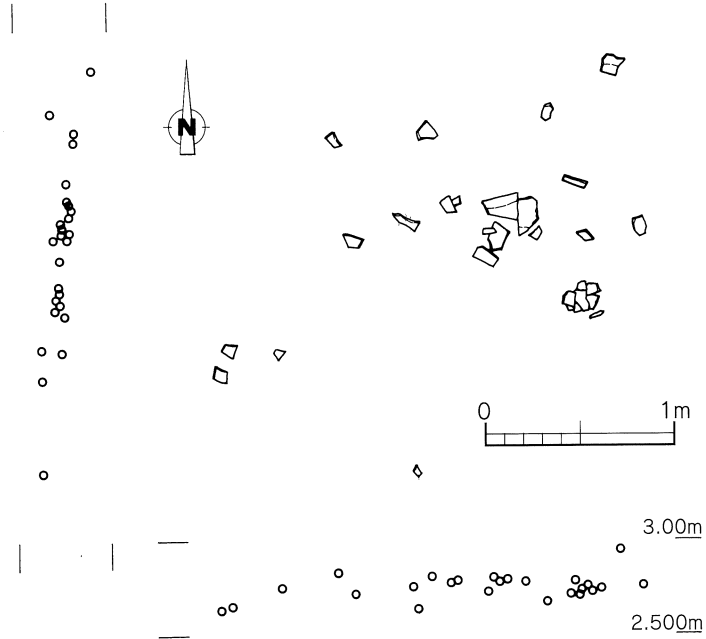
**出土遺物** 第42図はSX005から出土した弥生土器の複合口縁壺である。口縁部外面には6条程度を一単位とする櫛描き波状文が1段のみ認められる。第二次口縁に相当する部位の発達はあまり著しいものでなく、豊後海岸部地域の特徴をよく表している。頸部には刻目を有する突帯を有する。調整は頸部内外面はハケ目を主体とし、口縁部内面および肩部内面には指頭痕が顕著に認められる。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭前後の所産である。



第42図 SX009出土遺物(1/4)

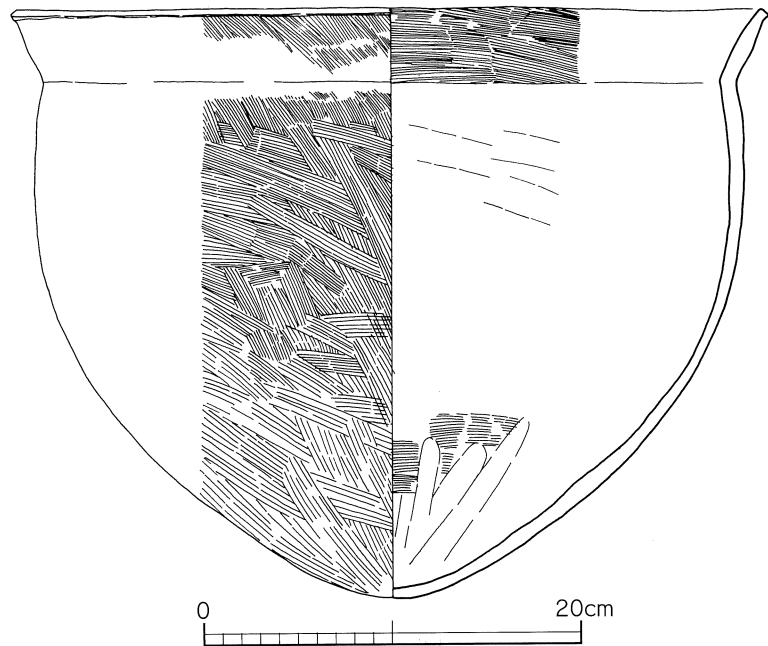
**土器溜めSX005(第43図)**

調査区北西側中央の2×2.5m程の範囲で検出された土器溜め遺構である。甕1個体分が小破片となり、バラバラの状態で検出された。周囲に土質・土色などの変化は認められなかった。遺物の垂直分布を検討すると、地形に沿った形で北から南側へ緩やかに傾斜してゆく状況が観察できる。また、同一個体と推定される破片が、落ち込みSX008やV層群最下部からも出土しており、個々の破片は、本来もう少し広い範囲に分布していたと推定される。



第43図 SX005遺物出土状況(1/30)

**出土遺物** (第44図) 第44図はSX005から出土した弥生土器の甕である。くの字状の口縁部を有し、底部はほぼ丸底となる。口縁端部に調整を行い、面取りがなされている。外面はハケ目調整を主体とし、内面にはハケ目とともにナデ調整が施される。弥生時代後期末から古墳時代前期初頭前後の所産である。



第44図 SX005出土遺物(1/4)

### 3. まとめ

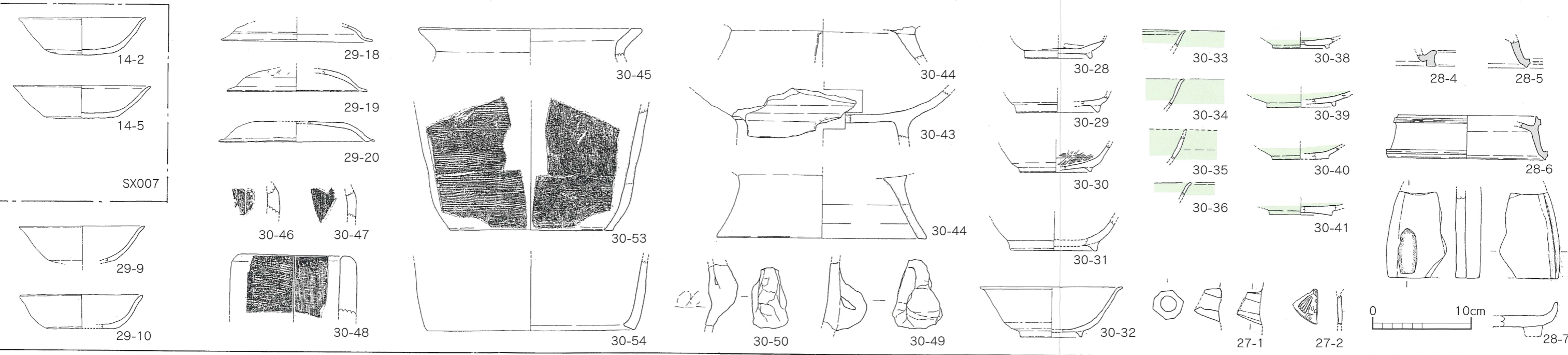
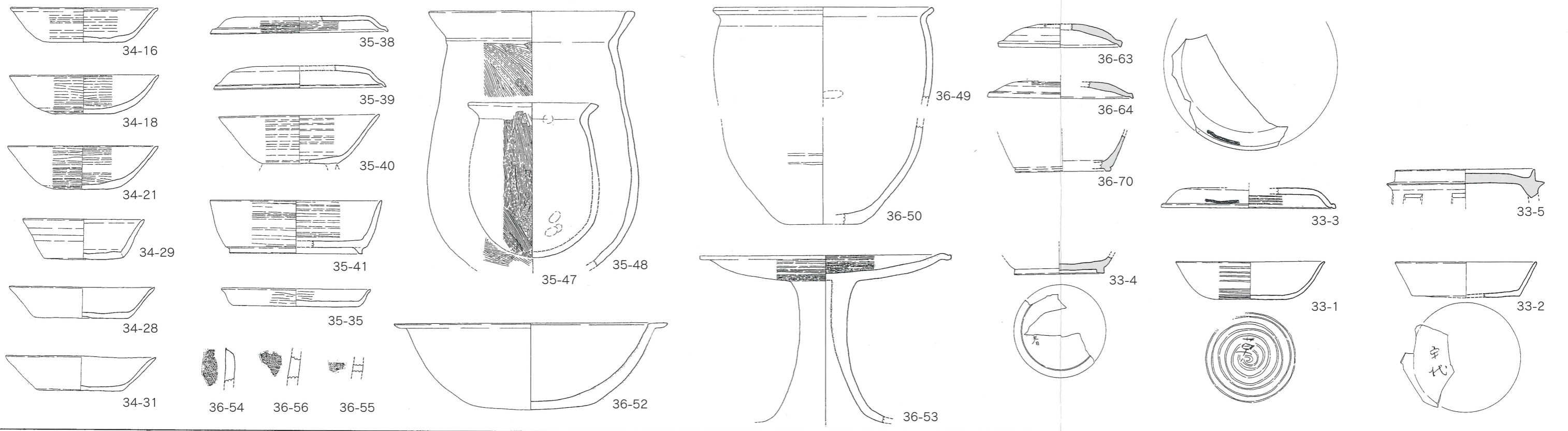
#### ①古代の土器について

上野町遺跡では、本書でⅡ層～Ⅴ層群とした堆積層より、8世紀末から9世紀代と考えられる土器群が多量に出土した。発掘調査現場では各層ごとの取り上げを意図したが、すでに本文中で記したとおり、各々の層が調査区で均一に分布しているわけではないため、一部の遺物で層の帰属が曖昧にならざるを得なかったものが存在する。そこで整理段階では、上位のⅡ層～Ⅳ層群、下位のⅤ層群という上下2層に大別した遺物群を検討したところ、この上下の層位で明確な土器相の違いを認めることができた。上位のⅡ層～Ⅳ層群には一時旧地表であったと思われる暗褐色粘質土(Ⅲ層)を挟むため、一定の時間幅を有する遺物群が包含されていることを考慮する必要がある。そのため、当該層位の土器相を明確にするため、Ⅳ層中で検出されたS X007(土師器坏5個体の一括廃棄資料)を参考にする。また、下位のⅤ層群からの遺物は包含層からの出土資料であるが、落ち込みS X008下位からの出土遺物群であり、一括資料に準ずる扱いが可能であると考え。以下、それぞれの層位での遺物の様相を検討したい(第45図)。

Ⅴ層群からは、土師器坏・蓋・高台付碗・皿・甕・鉢・高坏・焼塩用製塩土器、須恵器蓋・高台付碗・墨書土器・円面硯(圈足硯)などが出土している。まず、土師器坏に関しては、内外面と底部に粗面ミガキを施す坏dと内外面がナデ調整で、底部がヘラ切り離しのままとなる坏aが共存する。蓋については出土事例と良好な個体が少なく、ツマミの有無に関しては判断が不可能である。甕についてはいわゆる「企救型甕」<sup>(1)</sup>と平底で「く」の字状の口縁部を呈する形態のものが共伴する。鉢は口縁部が水平に屈曲する形態を呈し、底部外面にヘラ削りを施す。高坏は浅い坏部に屈曲する口縁を有し、口縁端部がわずかに立ち上がる。その他、「六連鳥式」と呼ばれる焼塩用製塩土器が少量出土している。また、「豊後大分型甕」<sup>(2)</sup>と称されている豊後大分郡周辺地域に特徴的な分布を示す土師器の甕は、この段階ですでに出現しているはずであるが、上野町遺跡Ⅴ層では出土が確認できなかった。須恵器では、壺・高坏などとともに、供膳形態である高台付碗と蓋が少量ながら残存する。円面硯(圈足硯)は口縁の立ち上がり直立し、脚部に方形の透かしを有するものが出土している。また、須恵器高台付碗、土師器坏a・坏d・蓋に墨書を有するものが認められた。黒色土器・緑釉陶器は、当該層群からはわずかに1個体ずつが出土している。黒色土器・緑釉陶器についても、この段階ですでに出現しているもよいが、上野町遺跡Ⅴ層群では出土事例が少ないことや上層のⅡ～Ⅳ層群で一定量の事例が認められるため、Ⅴ層群のものについては上層からの混入品である可能性も考えられる。そのため、Ⅴ層群中における黒色土器・緑釉陶器の存否については保留しておきたい。

Ⅳ層中で検出されたS X007は、土師器坏5個体が一括廃棄された遺構である。いずれも坏aで、黄白色系の色調を呈する。体部のヘラミガキは認められない。底部はいずれもヘラ切りによるものであるが、ヘラ切り後にナデ調整を施すものとナデ調整をほとんど行わず、粘土巻き上げの痕跡を顕著に残すものがある。

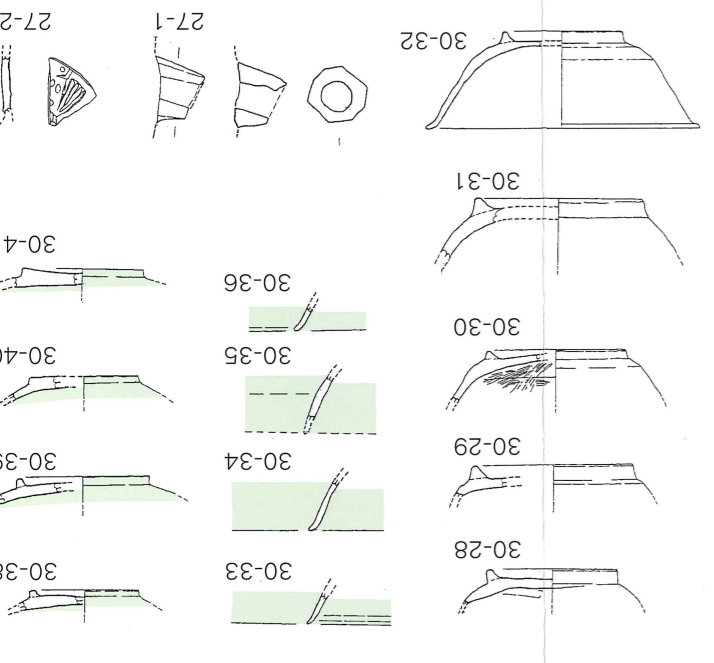
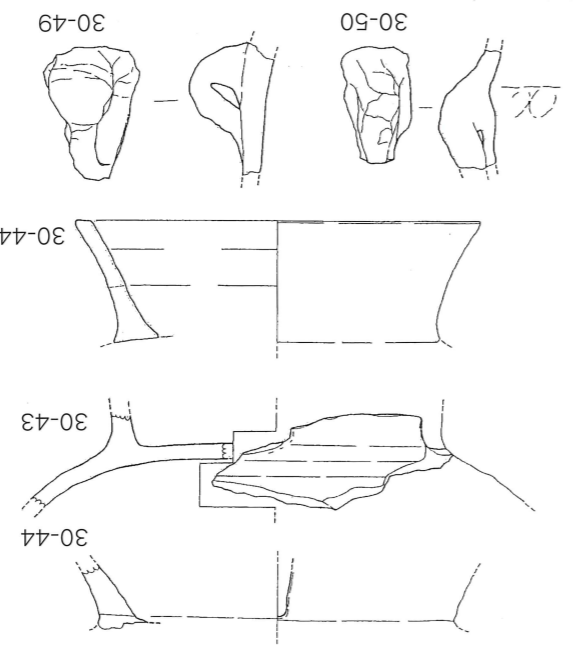
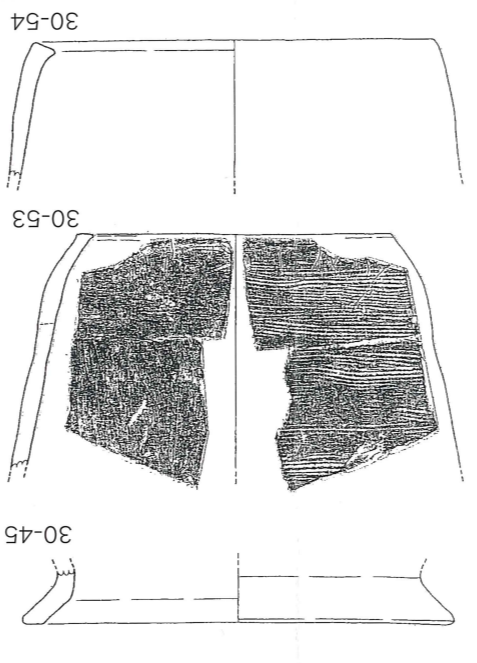
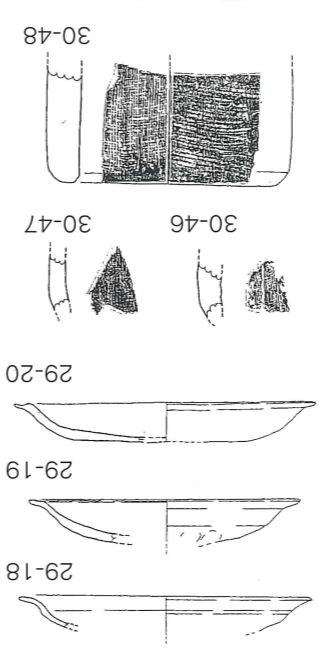
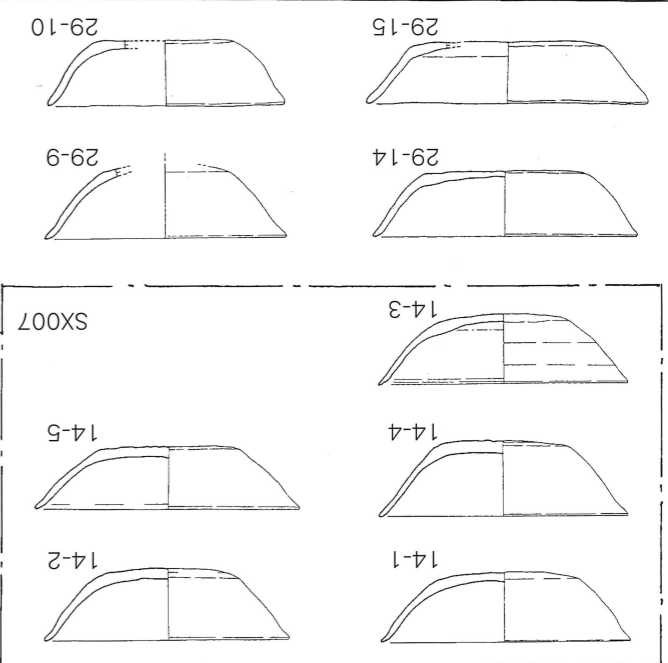
Ⅱ～Ⅳ層群からは、土師器坏・蓋・高台付碗・甕・甗・鉢・焼塩用製塩土器、黒色土器、緑釉陶器、長沙窯系黄釉褐彩水注・越州窯系青磁碗・円面硯(圈足硯)・風字硯形土製品などが出土している。土師器坏については、内外面にヘラミガキを施す坏dは明瞭には存在せず、底部をヘラ切り離しのままにする坏aが主体となる。蓋については、やはり完存資料が存在しないため、ツマミの有無は不明であるが、口縁端部の処理等に退化の傾向がうかがえる。甕については、引き続き企救型甕が存続する。甗については、豊後大分型甗が一定量出土するようになり、外面にカキ目調整を施す個体なども存在する。焼塩用製塩土器や黒色土器・緑釉陶器の出土も認められる。緑釉陶器の胎土はすべてが淡褐色を呈する軟質のもので、貼り付け高台をもつ碗と回転糸切り痕跡が残る皿の2形態が認められる。胎土が須恵質を呈する製品は、出土していない。須恵器の円面硯(圈足硯)は2個体が出土しており、ひとつは脚端部の小片、いまひとつは口径および底径の復元が可能な個体がある。いずれも透かしの有無は不明であるが、大型破片のものについても、残存部に透かしの痕跡は認められない。28-7は「風字硯形土製品」と呼称した特殊な製品であり、現状では墨の付着等は認められないようである。本製品の原型(モ



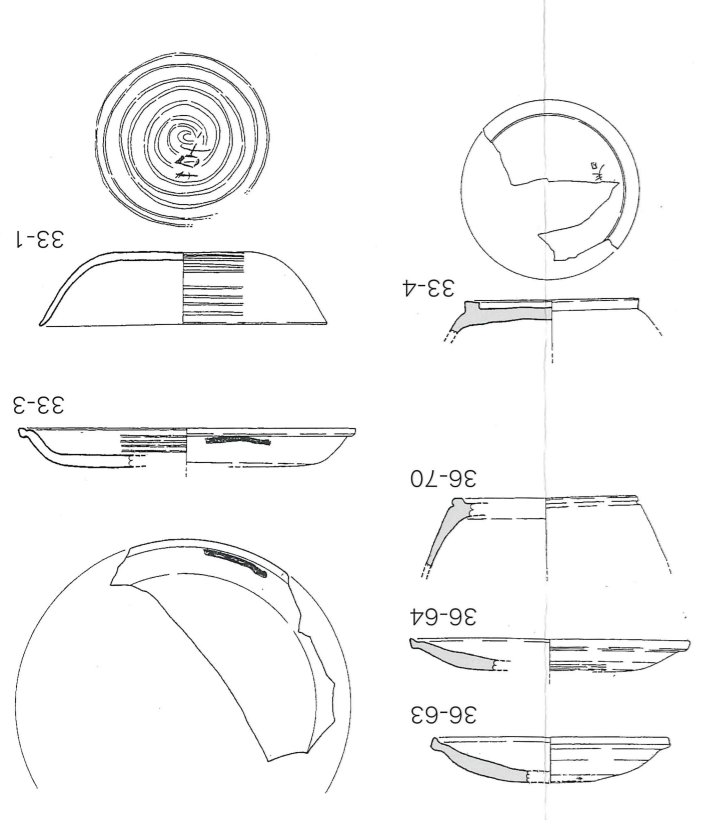
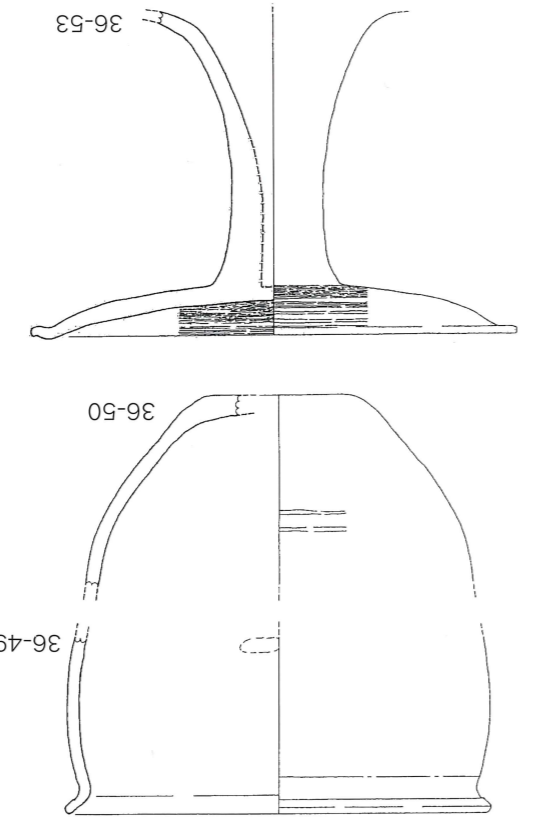
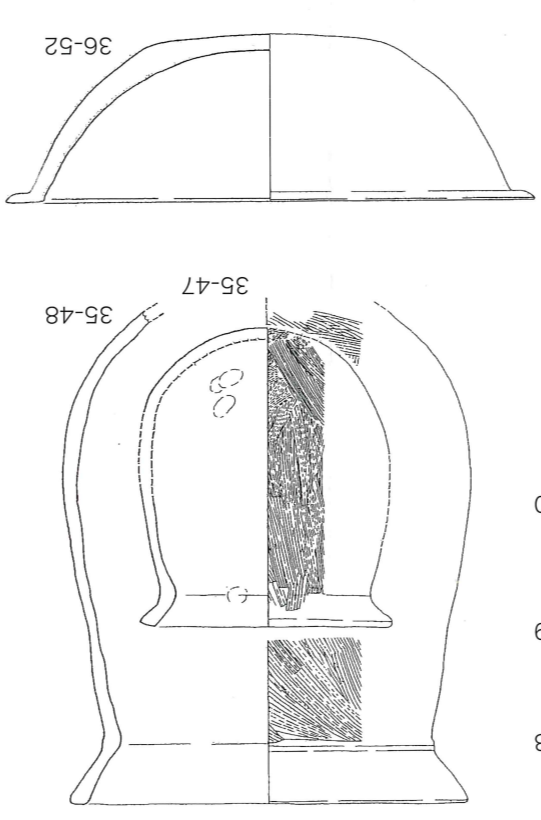
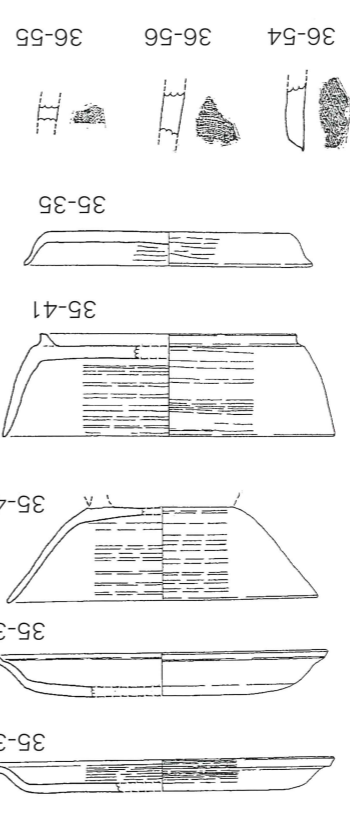
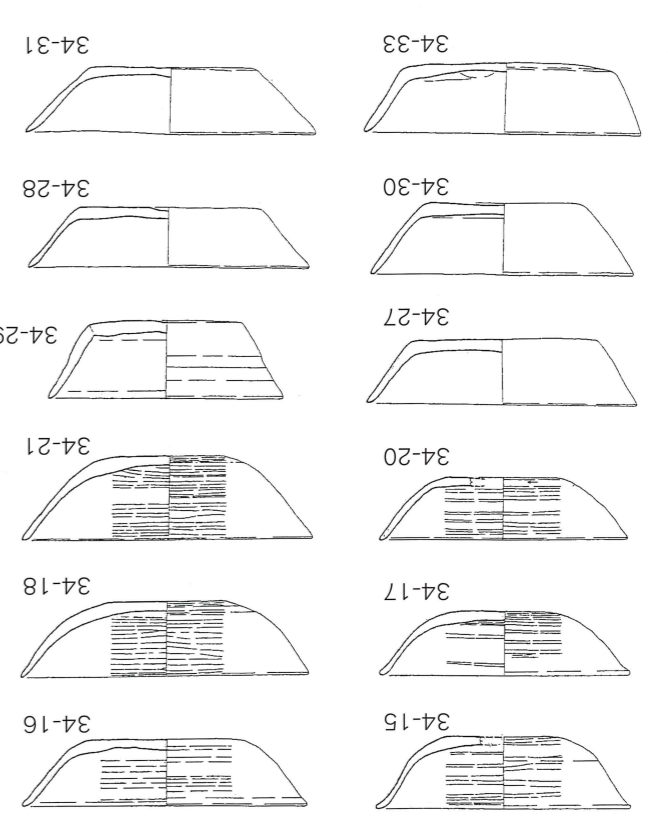
第45图 上野町遺跡出土土器編年图(1/4)



II 群 (O) 世紀中ノ頭ノ殘半



V 群 (O) 世紀末ノ頭





上野町遺跡		坪根・塩地編年(2001)		
年代	層位	時期	土器相の特徴	年代
8世紀末～ 9世紀前半	V層群	8-III	<ul style="list-style-type: none"> <li>大宰府系坏dの出現</li> <li>土師器坏の二系統併存(坏aと坏d)</li> <li>回転切り離しによる土師器坏の存在</li> </ul>	750
		9-I	<ul style="list-style-type: none"> <li>ツマミのない土師器蓋の出現</li> </ul>	800
		9-II	<ul style="list-style-type: none"> <li>ツマミをもった蓋の消滅</li> <li>供膳形態須恵器の激減</li> <li>緑釉陶器、黒色土器の出現期(現認段階)</li> </ul>	
9世紀中頃 ～後半	SX007 II～IV層群	9-III	<ul style="list-style-type: none"> <li>土師器坏の回転ヘラケズリ+回転ヘラミガキ技法の消滅(坏dの消滅)</li> <li>色調が赤褐色から黄白色系に変化しはじめる</li> </ul>	850
		9-IV	坏aの小型化(口径13cm前後)	
		10-I	(省略)	900

第6表 上野町遺跡の層序と坪根・塩地編年(2001)との比較

デル) となった須恵器の風字硯は、9世紀前半代には出現しており<sup>(3)</sup>、当該層位に風字硯形土製品が存在することは矛盾をきたすものではない。また、中国産の陶磁器類としては、長沙窯系黄釉褐彩水注(後述)と越州窯系青磁碗の破片が出土している。

以上のように、V層群とII～IV層群出土の土器相には、明らかに相違が認められる。最も顕著な相違点は、下位のV層群では坏dと坏aが共存し、黒色土器・緑釉陶器が基本的には存在しないのに対し、上位のII～IV層群では坏dがほぼ消滅し、坏aが主体を占めること、また黒色土器・緑釉陶器が普遍的に存在することなどが掲げられる。さて近年、7世紀から16世紀における豊後国の土器編年を通覧した業績が、坪根伸也・塩地潤一の両氏<sup>(4)</sup>によって公表された(以下、「坪根・塩地編年」と略称)。この業績は一括資料の配列から土器の型式学的変遷とその特徴を記述したもので、現状の豊後地域(特に大分市域)において最も整備された体系的な編年案として評価できる。そこでこの上野町遺跡の土器相と坪根・塩地編年とを対比することによって、上野町遺跡での各層位出土土器群の暦年代を推定することにしたい(第6表参照)。

まず、上野町遺跡V層群における土師器坏dと坏aの共存の様相は、坪根・塩地編年9-I期ないし9-II期に相当する。坪根・塩地編年では9-I期と9-II期を分離する要素として、ツマミを有する土師器蓋の完全消滅を重視しているが、上野町遺跡V層群では当該器種の完存品の事例がないため、細かい対応関係を決定することはできない。また、少数ながら供膳形態を呈する須恵器も残存しているようであり、その中には墨書土器を有する碗も存在するなど、9-I～II期をやや遡る様相をもつ資料も認められる。これらの状況は、V層群出土の土器群が落ち込みSX008下位に堆積する遺物群で、一括資料に準じた扱いが可能とはいえ、やはり包含層出土の遺物群であることから、細分された複数段階の遺物群を包含しているものと解釈可能である。この坏dと坏aの共存の様相は、「天長9年(832)」墨書土器を含む大分市豊後国分寺跡北西地区SK04<sup>(5)</sup>でも顕著に見ることができる。従って、上野町遺跡V層群における土器相の暦年代を天長9年(832)を含む8世紀末から9世紀前半代に考えることが可能である。次に、SX007出土資料であるが、一括廃棄された土師器坏5個体がすべて坏aで構成されることやそれらの色調が黄白色系のものに変化していることを特徴として掲げることができる。この様相は坪根・塩地編年9-III期に対応する。同様に、上野町遺跡II～IV層群で出土する土師器坏の大部分も坏aで占められ、坏dは基本的には消滅している公算が高い。従って、当該層位出土の土器群の大半も9-III期に対応するものであろう。坪根・塩地編年では9-III期と後続する9-IV期の境を850年頃に置き、9-III期につ

いては8世紀中葉でも前半に近い年代を考えているようだ。当該時期については実年代を確定する資料がなく、この状況は現在でも変化はない。本稿では上野町遺跡S X007およびⅡ～Ⅳ層群の土器相を坪根・塩地編年9-Ⅲ期にほぼ対応するものとし、暦年代については確たる根拠をもたないが、9-Ⅱ期の天長9年(832)墨書土器との前後関係から、9世紀中頃～後半と時間幅をやや広く取って考えておきたい。

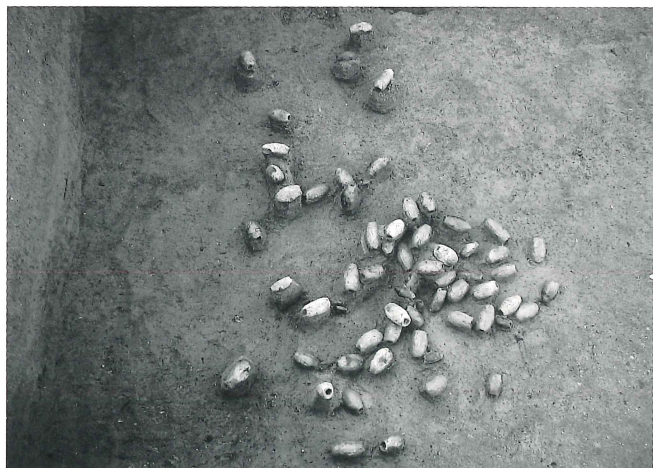
上野町遺跡では、8世紀末から9世紀にかけての土器群を層位的に上下の関係をもって分離することが可能であった。そして、上位のⅤ層群出土の土器相を8世紀末～9世紀前半に、下位のⅡ～Ⅳ層群の土器相を9世紀中頃～後半に比定した。これらの成果は先行研究である坪根・塩地編年を細分するには至らなかったものの、両氏が提出した編年案の流れを傍証し、また当該時期の土器相の変遷を層位的に検証できたという意味は大きい。今後、当該時期の土器編年に一定程度の役割を果たす資料として位置づけられ、さらに検証が行われることを期待したい。

## ②土錘について

上野町遺跡の出土遺物で特に注目される事象は、464個を数える土錘の出土量の多さである。これらは9世紀中頃から後半に比定した層位や遺構に集中しており、当該時期の土錘の出土総量は463個を数える。逆に、8世紀末から9世紀前半の層では小型土錘1個の出土に留まり、見かけの上では出土数が激減する。ここでは9世紀中頃から後半に比定した層位や遺構から出土した土錘を取り上げ、若干の分析を行いたい。

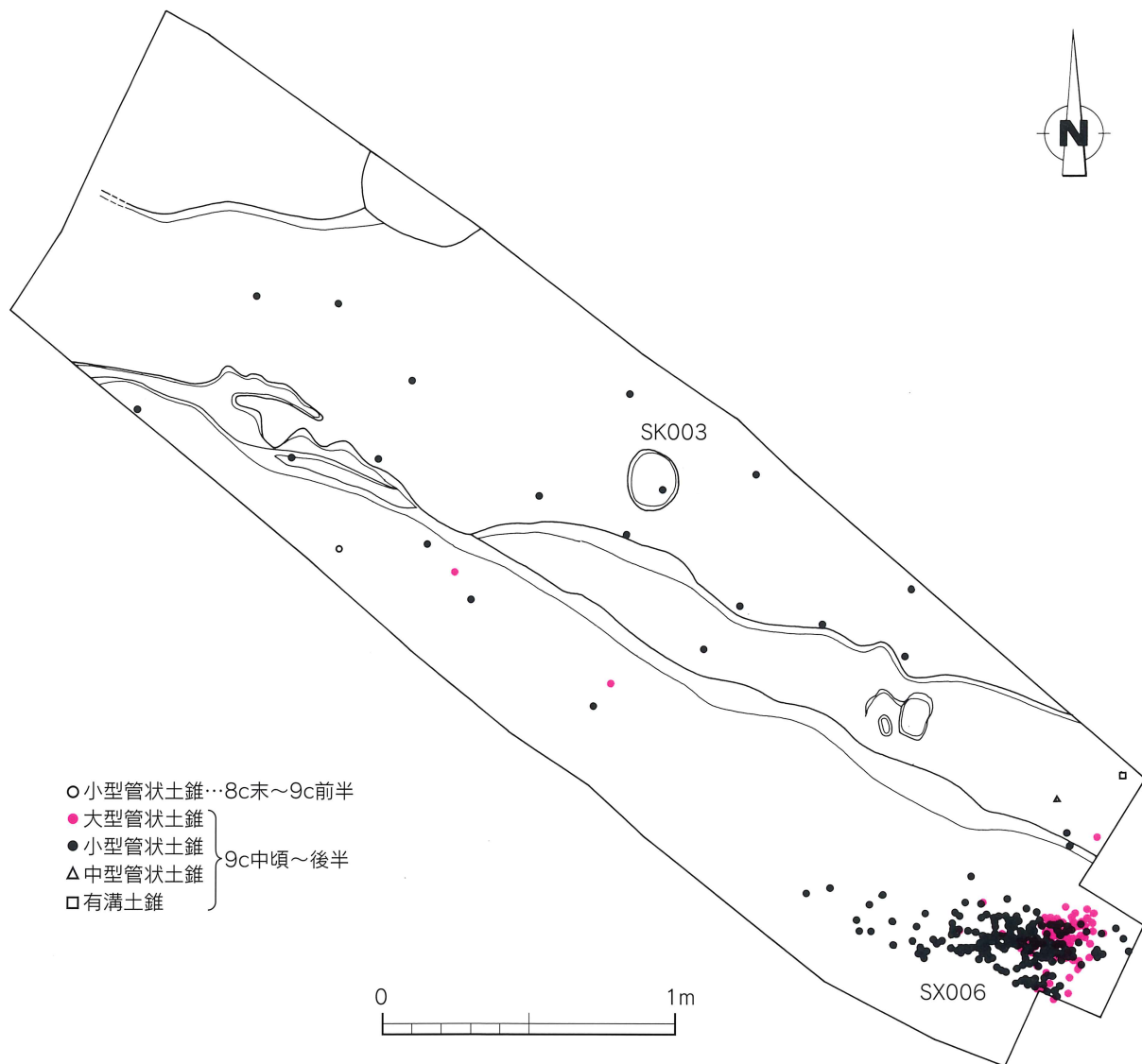
土錘が出土した9世紀中頃から後半の遺構としては、土坑S K003・土錘集中部S X006・包含層がある(第47図)。土錘については形態と法量(最大長・最大幅・重さ)から次の4つに分類した。すなわち、小型管状土錘(最大長3.8～6.6cm・最大幅0.9～1.7cm・重さ3.5～15.8g)、中型管状土錘(最大長6.2cm・最大幅3.1cm・重さ61.2g)、大型管状土錘(最大長5.8～10.6cm・最大幅3.2～5.8cm・重さ50～259g)、有溝土錘(最大長7.7～cm・最大幅4.4～cm・重さ83～127g)である(第7表)。試みに、小型管状土錘と大型管状土錘の法量(最大長・最大幅)をグラフ上にプロットすると、その領域が明瞭に分化していることがわかる(第49図)。また、中型土錘としたものは胴部に圧痕状の文様を有するやや特異なもの(第26図40)であり、1個の出土を認めるのみであるが、法量的には小型管状土錘と大型管状土錘の中間の領域を占める製品であるようだ。有溝土錘についてはS X006と包含層からそれぞれ1個、計2個の出土を数えるのみであるが、法量としては大型土錘の領域の中に含まれる。従って、有溝土錘は大型管状土錘の機能を補完する機能果たした製品と推定される。

調査区東南隅部で発見された土錘集中部S X006からは、全体の90パーセントを超える量の土錘が集中していた。S X006から出土した土錘には、小型管状土錘339個・大型管状土錘78個・有溝土錘1個がある。発掘調査の初期の段階では、これらの土錘が同一の漁網で使用されていたとい



第46図 SX006大型土錘出土状況 (上)西から(下)北から





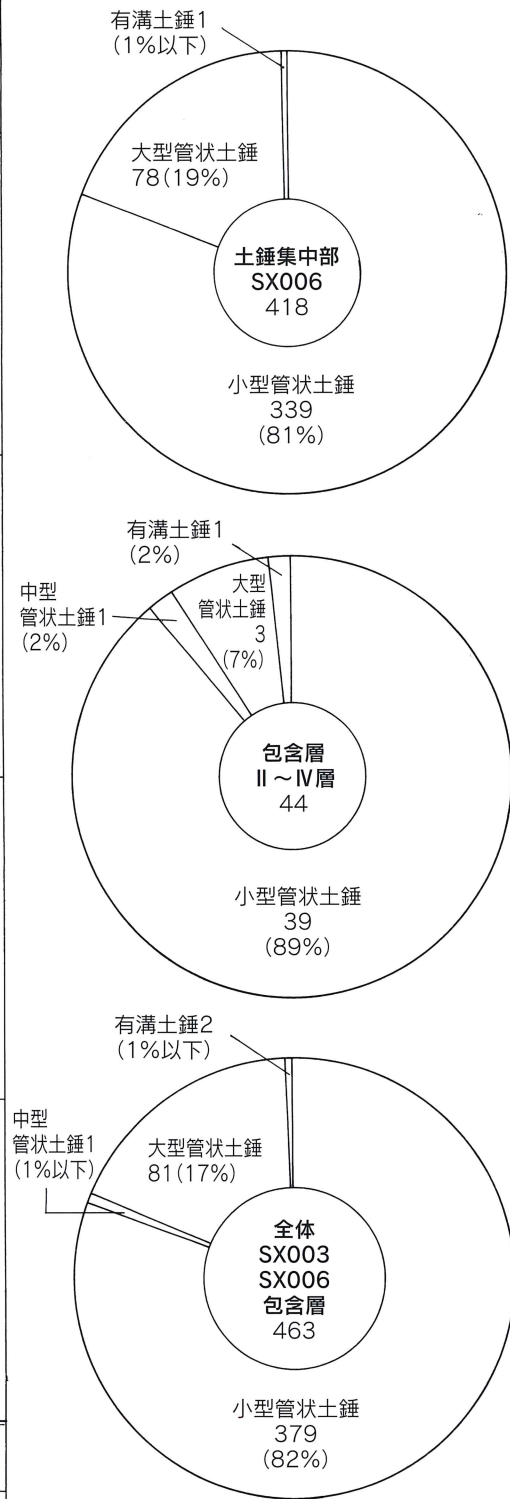
第47図 土鍾分布図(1/120)

う印象を持っていたが、調査が進行するにつれて小型管状土鍾と大型管状土鍾の分布領域が重複しながらも異なっていることが判明(第15・47図)し、最終的には両者が別々の漁網で使用されていたという所見を得た。特に、大型土鍾は比較的狭い範囲に集中しており、大多数のものが同一の漁網で使用されていたと推定する。漁網は検出地点付近に廃棄あるいは遺棄されたものと思われるが、網の部位は完全に消失していた。従って、SX006とした土鍾集中部には大型管状土鍾が装着された漁網が1組、小型土鍾が装着された漁網が少なくとも1組、計2組以上の漁網が廃棄ないし遺棄されたものと推定できる。

瀬戸内地域における考古・民俗資料の漁撈具を体系的に研究されている真鍋篤行氏<sup>(6)</sup>は、漁業(網漁)で使用する漁網は次の2系統に大別されることを指摘する。すなわち、網を带状に敷設し、魚を網目に刺したり絡るという捕獲原理の「刺網系」と網で魚を包囲し、袋部で捕獲する原理の地曳網・底曳網・船曳網・まき網・定地網などの「袋網系」がそれで、この二者には漁網に使用される網の径に差があり、網が貫通する土鍾の孔径や形態にも差があるという。また、管状土鍾の分析に当たっては、土鍾の長さを最大幅で除した数値Pと土鍾に網を通す孔の最狭部位の径の2乗値Lを指針とされた。Pは土鍾が装着された漁網の種類と関係が深い数値で、Lは網の抗張力(強度)と関係が深い数値である。「刺網系」と「袋網系」に使用された土鍾は、数値Pを縦軸に、数値Lを横軸にしてグラフ化すると、明瞭に領域を異にした分布を示すという。この真鍋氏の方法に従って、SX

分類	遺構	9c中頃～後半			8c末～ 9c前半
		土坑 SK003	土錘集中部 SX006	包含層 II～IV層	V層
<b>小型管状土錘</b> 最大長3.8～6.6cm 最大幅0.9～1.7cm 重さ3.5～15.8g		1	339	39	1
<b>中型管状土錘</b> 最大長6.2cm 最大幅3.1cm 重さ61.2g		—	—	1	—
<b>大型管状土錘</b> 最大長5.8～10.6cm 最大幅3.2～5.8cm 重さ50～259g		—	78	3	—
<b>有溝土錘</b> 最大長7.7～8.7cm 最大幅3.6～4.4cm 重さ83～127g		—	1	1	—
		1	418	44	1
		463			1

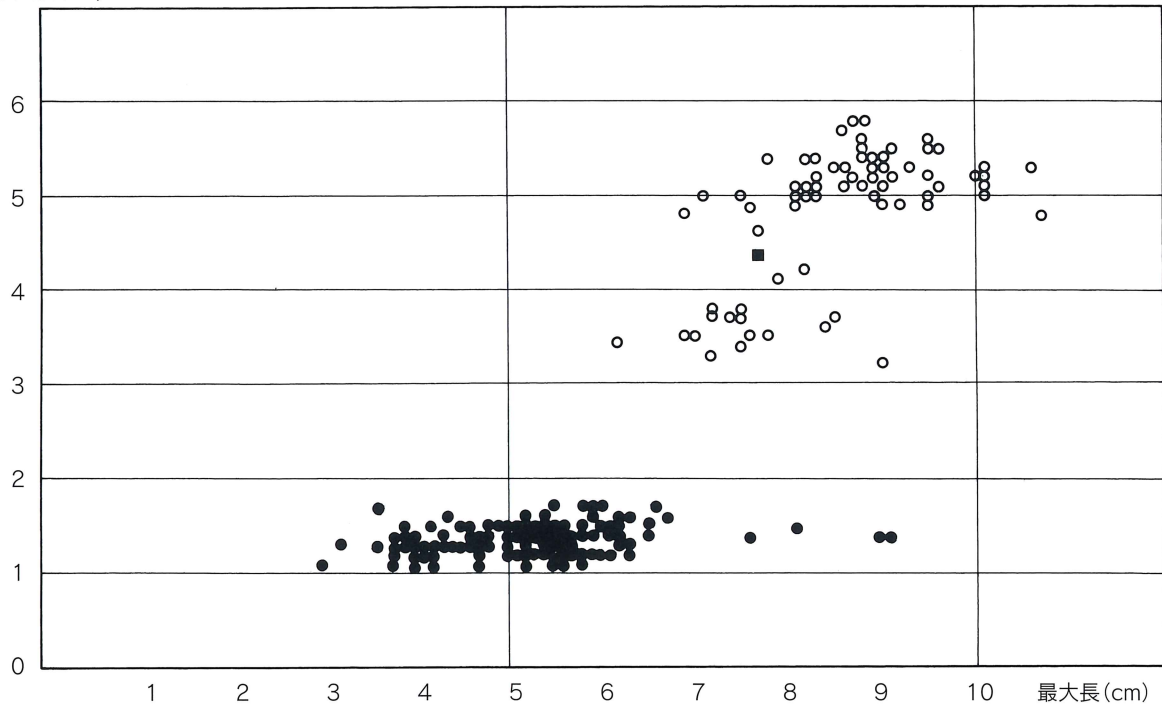
第7表 土錘の分布と組成



第48図 9世紀中頃～後半における土錘の組成



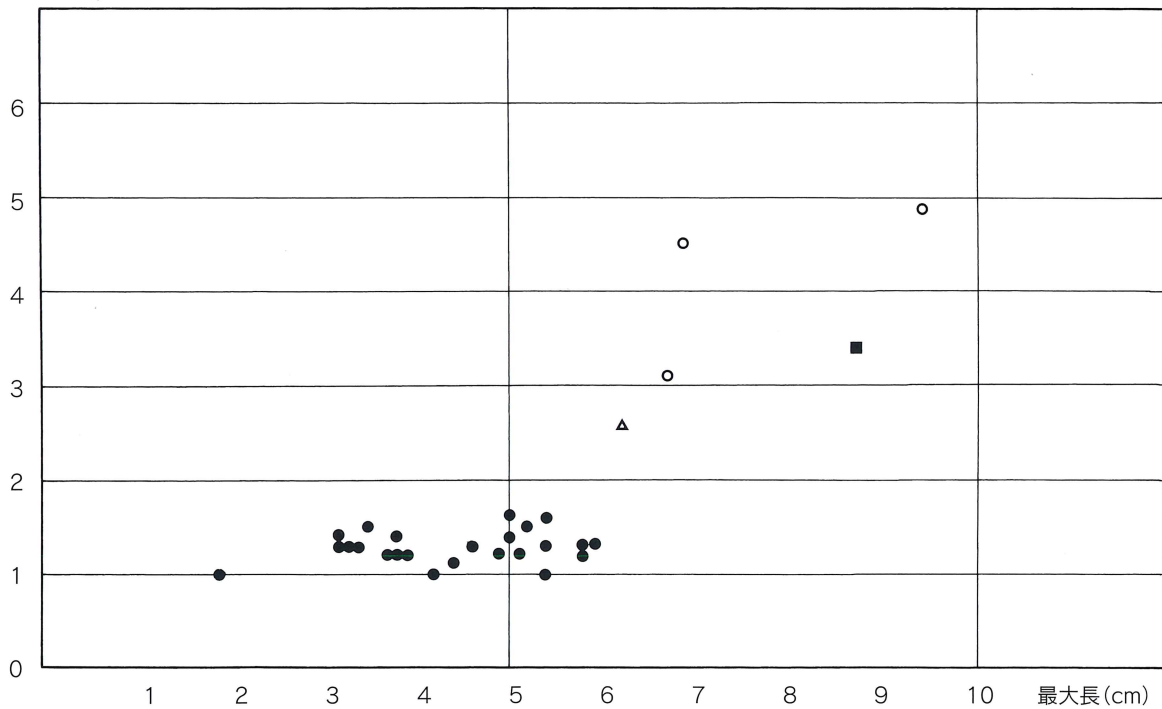
最大幅 (cm)



土錘集中部SX006出土土錘法量相関図

- 小型管状土錘      ○ 大型管状土錘
- 有溝土錘

最大幅 (cm)



包含層 (II ~ IV層群) 出土土錘法量相関図 (完形品30個体)

- 小型管状土錘      ▲ 中型管状土錘      ○ 大型管状土錘
- 有溝土錘

第49図 土錘法量相関図

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)
第17図28	4.0	1.1	3.6	0.2	0.04
32	3.0	1.1	2.7	0.3	0.09
49	4.4	1.1	4.0	0.2	0.04
51	3.8	1.1	3.5	0.3	0.09
52	3.8	1.2	3.2	0.2	0.04
53	3.8	1.3	2.9	0.3	0.09
56	4.0	1.2	3.3	0.3	0.09
57	3.8	1.3	2.9	0.2	0.04
59	4.2	1.1	3.8	0.3	0.09
61	4.1	1.2	3.4	0.3	0.09
62	4.0	1.1	3.6	0.2	0.04
64	4.1	1.2	3.4	0.3	0.09
65	3.2	1.3	2.5	0.2	0.04
68	3.6	1.3	2.8	0.3	0.09
72	4.2	1.2	3.5	0.2	0.04
73	4.3	1.2	3.6	0.2	0.04
76	3.8	1.2	3.2	0.2	0.04
78	3.6	1.2	3.2	0.3	0.09
79	4.5	1.1	4.1	0.2	0.04
80	4.8	1.2	4.0	0.3	0.09
第18図82	4.1	1.2	3.4	0.3	0.09
84	4.3	1.3	3.3	0.2	0.04
85	4.7	1.1	4.3	0.2	0.04
86	4.3	1.3	3.3	0.3	0.09
87	4.4	1.3	3.4	0.3	0.09
89	5.2	1.2	4.3	0.3	0.09
90	4.3	1.1	3.9	0.2	0.04
91	5.2	1.1	4.7	0.3	0.09
92	4.3	1.3	3.3	0.2	0.04
93	3.9	1.4	2.8	0.2	0.04
95	4.3	1.3	3.3	0.3	0.09
96	4.2	1.2	3.5	0.2	0.04
97	3.6	1.2	3.0	0.3	0.09
99	4.5	1.3	3.5	0.2	0.04
102	5.7	1.2	4.8	0.2	0.04
103	3.9	1.3	3.0	0.2	0.04
104	5.3	1.1	4.8	0.2	0.04
105	4.0	1.2	3.3	0.2	0.04
106	3.8	1.3	2.9	0.3	0.09
107	3.5	1.3	2.6	0.3	0.09
108	4.5	1.2	3.8	0.2	0.04
112	4.3	1.4	3.1	0.3	0.09
113	3.8	1.3	2.9	0.3	0.09
114	4.5	1.3	3.5	0.3	0.09
115	5.1	1.2	4.3	0.2	0.04
116	3.7	1.4	2.6	0.2	0.04
117	4.3	1.3	3.3	0.2	0.04
118	4.8	1.2	4.0	0.3	0.09
120	4.5	1.2	3.8	0.3	0.09
122	4.9	1.2	4.1	0.2	0.04
123	4.8	1.3	3.7	0.2	0.04
124	4.8	1.1	4.4	0.2	0.04
125	4.4	1.3	3.4	0.2	0.04
126	4.4	1.3	3.4	0.3	0.09
127	4.2	1.2	3.5	0.3	0.09
128	4.1	1.2	3.4	0.2	0.04
129	5.0	1.2	4.1	0.2	0.04
130	5.1	1.2	4.3	0.2	0.04
131	4.5	1.2	3.8	0.2	0.04
132	5.4	1.3	4.2	0.3	0.04
133	5.6	1.2	4.6	0.2	0.04
134	3.8	1.4	2.7	0.2	0.04
136	5.0	1.2	4.1	0.2	0.04
138	4.0	1.3	3.1	0.2	0.04
140	4.7	1.2	3.9	0.4	0.16

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)
141	5.0	1.3	3.8	0.3	0.09
142	4.5	1.3	3.5	0.3	0.09
143	3.9	1.3	3.0	0.3	0.09
144	5.5	1.2	4.6	0.2	0.04
145	4.7	1.3	3.6	0.2	0.04
146	4.7	1.2	3.9	0.2	0.04
147	4.7	1.1	4.3	0.2	0.04
149	4.6	1.5	3.1	0.2	0.04
150	5.1	1.2	4.3	0.2	0.04
第19図151	4.3	1.3	3.3	0.2	0.04
153	4.2	1.3	3.2	0.3	0.09
154	4.6	1.3	3.5	0.3	0.09
155	5.2	1.3	4.0	0.4	0.16
156	4.5	1.3	3.5	0.3	0.09
158	5.5	1.2	4.6	0.2	0.04
160	3.9	1.4	2.8	0.2	0.04
161	4.3	1.3	3.3	0.3	0.09
162	5.6	1.1	5.1	0.1	0.01
163	5.4	1.2	4.5	0.1	0.01
164	5.4	1.2	4.5	0.1	0.01
165	5.4	1.4	3.9	0.4	0.16
166	4.4	1.3	3.4	0.3	0.09
167	5.2	1.2	4.3	0.4	0.16
169	5.3	1.4	3.8	0.3	0.09
170	5.1	1.2	4.3	0.3	0.09
171	5.7	1.2	4.8	0.2	0.04
172	5.3	1.2	4.4	0.2	0.04
173	3.8	1.3	2.9	0.2	0.04
174	3.9	1.5	2.6	0.3	0.09
175	5.5	1.1	5.0	0.2	0.04
176	5.0	1.2	4.2	0.3	0.09
178	3.9	1.3	3.0	0.2	0.04
179	5.6	1.1	5.1	0.2	0.04
180	4.3	1.4	3.1	0.2	0.04
182	5.2	1.4	3.7	0.2	0.04
183	5.2	1.2	4.3	0.2	0.04
184	5.4	1.2	4.5	0.2	0.04
185	5.4	1.3	4.2	0.2	0.04
186	5.2	1.1	4.7	0.2	0.04
187	5.0	1.3	3.8	0.3	0.09
188	4.1	1.3	3.1	0.3	0.09
189	4.3	1.4	3.1	0.2	0.04
190	5.5	1.3	4.2	0.3	0.09
191	5.0	1.4	3.6	0.4	0.16
192	4.7	1.2	3.9	0.3	0.09
193	5.4	1.2	4.5	0.3	0.09
194	5.1	1.4	3.6	0.3	0.09
196	5.5	1.2	4.6	0.2	0.04
197	5.0	1.3	3.8	0.3	0.09
198	5.2	1.3	4.0	0.2	0.04
199	5.6	1.2	4.6	0.2	0.04
200	5.0	1.4	3.6	0.3	0.09
201	4.0	1.4	2.9	0.3	0.09
202	5.7	1.3	4.4	0.3	0.09
203	4.6	1.4	3.3	0.3	0.09
204	5.2	1.2	4.3	0.2	0.04
205	5.4	1.2	4.5	0.2	0.04
206	5.8	1.1	5.3	0.2	0.04
207	4.5	1.5	3.0	0.3	0.09
208	4.6	1.4	3.3	0.3	0.09
209	5.2	1.4	3.7	0.3	0.09
211	5.1	1.2	4.3	0.1	0.01
212	5.3	1.2	4.4	0.3	0.09
213	5.8	1.2	4.8	0.2	0.04
214	5.7	1.3	4.4	0.2	0.04
216	5.0	1.3	3.8	0.3	0.09
217	5.4	1.4	3.9	0.2	0.04
219	4.8	1.5	3.2	0.3	0.09
220	4.7	1.5	3.1	0.3	0.09

第 8 表 SX006出土土錘法量分析表① (小型管状土錘)

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)
第20図223	4.7	1.4	3.6	0.5	0.25
224	5.5	1.2	4.6	0.2	0.04
225	5.6	1.3	4.3	0.4	0.16
226	4.8	1.3	3.7	0.3	0.09
227	5.2	1.4	3.7	0.3	0.09
228	6.0	1.2	5.0	0.3	0.09
229	5.9	1.2	4.9	0.3	0.09
230	5.4	1.3	4.2	0.3	0.09
231	4.8	1.3	3.7	0.3	0.09
232	5.5	1.3	4.2	0.3	0.09
234	4.2	1.5	2.8	0.2	0.04
235	4.7	1.5	3.1	0.3	0.09
237	5.5	1.3	4.2	0.2	0.04
239	5.2	1.4	3.7	0.2	0.04
240	6.1	1.2	5.1	0.2	0.04
241	5.5	1.3	4.2	0.3	0.09
242	4.8	1.4	3.4	0.2	0.04
243	5.2	1.3	4.0	0.3	0.09
244	5.5	1.3	4.2	0.4	0.16
245	4.9	1.5	3.3	0.3	0.09
247	5.7	1.3	4.4	0.3	0.09
248	5.5	1.4	3.9	0.2	0.04
249	5.4	1.4	3.8	0.3	0.09
250	5.8	1.5	3.9	0.4	0.16
251	6.1	1.4	4.4	0.3	0.09
252	6.3	1.2	5.3	0.3	0.09
253	6.3	1.3	4.8	0.4	0.16
254	5.6	1.4	4.0	0.2	0.04
255	4.3	1.6	2.7	0.3	0.09
256	5.7	1.4	4.1	0.2	0.04
257	5.6	1.4	4.0	0.2	0.04
258	5.7	1.2	4.8	0.2	0.04
259	5.6	1.4	4.0	0.3	0.06
261	5.6	1.5	3.7	0.4	0.16
263	6.2	1.3	4.8	0.3	0.09
264	5.7	1.4	4.1	0.3	0.09
265	5.5	1.4	3.9	0.3	0.09
266	5.5	1.2	4.6	0.3	0.09
267	5.2	1.5	3.5	0.3	0.09
268	6.1	1.4	4.4	0.3	0.09
269	6.1	1.4	4.4	0.2	0.04
270	6.0	1.4	4.2	0.3	0.09
271	5.6	1.4	4.0	0.3	0.09
272	5.6	1.5	3.7	0.3	0.09
273	5.2	1.4	3.7	0.3	0.09
274	5.6	1.5	3.7	0.4	0.16
275	5.6	1.5	3.7	0.3	0.09
276	5.0	1.5	3.3	0.3	0.09
277	5.6	1.5	3.7	0.2	0.04
278	5.4	1.4	3.8	0.3	0.09
280	5.6	1.5	3.7	0.3	0.09

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)
第21図281	5.3	1.5	3.5	0.3	0.09
282	5.3	1.5	3.5	0.3	0.09
283	5.8	1.4	4.1	0.3	0.09
284	5.4	1.4	3.9	0.3	0.09
285	5.4	1.4	3.9	0.4	0.16
286	5.8	1.4	4.1	0.2	0.04
287	5.5	1.4	3.9	0.2	0.04
288	3.6	1.7	2.1	0.3	0.09
289	5.6	1.5	3.7	0.3	0.09
290	5.5	1.5	3.6	0.3	0.09
291	6.0	1.4	4.3	0.2	0.04
292	5.3	1.5	3.5	0.3	0.09
293	5.2	1.5	3.5	0.3	0.09
294	5.6	1.4	4.0	0.3	0.09
295	5.9	1.4	4.2	0.3	0.09
296	6.1	1.5	4.1	0.2	0.04
297	6.5	1.5	4.3	0.3	0.09
298	5.8	1.4	4.1	0.2	0.04
299	5.8	1.5	3.9	0.3	0.09
300	5.3	1.4	3.8	0.3	0.09
301	5.2	1.6	3.3	0.3	0.09
302	5.9	1.4	4.2	0.3	0.09
303	5.2	1.5	3.5	0.3	0.09
304	6.2	1.4	4.4	0.3	0.09
306	5.2	1.6	3.3	0.2	0.04
307	5.4	1.5	3.6	0.2	0.04
308	6.3	1.3	4.8	0.2	0.04
309	6.0	1.5	4.0	0.3	0.09
310	6.0	1.5	4.0	0.2	0.04
311	5.9	1.4	4.2	0.3	0.09
312	6.1	1.5	4.1	0.3	0.09
313	6.0	1.5	4.0	0.3	0.09
314	6.6	1.4	4.7	0.3	0.09
315	5.4	1.5	3.6	0.3	0.09
316	6.3	1.6	3.9	0.3	0.09
317	6.2	1.5	4.1	0.3	0.09
318	5.1	1.5	3.4	0.3	0.09
319	5.4	1.6	3.3	0.3	0.09
320	5.6	1.5	3.7	0.3	0.09
321	5.1	1.5	3.4	0.3	0.09
322	6.0	1.5	4.0	0.3	0.09
323	6.1	1.5	4.1	0.3	0.09
324	6.5	1.4	4.6	0.3	0.09
325	6.2	1.5	4.1	0.3	0.09
326	5.9	1.6	3.7	0.3	0.09
327	6.2	1.5	4.1	0.3	0.09
328	6.6	1.7	3.9	0.3	0.09
329	6.3	1.6	3.9	0.3	0.09
331	6.2	1.6	3.8	0.3	0.09
332	5.8	1.7	3.4	0.3	0.09
333	5.9	1.7	3.5	0.4	0.16
334	5.5	1.7	3.2	0.3	0.09
335	6.0	1.7	3.5	0.2	0.04
336	6.7	1.6	4.2	0.2	0.04
337	5.8	1.7	3.4	0.2	0.04
338	6.0	1.7	3.5	0.3	0.09
339	6.6	1.7	3.5	0.3	0.09

第9表 SX006出土土錘法量分析表② (小型管状土錘)



挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)	備 考
第22図1	5.8	3.2	1.8	1.3	1.69	大型管状土錘
2	6.2	3.4	1.8	1.2	1.44	大型管状土錘
3	7.0	3.5	2.0	1.3	1.69	大型管状土錘
4	7.5	3.4	2.2	1.2	1.44	大型管状土錘
5	8.4	3.6	2.3	1.3	1.69	大型管状土錘
6	6.9	3.5	2.0	1.3	1.69	大型管状土錘
7	7.2	3.7	1.9	1.3	1.69	大型管状土錘
8	7.2	3.8	1.9	1.3	1.69	大型管状土錘
9	7.2	3.3	2.2	1.2	1.44	大型管状土錘
10	7.6	3.5	2.2	1.3	1.69	大型管状土錘
11	7.8	3.5	2.2	1.3	1.69	大型管状土錘
12	7.4	3.7	2.0	1.3	1.69	大型管状土錘
13	7.5	3.7	2.0	1.4	1.96	大型管状土錘
14	8.5	3.7	2.3	1.2	1.44	大型管状土錘
15	7.5	3.8	2.0	1.2	1.44	大型管状土錘
16	7.9	4.1	1.9	1.4	1.96	大型管状土錘
17	8.2	4.2	2.0	1.3	1.69	大型管状土錘
18	7.7	4.6	1.7	1.4	1.96	大型管状土錘
19	6.9	4.8	1.4	1.5	2.25	大型管状土錘
20	7.6	4.9	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
21	7.1	5.0	1.4	1.5	2.25	大型管状土錘
22	8.1	5.0	1.6	1.5	2.25	大型管状土錘
23	7.5	5.0	1.5	1.8	3.24	大型管状土錘
24	8.1	4.9	1.7	1.6	2.56	大型管状土錘
25	8.2	5.1	1.6	1.6	2.56	大型管状土錘
26	8.3	5.0	1.7	1.9	3.61	大型管状土錘
27	7.8	5.4	1.4	1.9	3.61	大型管状土錘
28	8.2	5.0	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
第23図29	8.9	5.0	1.8	1.8	3.24	大型管状土錘
30	8.2	5.1	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
31	8.2	5.4	1.5	1.8	3.24	大型管状土錘
32	8.1	5.1	1.6	2.1	4.41	大型管状土錘
33	8.3	5.1	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
34	8.9	5.2	1.7	1.9	3.61	大型管状土錘
35	8.3	5.2	1.6	1.8	3.24	大型管状土錘
36	8.7	5.3	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
37	9.0	4.9	1.8	2.0	4.00	大型管状土錘
38	8.6	5.1	1.7	1.8	3.24	大型管状土錘
39	9.2	4.9	1.9	1.8	3.24	大型管状土錘
40	8.7	5.8	1.5	1.6	2.56	大型管状土錘

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)	備 考
41	8.6	5.3	1.6	1.7	2.89	大型管状土錘
42	8.9	5.2	1.7	2.2	4.84	大型管状土錘
43	9.0	5.1	1.8	1.8	3.24	大型管状土錘
44	8.3	5.4	1.5	2.2	4.84	大型管状土錘
45	8.9	5.2	1.7	1.8	3.24	大型管状土錘
46	10.7	4.8	2.2	1.9	3.61	大型管状土錘
47	9.5	4.9	1.9	1.8	3.24	大型管状土錘
48	8.5	5.3	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
49	10.1	5.0	2.0	2.1	4.41	大型管状土錘
50	8.9	5.3	1.7	1.7	2.89	大型管状土錘
51	9.0	5.3	1.7	1.9	3.61	大型管状土錘
52	9.5	5.0	1.9	1.9	3.61	大型管状土錘
第24図53	8.8	5.1	1.7	1.9	3.61	大型管状土錘
54	8.8	5.5	1.6	1.8	3.24	大型管状土錘
55	9.6	5.1	1.9	1.9	3.61	大型管状土錘
56	9.5	5.2	1.8	2.1	4.41	大型管状土錘
57	8.6	5.7	1.5	1.8	3.24	大型管状土錘
58	8.8	5.4	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
59	8.8	5.4	1.6	2.1	4.41	大型管状土錘
60	8.2	5.4	1.5	2.0	4.00	大型管状土錘
61	8.8	5.5	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
62	9.3	5.3	1.7	1.6	2.56	大型管状土錘
63	9.5	5.0	1.9	1.7	2.89	大型管状土錘
64	9.0	5.3	1.7	1.8	3.24	大型管状土錘
65	9.3	5.3	1.8	1.9	3.61	大型管状土錘
66	10.1	5.2	1.9	2.0	4.00	大型管状土錘
67	9.6	5.5	1.7	1.7	2.89	大型管状土錘
68	10.1	5.1	2.0	2.0	4.00	大型管状土錘
69	9.1	5.2	1.8	2.1	4.41	大型管状土錘
70	9.1	5.5	1.7	2.0	4.00	大型管状土錘
71	10.6	5.3	2.0	1.8	3.24	大型管状土錘
72	9.5	5.5	1.7	1.7	2.89	大型管状土錘
73	10.0	5.2	1.9	1.9	3.61	大型管状土錘
74	9.0	5.4	1.6	1.9	3.61	大型管状土錘
75	8.8	5.8	1.5	1.7	2.89	大型管状土錘
76	8.8	5.6	1.6	1.7	2.89	大型管状土錘
第25図77	9.5	5.6	1.7	1.9	3.61	大型管状土錘
78	10.1	5.3	1.9	1.9	3.61	大型管状土錘
79	7.7	4.4	1.8	1.2	1.44	有溝土錘

第10表 SX006出土土錘法量分析表③ (大型管状土錘・有溝土錘)

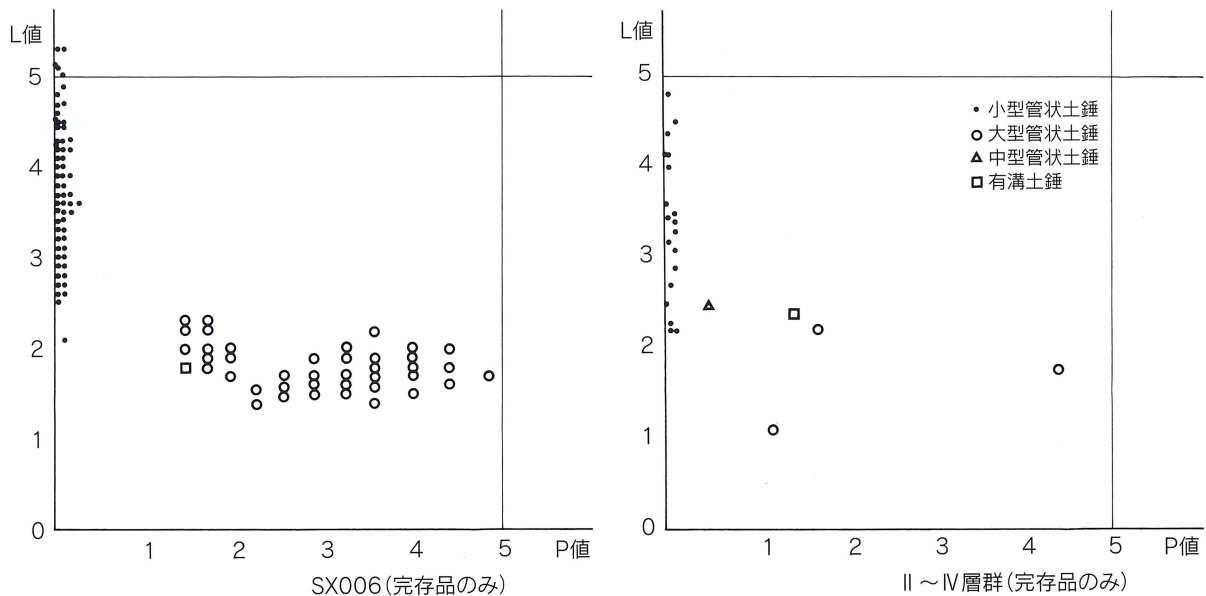
挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)	備 考
第26図1	2.9	1.0	2.9	0.4	0.16	小型管状土錘
6	4.2	1.0	4.2	0.3	0.09	小型管状土錘
8	3.2	1.3	2.4	0.3	0.09	小型管状土錘
9	3.8	1.2	3.2	0.3	0.09	小型管状土錘
10	3.3	1.3	2.5	0.2	0.04	小型管状土錘
11	4.4	1.1	4.0	0.3	0.09	小型管状土錘
12	4.4	1.1	4.0	0.3	0.09	小型管状土錘
13	4.9	1.2	4.1	0.3	0.09	小型管状土錘
14	3.2	1.4	2.2	0.4	0.16	小型管状土錘
15	5.4	1.0	5.4	0.2	0.04	小型管状土錘
16	3.7	1.2	3.1	0.3	0.09	小型管状土錘
17	3.9	1.2	3.3	0.4	0.16	小型管状土錘
18	4.6	1.3	3.5	0.4	0.16	小型管状土錘
22	3.4	1.3	2.6	0.3	0.09	小型管状土錘
24	3.5	1.5	2.3	0.3	0.09	小型管状土錘
26	5.8	1.2	4.8	0.3	0.09	小型管状土錘
27	5.4	1.3	4.2	0.3	0.09	小型管状土錘
29	5.8	1.3	4.4	0.3	0.09	小型管状土錘

挿図No.	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	P 値 (最大長/最大幅)	孔径 (cm)	L 値 (孔径の2乗値)	備 考
30	5.0	1.4	3.6	0.2	0.04	小型管状土錘
31	5.0	1.6	3.1	0.4	0.16	小型管状土錘
33	3.8	1.4	2.7	0.3	0.09	小型管状土錘
35	5.9	1.3	4.5	0.4	0.16	小型管状土錘
36	5.2	1.5	3.4	0.3	0.09	小型管状土錘
37	5.4	1.6	3.4	0.4	0.16	小型管状土錘
39	5.1	1.2	4.2	0.2	0.04	小型管状土錘
40	6.2	2.6	2.4	0.7	0.49	中型管状土錘
41	6.7	3.1	2.2	1.3	1.69	大型管状土錘
42	6.8	4.5	1.5	1.1	1.21	大型管状土錘
43	9.4	5.2	1.8	2.1	4.41	大型管状土錘
44	8.7	3.6	2.4	1.2	1.44	有溝土錘

第11表 II～IV層群出土土錘法量分析表

006とII～IV層群出土の土錘のうち、欠損部位がない完存品のみを計測・グラフ化した(第8～11表・第50図)。  
 SX006出土の小型土錘は $2.1 \leq P \leq 5.3$ 、 $0.01 \leq L \leq 0.25$ 、大型土錘は $1.4 \leq P \leq 2.3$ 、 $1.44 \leq L \leq 4.84$ の数値を示す。同様に、II～IV層群出土の小型管状土錘は $2.4 \leq P \leq 4.8$ 、 $0.04 \leq L \leq 0.16$ 、大型管状土錘は $1.5 \leq P \leq 1.8$ 、 $1.21 \leq L \leq 4.41$ の数値を示した。この結果は、SX006とII～IV層群出土の小型管状土錘が「刺網系」、大型管状





第50図 土錘分析グラフ

土錘が「袋網系」の漁網に使用された土錘であることを示している。また、II～IV層群出土の中管状土錘は、大型管状土錘と小型管状土錘の中間的な領域に位置するものであるが、「刺網系」漁網の領域にプロットされる。さらにSX006とII～IV層群から1個ずつ出土した有溝土錘は、大型管状土錘と同様の領域にあり、「袋網系」漁網に使用された土錘であることが想定される。

以上のように、上野町遺跡出土の土錘には、「刺網系」漁網に使用された小型管状土錘と中型管状土錘、および「袋網系」漁網に使用された大型管状土錘と有溝土錘が存在したことが判明した。特に、後者の大型管状土錘と有溝土錘はそのサイズと計測値から、「袋網系」漁網の中でも底曳網などに使用された可能性が高い<sup>(7)</sup>。上野町遺跡から北側約2.5kmの地点には海岸線があり、これらの土錘の存在は別府湾岸での漁撈活動を示唆している。底曳網等の「袋網系」漁網の使用には、組織的な漁撈技術と専門化ないしは半専門化した漁業集団の存在が想定されるわけで、上野町遺跡の周辺に漁撈活動を営んだ集団の存在を予測させる。上野町遺跡出土の土錘類は、豊後国府周辺地域における漁撈集団のあり方を考究する上で興味深い検討材料である。今後、近隣の金池南遺跡で検出された製塩土器の大量廃棄土坑などの存在と考え合わせて、当該地域における漁撈集団の様相が明らかにされることを期待したい。

### ③長沙窯系黄釉褐彩水注について

上野町遺跡II～IV層群から、長沙窯系黄釉褐彩水注の破片が出土した。当該製品は全国的に見ても出土事例が少ない初期貿易陶磁であり<sup>(8)</sup>、大分県内では初出の事例<sup>(9)</sup>となる。紙幅の関係から、簡単に上野町遺跡の出土例を紹介したい。

実測図は第27図2・3に提示した。2は横断面が八角形を呈する注口部で、褐彩が施されている。3は頸部屈曲部付近の破片で、型押し(貼花)による文様が認められる。破片先端部に把手の痕跡がわずかに残存している。貼花による文様は大和文華館の所蔵品<sup>(10)</sup>等を参考にすると、舞踏人物文あるいは椰枣文の一部である可能性が考えられるが、小破片のため詳細は不明である。他に、図示していないが、胴部小片が2つある。

長沙窯は中国湖南省長沙市に位置する唐代の窯跡である。陶磁器類の生産は唐代中期に開始され、晩唐期に最盛期を迎え、五代の時期まで継続した。黄釉褐彩水注は長沙窯の中で主力を占める製品で、中国はもとより、朝鮮半島・日本・東南アジア・中近東など広い範囲に分布している。長沙窯では、上野町遺跡でも出土した長沙窯系黄釉褐彩水注の他、黄釉の釉下に鉄砂や緑彩を筆塗りする製品や黒釉陶器、青磁など様々な製品が焼成されていることが知られている。中国国内においては、河北省石家庄市振頭村楽安孫公墓から貼花による舞踏胡人文をもつ水注(ただし、黄釉褐彩ではなく、全体に豆青色釉が施されている製品)が確認されており、楽安孫公墓出

土の墓誌によって唐代元和7年（812）には当該製品が生産されていたことがわかる<sup>(11)</sup>。上野町遺跡では、前述のように、9世紀中頃～後半の遺物包含層より出土している。



第51図 長沙窯系黄釉褐彩水注  
(左 上野町遺跡、右 大和文華館蔵品 (註10文献より))

#### 註

- (1) 佐藤浩司「ケズリのない甕－豊前企救型煮沸具の語るもの－」（『研究紀要』第6号 財団法人北九州市教育文化事業団 1992年）  
佐藤浩司「豊前企救型甕考」（『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2001年）
- (2) 坪根伸也「羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」（『羽田遺跡Ⅱ－大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－』（大分市教育委員会 1995年）
- (3) 横田賢次郎「福岡県内出土の硯について－分類と編年に関する一考察－」（『九州歴史資料館研究論集』9 1983年）
- (4) 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」（『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2001年）
- (5) 大分市教育委員会『国指定史跡 豊後国分寺跡－豊後国分寺跡北西地区発掘調査報告書－』（1993年）
- (6) 真鍋篤行「瀬戸内地方の網漁業技術史の諸問題」（『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第9号 1996年）
- (7) 同上、81頁。
- (8) 小鹿野亮「本調査地点における搬入遺物について」（『大宰府条坊跡第200次発掘調査』筑紫野市文化財調査報告書第75集 筑紫野市教育委員会 2003年）によると、全国で「50例程度」が出土しているという。
- (9) 大分県内では、大分市元町石仏から長沙窯系青磁の水注把手と思われる破片が出土しているが、黄釉褐彩の製品ではない。  
大分市教育委員会『国指定史跡大分元町石仏保存修理事業報告書』（1995年）65頁。
- (10) 福岡市美術館『日本・東洋の美－大和文華館の至宝－』（1999年）118頁参照。
- (11) 今井敦「中晩唐の中国陶磁」（『東京国立博物館紀要』第31号 1995年）26頁参照。  
石家庄市文物保管所「石家庄市振頭村発現唐代貼花人物瓷壺」（『考古』1984－3）

### 第3章 顕徳寺遺跡

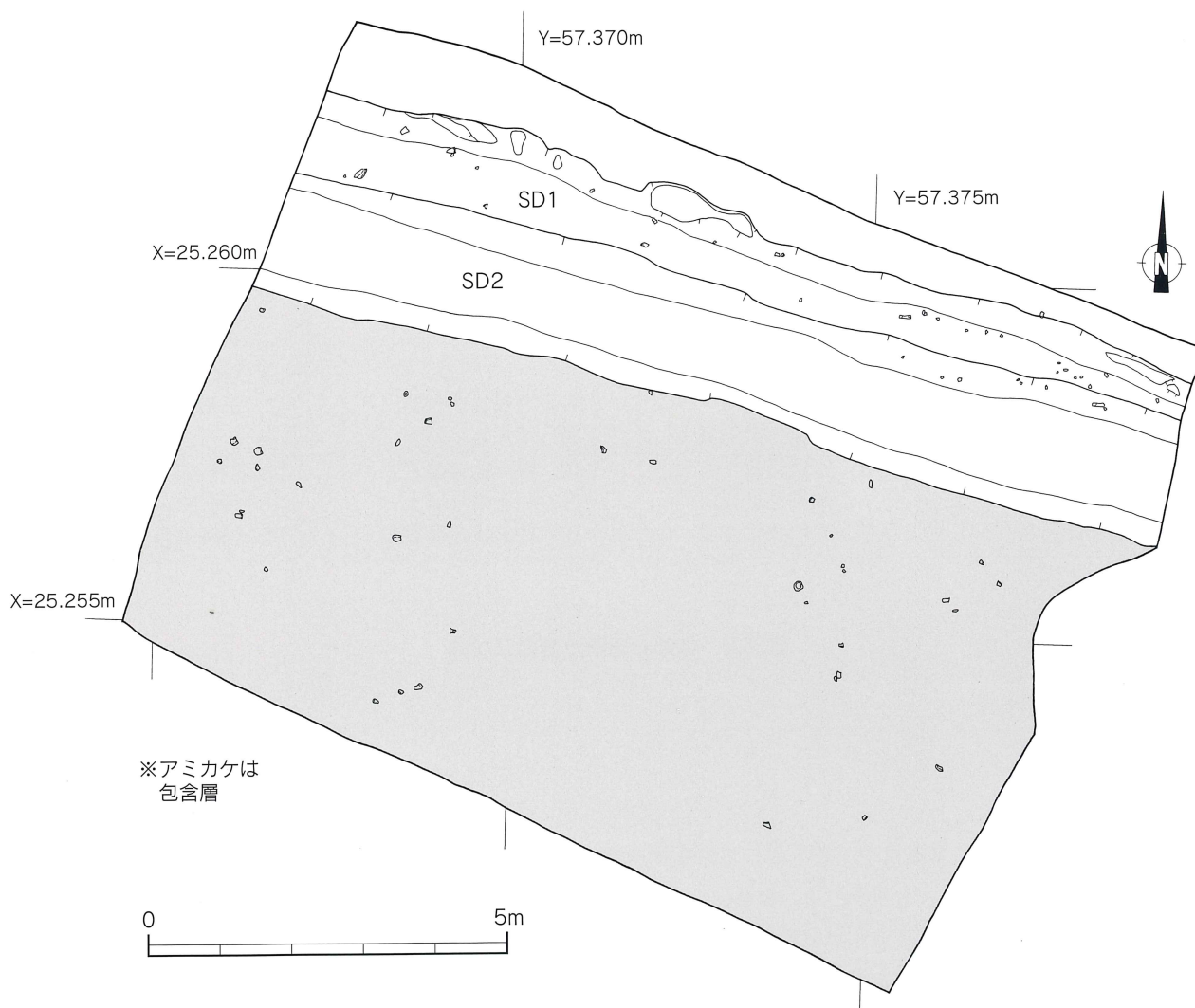
#### 1. 調査の概要と基本層序

顕徳寺遺跡は現在の大分市大字大分字顕徳寺に所在する古代（8世紀後半～9世紀前半）と中世（16世紀後半）を主体とした遺跡である。遺跡は本書収録の上野町遺跡北側に隣接し、標高3.2mの沖積低地上に立地する。

顕徳寺遺跡は、2001年（平成13年）7月5日より8月31日までの間、大分駅付近連続立体交差事業に伴い大分県教育委員会が本調査を実施した。調査面積は約100m<sup>2</sup>で、古代（8世紀後半～9世紀後半）と中世（16世紀後半）の遺物が主体となって出土し、該期の遺構の存在が確認された。

遺跡の呼称となった「顕徳寺」は、中世大友氏の城下町を描いた府内古図C類<sup>(1)</sup>に見ることができる。府内古図C類にはカタカナで「ケントク寺」と記されるが、その右側には、「キリシタンコトダイウスドウ」と併記されており（第54図参照）、この「顕徳寺」はキリスト教会を指し示しているものと思われる。顕徳寺遺跡は、周辺にそうしたキリスト教関連施設の存在を伺わせる場所に位置する。

ただ、府内古図の描写がすべて正確なものではないことはいうまでもない。特に府内古図C類に関しては、A・



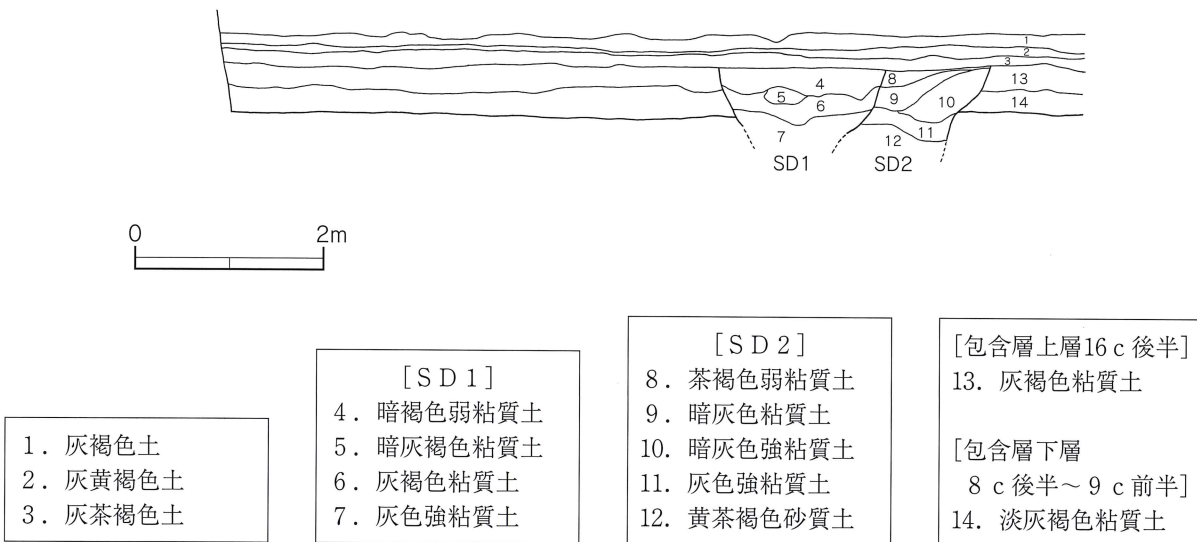
第52図 顕徳寺遺跡遺構分布図(1/100)



B類に比して絵・文字情報が多く、更に「当御本丸有之 元府内之図 文政十二己丑年皐月吉辰 牧在氏写焉」という記述があることから、後世の加筆がある可能性が高い。木村幾多郎氏によれば、「旧府内町を復元的に研究する資料としてはA類古図を優先的に使用すべきで、B・C類はあくまでも参考程度に留める必要がある。」としている<sup>(2)</sup>。しかしながら、2001年(平成13年)、東側に隣接する中世大友府内町跡第10次調査区で、キリシタン墓が発見されており、ダイウス堂の存在自体はその可能性を高めている。顕徳寺遺跡の調査結果では、キリスト教関連遺物及び遺構の検出は認められないことから、絵図に描かれた「ケントク寺」は本調査区よりも更に北東側に展開したものと思われる。

顕徳寺遺跡で検出された遺構としては、古代と中世の包含層、そして中世の包含層を切るようにして、2条の溝が確認されている(第52図参照)。2条の溝SD1とSD2はその切り合い関係から、SD2が埋没した後にSD1が掘り返されていることが判るが、その方向も殆ど併行している点や出土する遺物の時期等からみて、両者はさほど時期差をもたないものと考えられる。両者とも時期は16世紀後半代の所産と考えられる。

包含層については、上層(第53図の13層)から8世紀後半から9世紀前半代の遺物と16世紀後半代の遺物を中心に出土し、下層(第53図の14層)からは8世紀後半から9世紀前半代の遺物が中心に出土している。特に下層出土遺物の中には、製塩土器が数点見られるが、本遺跡北側に所在する南金池遺跡で、8世紀末～9世紀前半代の井戸や製塩関連遺構が検出されており<sup>(3)</sup>、その関連が考えられる。



第53図 顕徳寺遺跡土層図(1/80)

## 2. 検出遺構

### ①溝 (SD1・SD2)

**溝SD1** 東西方向に走る溝で、若干北に方位を振っている(W-15°-E)。検出された長さは約20mであるが、更に東西に延びるものと思われる。深さについては、溝の検出面から約0.9mほど下がったあたりから水がかなり湧き出てきたために、それ以上の掘り下げは不可能となった。従って、実際の深さはこれ以上になるものと考えられる。ただ検出された溝の幅は2.4m程度のため、深くなっても更に0.5m以上は下らないものと思われる。

層序的には、SD1は包含層上層を切って掘られている(第53図参照)。後述するように、包含層上層で検出される遺物が16世紀後半のものを含むことから、それ以前にはさかのぼらない。そして、溝内から出土する遺物



はやはり16世紀後半を主体としており、17世紀以降に下る資料も見られない。従って、この溝は16世紀後半代に掘削され、比較的短期間の内に埋め戻されてその機能を失ったものと考えられる。

溝内からは、青磁、青花等の輸入陶磁器、京都系土師器、瓦質土器、土錘等が出土している。時期は16世紀後半を主体としているが、土錘については隣接する上野町遺跡で9世紀代のものが460点以上出土していることを勘案すると、顯徳寺遺跡出土のものも同時期の所産である可能性が高い。

溝内の土層堆積は下層の2層の粘性が強く、滞水していたことを示している。この粘質土層内では有機質の保存状況がよく、動物の骨や植物遺体が認められる。

**溝SD2** SD1とほぼ併行して東西に延びる。確認長は、約20m、幅はSD1に切られているために不明である。SD1同様水が湧いてきたために、溝底部は確認できず、深さも不明である。しかし形態的にはSD1とほぼ同様の溝と思われ、深さ、幅ともに大きくは異ならないものとする。SD1に切られているが、溝内から出土する遺物は青磁、青花、朝鮮王朝産陶器等の輸入陶磁器や京都系土師器が主体となって出土している。8～9世紀の土師器の坏や蓋等も出土しているが、後述するように本調査区では古代の包含層が一面に確認されており、その遺物の混入と考えられる。以上よりSD2の所産は、遺物から考えると16世紀後半代に位置づけられ、SD1とは時期的にさほど差がないといえる。SD2が埋め戻されてすぐにSD1は掘り返されたものと考えられる。

また、SD2の堆積状況もSD1と同様で（第53図参照）、下層の方は滞水していたと考えられ、灰色の粘質土が堆積している。この土層中ではやはり有機質の保存状況がよく、動物の骨や植物遺体が残存している。特に動物遺体については、鑑定の結果（第4章の2に詳述）口之島在来牛雌牛の下顎骨と同種雄の左側横骨が含まれていることが判明した。両者の出土状況は、それぞれ単体で出土し、それぞれの個体のその他の部位は周囲に確認されていない。従って、一頭がまるごと廃棄或いは流入したかどうかは不明である。他の出土事例では、このような牛の遺骸が水神信仰と関連して、何らかの祭祀行為に使用されたのではないかと想定をされているものもあり、本資料もそうした可能性が考えられるが、この資料のみでは結論は尚早である。今後、類似した資料の増加に伴い明らかになってくるものと思われる<sup>(4)</sup>。

## ②包含層（上層・下層）

SD1・SD2の南側には遺物包含層が堆積している。前述のように、SD1・SD2はこの包含層を切って形成されており、従って包含層は本調査区全面に広がっていた可能性が高い。この包含層は上下2層に分かれ、出土する遺物から古代と中世に位置づけられる。

**包含層上層** 包含層上層から出土する遺物は、かなり時期幅を持っているが、大きくは2つの時期のものが主体をなす。一つは、古代（8～9世紀代）のもので、土師器の坏、須恵器、製塩土器、企救型甕、瓦等が出土している。またもう一つの時期は中世（16世紀代）のもので、京都系土師器、瀬戸美濃の天目茶碗、備前焼の播鉢、瓦質土器の火鉢等に加え、中国からの輸入陶磁器（青磁の皿・碗、白磁の皿、焼締陶器の鉢等）が出土している。後述するが、下層は古代（8～9世紀代）を主体とする層であり、上層で出土するその時期の遺物は混入によるものと考えられる。従って、包含層上層の形成時期は中世（16世紀代）であると考えられ、SD1・SD2との時期差もさほどないとみなされることから、SD1・SD2が掘られる直前に形成されていたものと推測される。

なお、この包含層上層の面では、遺構はほとんど確認できなかった。近世以降の削平による消失の可能性もあるが、そもそも溝（SD1・SD2）が存在した時期に、本調査区内では溝の南側に生活面は展開せず、むしろ北側に展開していたことが想定される。いずれにしても、府内古図等から、本調査区は中世大友氏の町の中心部から外れた位置にあたるものと考えられ（第54図参照）、本調査区の周囲一帯は、閑散としていたものと思われる。以上より、この包含層上層は生活面を形成する上での人為的整地によるものではなく、自然に形成されたものであると考えられる。





### 3. 出土遺物

#### 包含層上層

包含層上層からは、古代（8世紀末～9世紀前半）と中世（16世紀代）の大きく2つの時期を主体とする遺物が出土している。1～12が前者で、13～22が後者に該当する。

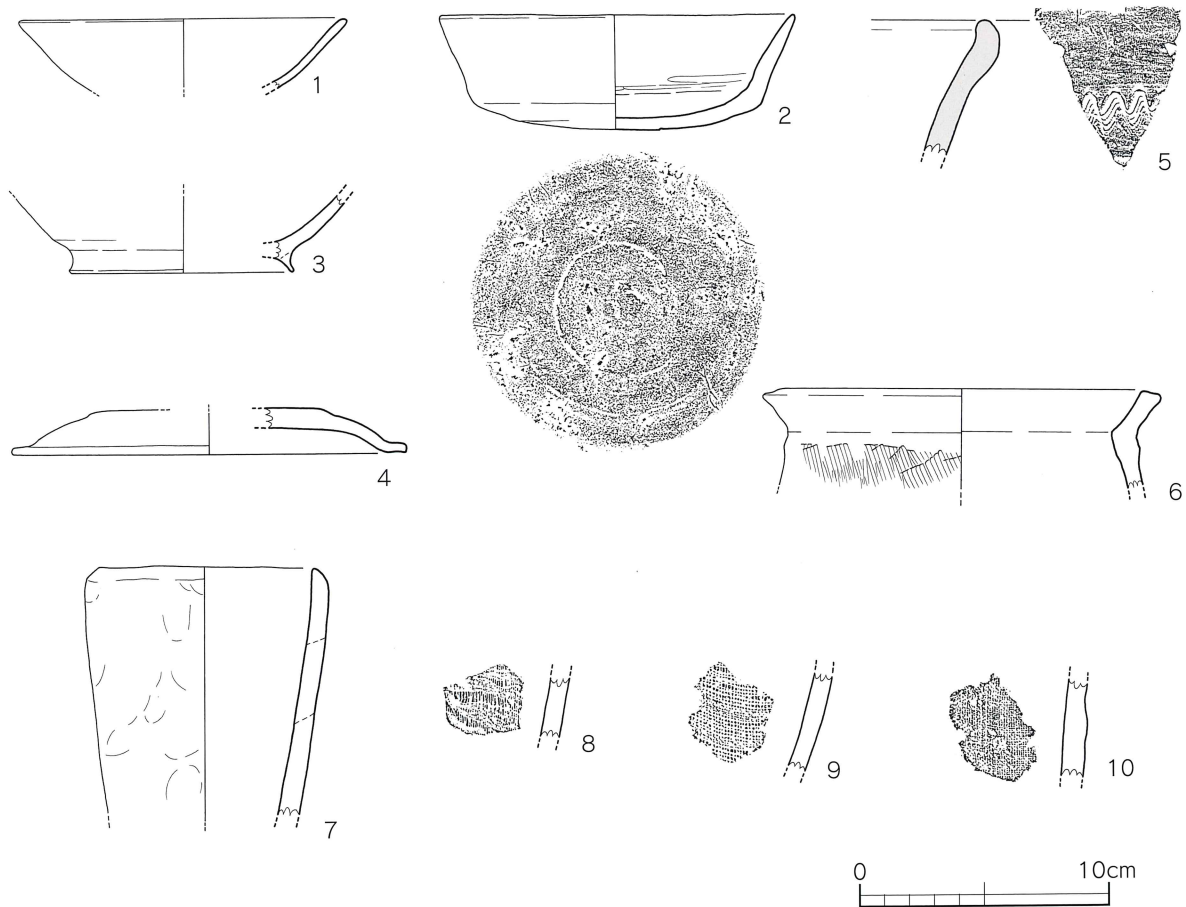
1～3は土師器の坏で、いずれも内外面ヨコナデによる調整が施される。このうち1は、補修痕が認められる。また2は坏aに分類され<sup>(1)</sup>、3は、高台が付く形態である。4は土師器の蓋である。5は、須恵器で口縁部下に5本単位の櫛描き波状文が施される。6は、企救型甕で8-Ⅱ～Ⅲ期に比定される<sup>(2)</sup>。

7～10は、製塩土器である。いわゆる「六連鳥式」で焼塩運搬用の製塩土器である。7は粘土紐を積み上げて成形し、口縁部はナデを施し、外面は指押さえて調整をしている。8～10は手づくねによる成形で、外面はやはり指押さえて調整を行う。また、内面は布目痕が残っている。製塩土器は、隣接する上野遺跡で数点、更に北側に所在する南金池遺跡で、同時期の製塩関連遺構が検出されており<sup>(3)</sup>、その関連が考えられる。

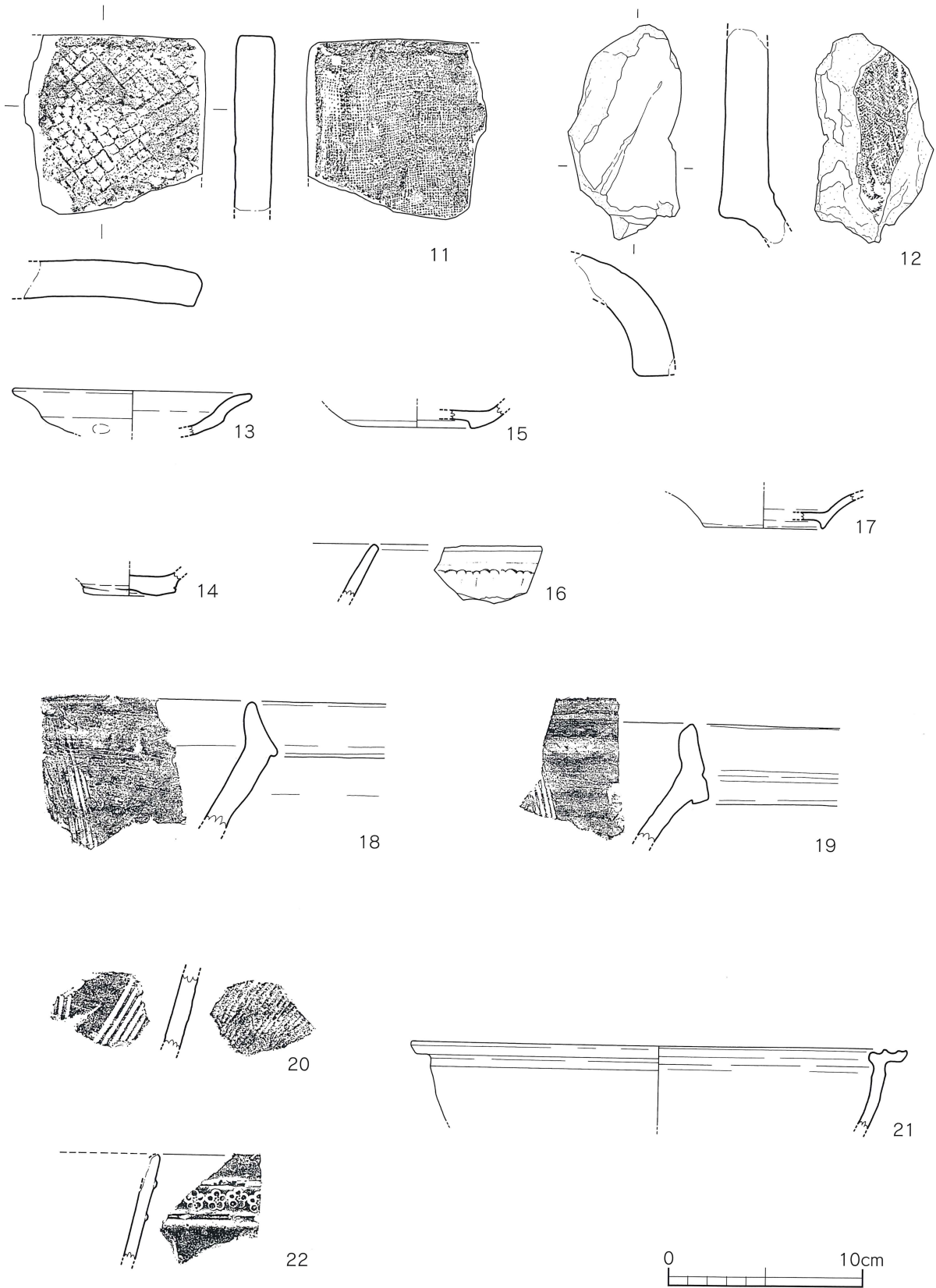
11・12は瓦で、11は平瓦、12は丸瓦である。11は、外面に格子目が残り、内面には布目痕が残る。また12は部分的にしか残存していないが、内面に布目痕が認められる。

13は京都系土師器皿である。外面のナデが強く施されており、16世紀後半に比定される。14は、瀬戸・美濃産天目茶碗の底部である。15・16は青磁の皿と椀である。15は底部でいわゆる「碁笥底」を呈する。16は、口縁部下に施される鎬連弁文が退化し細線化している。17は、中国産の白磁皿の底部である。

18～20は、備前焼の播鉢である。18・19の口縁部の形態から18は15世紀後半、19は16世紀前半代に比定される<sup>(4)</sup>。



第55図 包含層上層出土遺物(1/3)



第56図 包含層上層出土遺物(1/3)



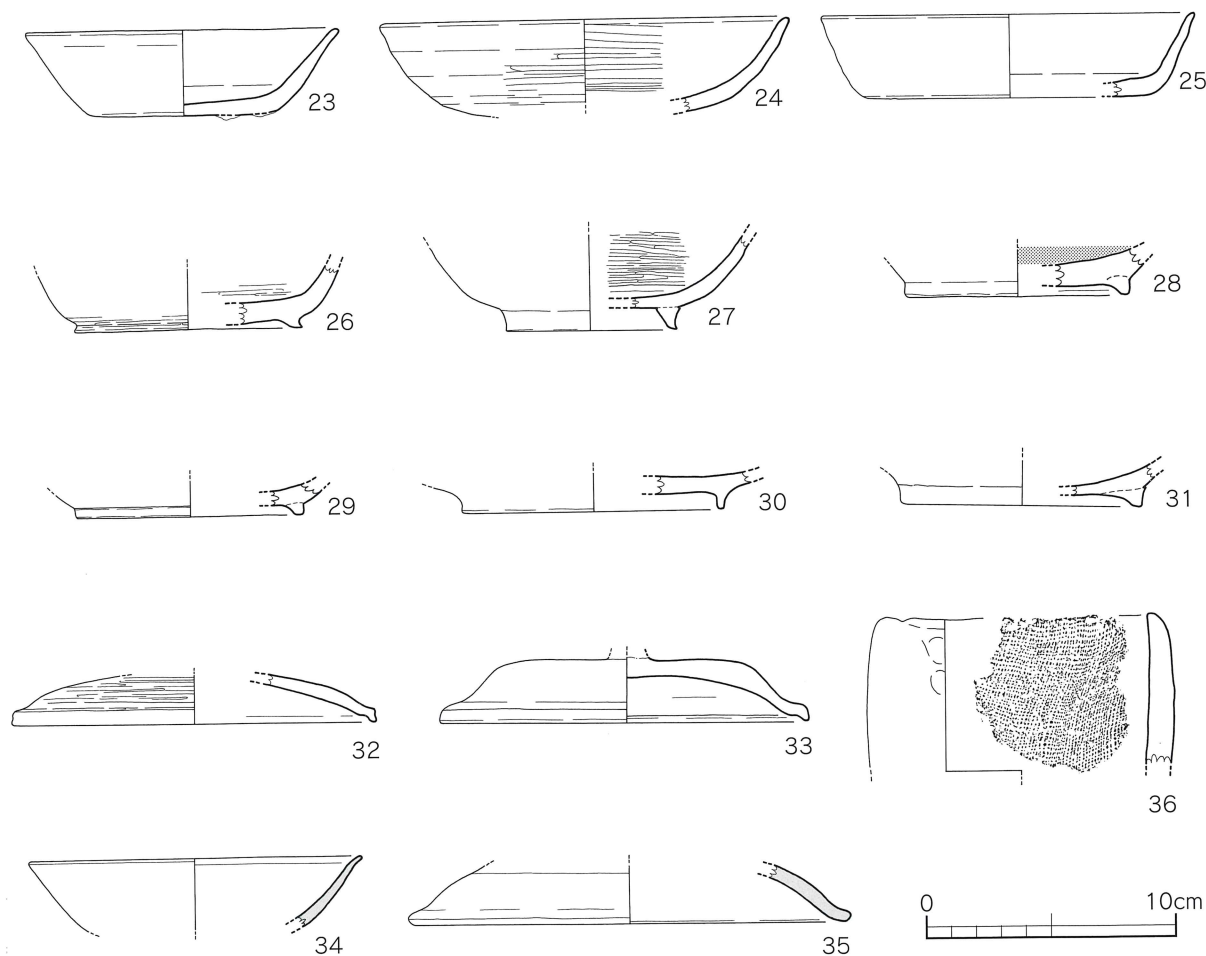
21は、中国産焼締陶器の鉢である。口縁部に鏝状凹線がめぐり、吉田寛氏分類によるA類に該当する<sup>(5)</sup>。22は瓦質土器の火鉢で、口縁部下に梅花文スタンプ、そしてそれを挟むようにして2条の貼付突帯がめぐる。

### 包含層下層

23～25は、土師器の坏である。底部から直線的に立ち上がり口縁部端部が若干外反するものと、底部から内湾しながら立ち上がるものがある。このうち24は坏aである。26～31も土師器の坏であるが、高台が付く。高台は外側に張り出して付くものと、垂直に付くものがある。また、この内28は黒色土器A類である。32・33は、土師器の坏の蓋である。32はツマミ部分が欠損して不明であるが、ツマミは付かない可能性が高い。33はツマミが付く。坪根伸也氏・塩地潤一氏の編年によると、豊後における黒色土器の出現期と、ツマミの付く蓋の消滅期を9世紀前半段階（9-I期）に設定しており<sup>(6)</sup>、それによれば、この包含層下層の遺物の組成は8世紀末～9世紀前半の時期幅をみておく必要がある。

34・35は須恵器で、34は坏、35は蓋である。36は、製塩土器で前述の包含層上層出土のものと同様いわゆる「六連島式」で焼塩運搬用の製塩土器である。粘土紐積み上げで、内面には布目が残る。

以上、包含層下層の出土遺物は、包含層上層で出土している古代（8世紀末～9世紀前半）遺物とほぼ同時期のものと思われるが、包含層上層とは異なり、当該期以外の時期の遺物は混入していない。従って、この包含層下層は該期の所産と考えて大過ないと思われる。



第57図 包含層下層出土遺物(1/3)

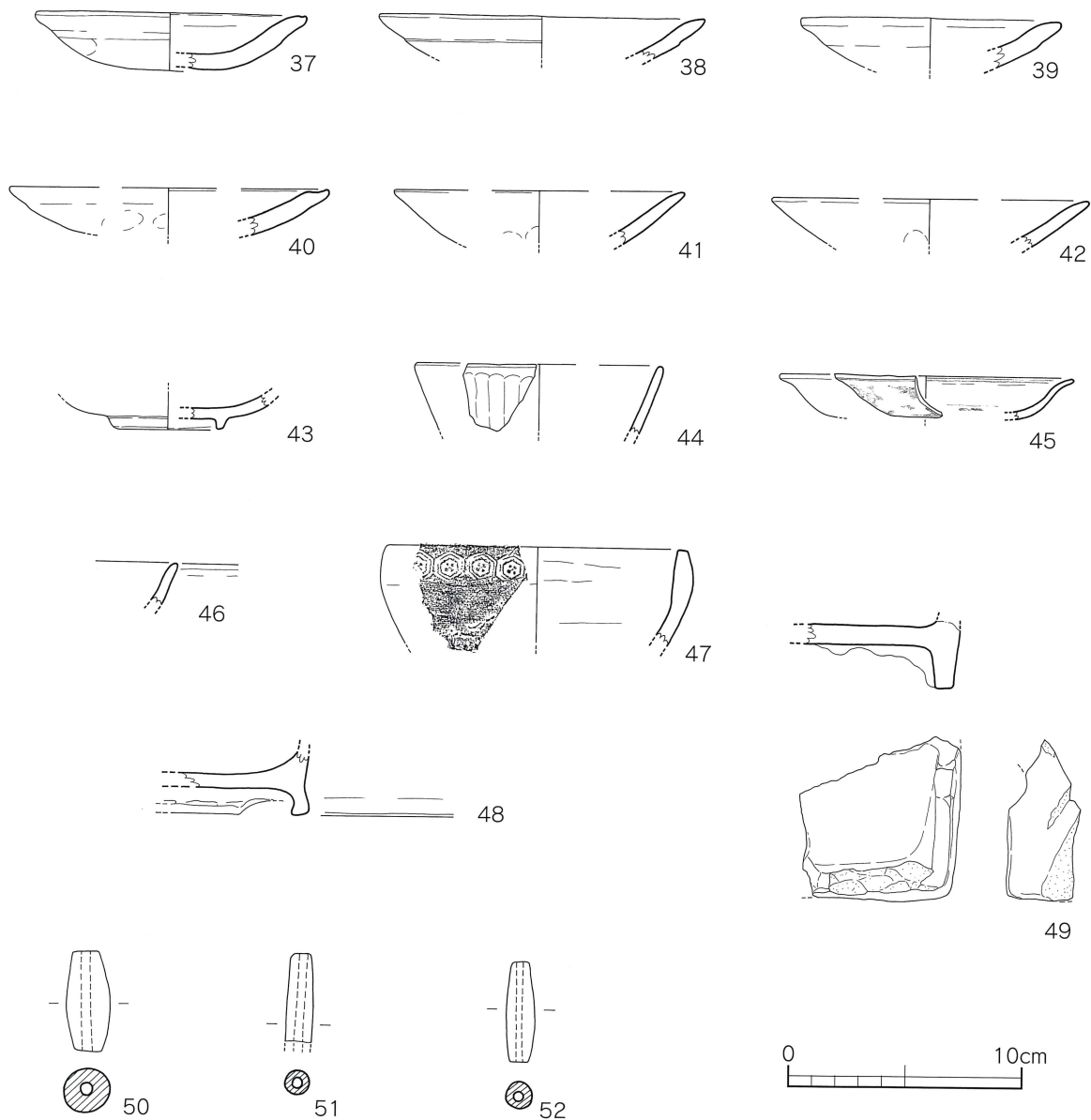
SD1

37～42は京都系土師器皿である。37～40は、口縁部下のナデが強く、器壁も厚い。それに対して41・42は、口縁部下のナデも弱く、器壁も薄い。従って、両者の間には型式的に時期差があると考えられ、41・42から37～40という変遷が想定される<sup>(7)</sup>。

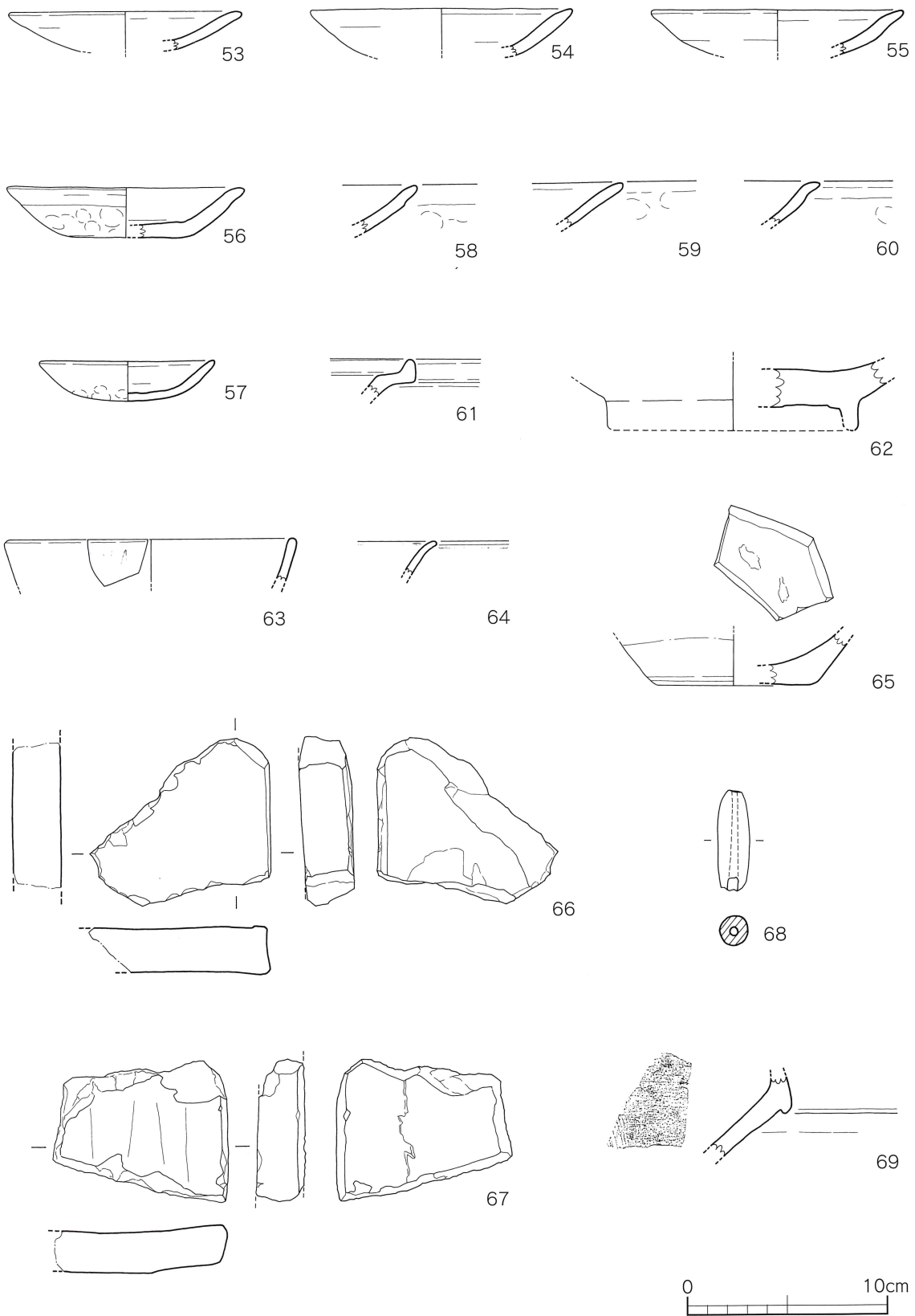
43・44は青磁の碗である。43は底部のみ、44は口縁部から胴部にかけての一部で、鎬連弁が確認できる。44の鎬連弁は、連弁が退化し細線化をしていることから、16世紀代の所産と考えられる。45は、景德鎮窯青花の皿である。口縁部が端反る形態で、B1群もしくはB2群の形態である<sup>(8)</sup>。46は、中国産天目茶碗の口縁部である。

47～49は瓦質土器である。47は口縁部下に六角形の文様が一周する。器形から香炉の可能性はある。48・49は火鉢であるが、特に49は角火鉢である。

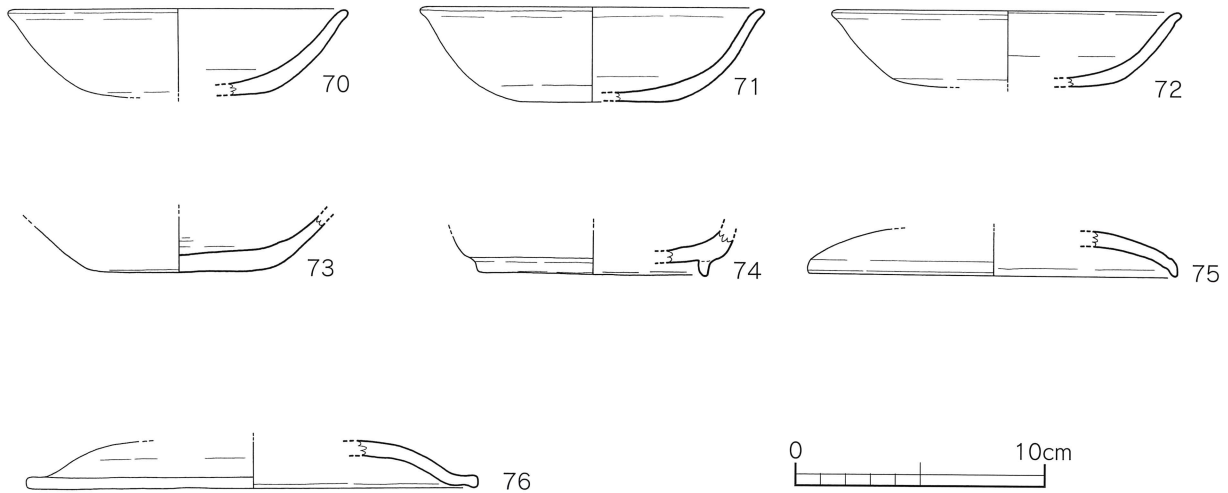
50～52は土錘で中世のものと考えられる。



第58図 SD1 出土遺物(1/3)



第59図 SD 2 出土遺物①(1/3)



第60図 SD 2 出土遺物②(1/3)

## SD 2

53～60は京都系土師器皿である。いずれも口縁部下に明瞭なナデが見られ、器壁も厚い。16世紀後半～末にかけての所産と考えられる<sup>(9)</sup>。61～63は龍泉窯の青磁で、61は盤の口縁部、62は盤の底部である。また、63は碗の口縁部で、文様は磨滅して判別が困難だが、蓮弁の形態より15世紀後半～16世紀前半のものと思われる。64は、景德鎮窯の青花で碗の口縁部である。口縁端部は外反する。65は朝鮮王朝産陶器の碗の底部で、見込みには目跡が2カ所認められる。66・67は平瓦で、66は16世紀、67は桶巻きによる製作痕が認められ、古代のものと考えられる。68は土錘で、中世のものと考えられる。69は備前焼の播鉢口縁部である。口縁の一部分しか残存していないため、明確に形態は把握できないが、15世紀後半期の所産である可能性が高い<sup>(10)</sup>。70～74は土師器の坏である。残存状況が悪く器面調整が明確でないが、71は坏aと思われる。74は高台が付く。75・76は土師器の蓋である。70～76は8世紀後半～9世紀前半の所産である。

以上のようにSD 1から出土する遺物は、16世紀代のものを中心としているが、京都系土師器の形態から溝の埋没時期は16世紀でも後半段階に位置づけられる。また、SD 2出土遺物は、大きく8世紀後半～9世紀前半、14世紀～15世紀、16世紀後半のものが見られるが、京都系土師器の形態から、埋没時期は16世紀後半段階であろうと考えられる。したがって、SD 2の時期もSD 1と大差がないことからSD 1はさほど長い期間存続はしていなかったと考えられる。

## 註

- (1) 坪根伸也「付章 羽田遺跡出土土器に関する二・三の問題」(『羽田遺跡Ⅱ—大分市営羽田住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—』大分市教育委員会 1995年)
- (2) 坪根伸也・塩地潤一「豊後国の土器編年」(『大分・大友土器研究会論集』大分・大友土器研究会 2001年)
- (3) 大分市教育委員会『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12 2000年度(2001年)
- (4) 乗岡実「中近世の備前焼播鉢の編年案」(『第3回中近世備前焼研究会』2000年)
- (5) 吉田寛「中世大友府内町跡出土の産地不明焼締陶器について」(『貿易陶磁研究』No.23 日本貿易陶磁研究会 2003年)
- (6) 註2文献に同じ。
- (7) 塩地潤一氏の編年によれば(塩地潤一「九州出土の京都系土師器皿」『中近世土器の基礎研究XⅣ 京都系土師器皿の伝播と受容—中世後期を中心に—』日本中世土器研究会 1999年、塩地潤一「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『博多研究会誌』第6号 博多研究会 1998年)、41・42はⅡ期、37～40はⅢ期に概ね該当するものと考えられる。ただし41・42には明瞭なナデがみられないことから、氏の指摘するⅡ期としての特徴を兼ね備えていない。しかし、いわゆるⅠ期とされるものに比べると器壁はさほど薄くはなく、器形的にもやはりⅡ期の範疇に入れうるものと考えられる。
- (8) 小野正敏「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会 1982年)
- (9) 註7の文献による。
- (10) 註4の文献による。



## 4. まとめ

### 古代の遺構について

顕徳寺遺跡における古代の遺構は、包含層のみである。包含層は上下2層に分かれるが、そのうち上層には中世から古代の遺物が混在しているのに対して、下層は古代の遺物が単純に包含されている。包含層下層から出土する遺物は、須恵器、土師器の坏と製塩土器が中心であるが、特に土師器の坏の形態は、坪根・塩地編年9-I・II期（8世紀末～9世紀前半）段階に比定されるものである。さらに製塩土器の時期もほぼ同時期の所産と考えられ、包含層下層は8世紀末～9世紀前半段階に形成されたものと考えられる。

ところで、前述の通り顕徳寺遺跡においては古代の生活遺構は全く見られないが、それは調査面積の狭小さゆえのことである。例えば、本遺跡の北側に位置する南金池遺跡では、製塩土器の大量廃棄土坑が検出されているが、そこで出土する製塩土器は顕徳寺遺跡のものとはほぼ同時期の所産と考えられ、関連性が認められる。また、南側に隣接する上野町遺跡でも古代の遺物が豊富に出土しており、顕徳寺遺跡出土の遺物の時期とも相応する。以上より、顕徳寺遺跡を含む周辺一帯は、古代（特に8世紀末～9世紀前半段階）の生活面がかなり広がっていたと考えられる。

### 中世の遺構について

中世の遺構としては、包含層と溝（SD1・SD2）がある。これらの先後関係はその切り合い関係より、古い順に包含層→SD2→SD1となるが、主体となって出土する遺物はいずれも16世紀後半代のもので、さほど大きな時期差は認められない。従って、包含層が形成されてすぐにSD2は掘られ、極めて短期間の内に埋没して、SD1が改めて掘り直されていることが判る。SD1とSD2がほぼ同軸を持って形成され、しかも1mほどしかずれていないことがこのことを裏付けている。

さて、この溝SD1とSD2がどのような性格のものなのかという点について考えてみたい。前述のように16世紀後半代の所産であることから、これらの溝は中世大友府内町跡の関連施設である可能性がある。出土する遺物も、京都系土師器や輸入陶磁器等が中心となっており、中世大友府内町跡の他の調査区で出土する遺物の組成傾向と類似している。ただ調査区内では、建物跡や井戸、土坑等の生活遺構は全く見られず、この溝の明確な位置付けは現段階では困難である。

また、当時の状況を記したとされる府内古図に照らし合わせてみると、府内古図C類の中に「ケントク寺」の記載のある場所があり、その「ケントク寺」はキリスト教関連施設の「ダイウス堂」を示している。この府内古図の記載を信じれば、顕徳寺遺跡の溝はこのダイウス堂関連のものである可能性も指摘できるが、キリスト教関連の遺物の出土は認められず、また溝以外に全く遺構が検出されていない。さらに近年、この顕徳寺遺跡より150mほど東側の中世大友府内町跡第10次調査区で、キリシタン墓が発見されており、ダイウス堂関連施設はその付近である可能性が高くなってきている。そうした点から、この顕徳寺遺跡はダイウス堂関連施設よりもかなり西へ隔たった位置であることが想定され、府内古図ではそこはかなり閑散とした区域として表現されている。顕徳寺遺跡で検出された遺構が溝のみである点は、こうした状況を裏付けているのかもしれない。

### SD2出土の獣骨について

16世紀後半代所産の溝SD2は下層に粘質土が堆積しており、滞水していたことを示している。そのため、有機質の残存状況がよく、その中には獣骨も含まれていた。この獣骨を鑑定した結果、日本在来ウシとして知られている鹿児島県口之島産雌ウシの下顎骨と同種雄の左側横骨であることが判明した。極めて部分的な出土のため、これらのウシがどういう状態で溝中に廃棄、或いは流入したかは不明である。そのため他の類する遺跡で指摘されているような水神信仰に伴う祭祀行為を施したものか、或いは耕作牛を廃棄したかどうかは、現段階では言及できない。しかし、中世大友府内町跡においては各調査区の溝内から、同じように獣骨の出土例が多数見られており、中にはウシの頭蓋骨がそのまま出土した例もある。今後そうした資料の鑑定、集成が行われていけば、当時のウシをはじめとする動物の位置づけが明確になってくるものと考えられる。

## 第4章 自然科学的分析

### 1. 上野町遺跡から出土した木製品の樹種

#### はじめに

上野町遺跡は、大分川左岸の沖積地に位置する。13世紀代の整地層（I層）の下位に9世紀中頃から後半の遺物包含層（II～IV層群）と、8世紀末～9世紀前半の遺物包含層（V層群）が確認されている。このうち、V層群からは、木製品等の植物質遺物も出土している。今回の分析調査では、V層群から出土した木製品について樹種同定を行い、木材利用に関する資料を得る。

#### ①試料

試料は、V層群から出土した木製品16点（試料番号1～16）である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表1に記した。

#### ②分析方法

2003年10月24日に、当社技師が大分県教育庁文化課文化財資料室において試料採取を行った。その際に、破損も少ない等の理由でブロックでの採取が難しかった試料番号2・5・10・13～15の6点については、遺物から直接切片を採取した。その他の木製品については、接合面の内側や破損部等を利用して、5mm角程度のブロックを採取して試料とした。

ブロック試料については、室内作業で剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製した。現地で採取したものも含めて、各切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

#### ③結果

樹種同定結果を表1に示す。木製品は針葉樹3種類（モミ属・スギ・ヒノキ）、広葉樹2種類（コナラ属アカガシ亜属・ヒサカキ）と樹皮に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

##### ●モミ属(*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、じゅう状末端壁が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

##### ●スギ(*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞は、ほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、

番号	遺物名称	長さ	幅	厚み	木取	樹種
1	曲物底板	18.8cm	9.8cm	0.7cm	板目	ヒノキ
2	曲物底板	18.6cm	6.1cm	0.4cm	板目	モミ属
3	曲物底板	18.6cm	5.7cm	0.3cm	追柾	モミ属
4	曲物底板	14.6cm	7.2cm	0.5cm	追柾	モミ属
5	曲物底板	13.0cm	3.1cm	0.5cm	柾目	スギ
6	曲物底板	13.7cm	3.3cm	0.4cm	追柾	ヒノキ
7	曲物底板	18.0cm	3.4cm	0.7cm	板目	ヒノキ
8	曲物底板	19.4cm	3.2cm	0.4cm	板目	ヒノキ
9	垂具	19.8cm	4.4cm	3.1cm	—	ヒサカキ
10	加工木材	21.1cm	1.4cm	1.0cm	—	ヒノキ
11	加工木材	15.9cm	4.4cm	0.7cm	板目	ヒノキ
12	加工木材	29.1cm	2.1cm	0.9cm	板目	ヒノキ
13	楔?	6.0cm	2.2cm	1.4cm		コナラ属アカガシ亜属
14	楔?	6.9cm	2.6cm	0.9cm	板目	ヒノキ
15	楔?	5.1cm	9.6cm	0.6cm	柾目	ヒノキ
16	綴紐	—	—	—	—	樹皮

第12表 樹種同定結果

1-15細胞高。

●ヒノキ(*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

●コナラ属アカガシ亜属(*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織とがある。

●ヒサカキ(*Eurya japonica* Thunberg) ツバキ科ヒサカキ属

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、単独または2～3個が複合して散在し、道管の分布密度は高い。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～40細胞高で、単列の組織が多い。

④考察

樹種同定を行った木製品16点のうち、半数の8点が曲物の底板で、他は加工木材と楔?が各3点、垂具と綴紐が各1点となっている。曲物は、残存部の長さが約13～20cmで18～19cmのものが多く、完形品は無く、欠損している試料もあるため、正確な径は不明である。板の厚みはいずれも1cm未満で、0.3～0.7cmとなる。木取りは、底の平坦面が板目となるものが4点で最も多く、次いで追柁3点、柁目1点であった。樹種は、全て針葉樹材で、ヒノキ4点、モミ属3点、スギ1点であった。樹種と木取を比較すると、ヒノキには板目板が多いが、追柁も1点認められる。モミ属は3点中2点が追柁で1点が板目、スギは柁目であった。樹種ごとに木取りが異なるようにも見えるが、点数が少ないため明確ではない。確認された3種類は、曲物の樹種としてはよく利用される樹種であり、これまでも多くの報告例が知られている(島地・伊東, 1988; 伊東, 1990; 伊東・久保, 2002)。これらの樹種は、木理が通直で割裂性が高く、楔等を利用することで容易に薄い板を製作することができる。また、ヒノキやスギでは耐水性も比較的高い。これらの材質が、木材利用の際に考慮された可能性がある。また、曲物については、遺跡や地域によって多少の違いはあるが、全国的にスギ、ヒノキ、モミ属の占める割合が高く、古くから木材利用がある程度確立していた可能性もある。

一方、綴紐は、曲物の板を綴じたりするのに利用された可能性がある。樹皮の細胞に特徴的な組織が無いこと、使用時になめしており組織が潰れていること等から、組織観察で種類を同定することは困難である。民族事例では、サクラ属の樹皮(桜皮)やカバノキの樹皮(樺皮)を用いることが知られており(農商務省山林局, 1912; 成田, 1996)、今回の綴紐も桜皮や樺皮に由来する可能性もある。垂具は、いわゆる「ツチノコ」等と呼ばれる、編物等を製作する際に利用される道具である。錘としての役割があるため、木材としては比較的比重の高い(重い)木材が適している。一般には、針葉樹よりも広葉樹の方が重いため、広葉樹材の方が良いと考えられる。実際に、同様の用途には重硬な広葉樹材が多く確認されている(島地・伊東, 1988)。ヒサカキは、日本産広葉樹の中でも比較的硬な部類に入ることから、これまでの例と調和的といえる。

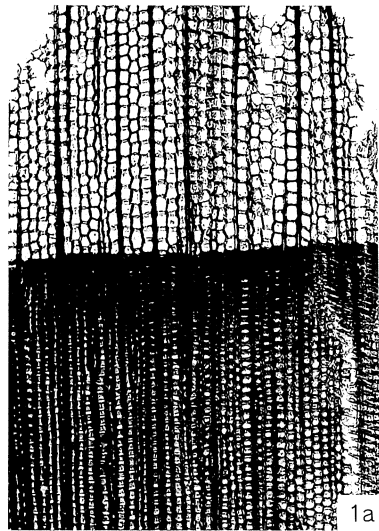
その他の試料については、用途の詳細が不明である。このうち、試料番号13～15は、形状から楔のような機能を果たす製品の可能性が指摘されている。楔だとすれば、その利用方法から衝撃に強い、重硬で強度の高い木材が適していると考えられる。実際に、これまでの出土例では、アカガシ亜属やサカキ等の重硬な広葉樹材が確認されている。しかし、その一方でモミ、スギ、ヒノキ等の軽軟な針葉樹材も確認されている。針葉樹の利用は、楔を使用する素材の種別(木材・石材等)等とも関係している可能性がある。今回の結果は、これまでに楔に確認されてきた樹種とも一致している。試料番号10は角棒状で2箇所穿孔が認められるが、孔は貫通していない。一方、試料番号11・12は、いずれも板状の製品であり、木取は柁目となる。用途の詳細は不明であるが、樹種は全てヒノキである。ヒノキの利用は、曲物底板と同じく割裂性等を利用したものと考えられる。

大分市周辺地域では、下郡桑苗遺跡の弥生時代の木製品や、机張原女狐近世墓地の江戸時代の木製品について樹種同定を行った例が知られているが、古代や中世の木製品を対象とした樹種同定の例はほとんどない（津島・小田,1989；能城,1992,1996）。また、全体的に木材利用に関する調査例が少ないため、今後さらに各時代の様々な木製品について樹種同定を行い、木材利用の地域性や時代や用途による利用状況の違い等を検証したい。

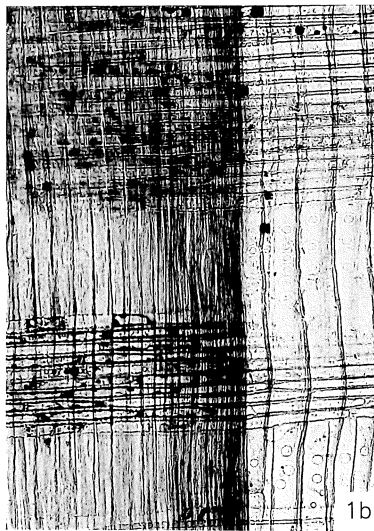
#### 引用文献

- 伊東 隆夫『日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ』（木材研究・資料26 京都大学木質科学研究所 1990年 91～189頁）
- 伊東 隆夫・久保るり子『日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅲ』（木材研究・資料38 京都大学木質科学研究所 2002年 39～217頁）
- 成田壽一郎、『曲物・籠物』（理工学社 1996年 205頁）
- 能城修一「大分県大分市下郡桑苗遺跡（第2次調査）から出土した木製品の樹種」（『下郡桑苗遺跡Ⅱ－大分県文化財調査報告書第89輯－』大分県教育委員会 1992年 122～143頁）
- 能城修一「大分県大分市机帳原女狐近世墓地から出土した木製品の樹種」（『机帳原遺跡・女狐近世墓地・庄ノ原遺跡群－九州横断自動車道関係文化財発掘調査報告書（5）－』大分県教育委員会 1996年 248～250頁）
- 農商務省山林局（編著）『木材ノ工芸的利用』（大日本山林会 1912年 1308頁）
- 島地謙・伊東隆夫（編著）『日本の遺跡出土木製品総覧』（雄山閣 1988年 296頁）
- 津島俊治・小田一幸「下郡桑苗遺跡出土木製遺物の樹種同定」（『下郡桑苗遺跡－七歩川河川改修工事に伴う発掘調査報告書－』大分県文化財調査報告書第80輯 大分県教育委員会 1989年 68～76頁）

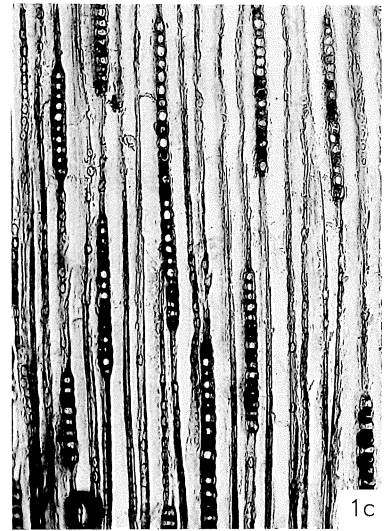




1a



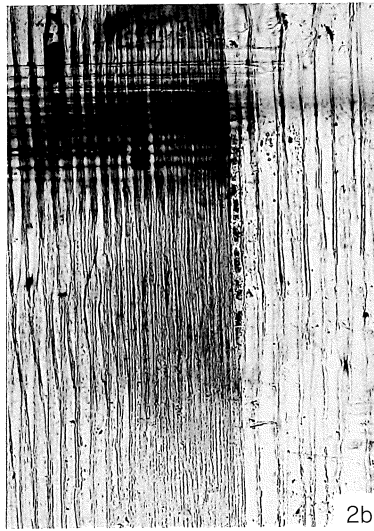
1b



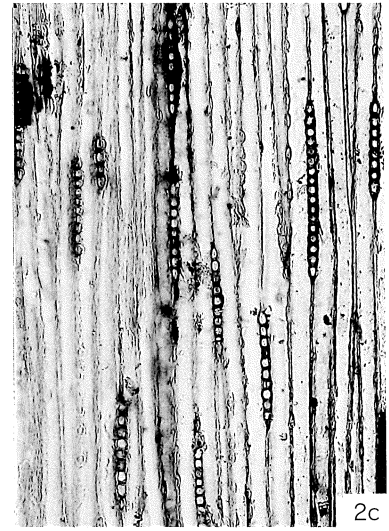
1c



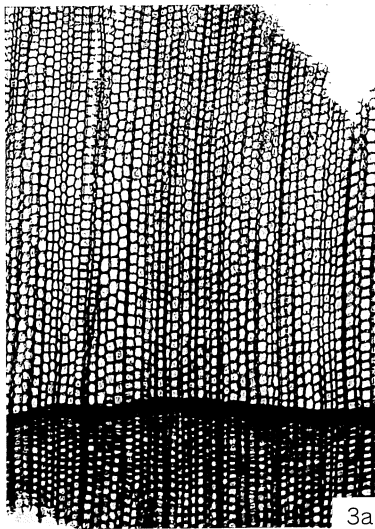
2a



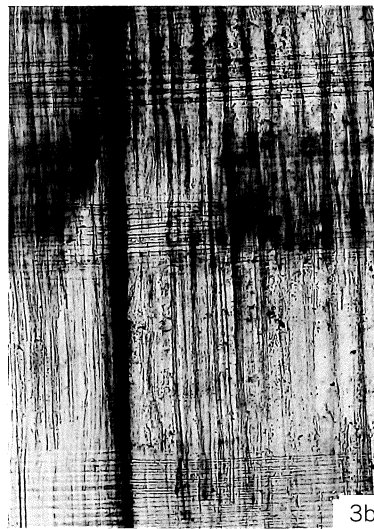
2b



2c



3a



3b



3c

1. モミ属 (試料番号1)

2. スギ (試料番号5)

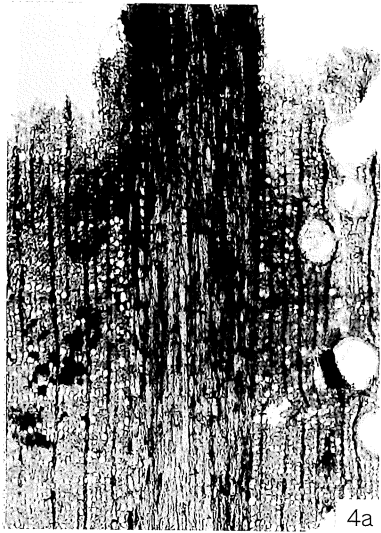
3. ヒノキ (試料番号6)

a. 木口, b. 柁目, c. 板目

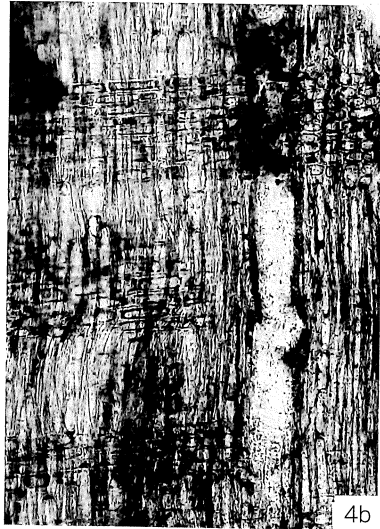
200μ m:a

200μ m:b,c

第61図 上野町遺跡出土の木製品① (顕微鏡写真)



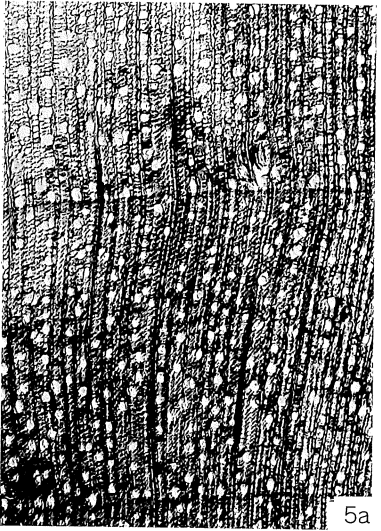
4a



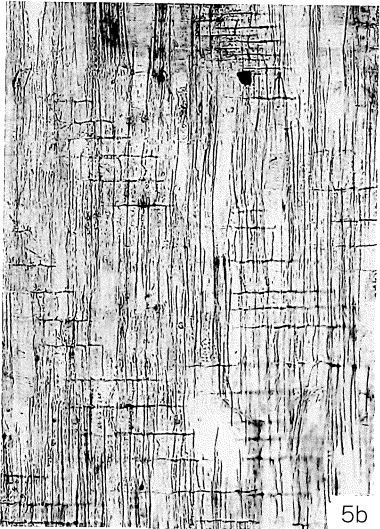
4b



4c



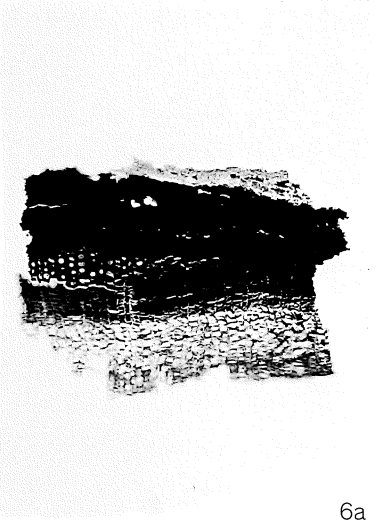
5a



5b



5c



6a



6b

- 4. コナラ属アカガシ亜属 (試料番号13)
- 5. ヒサカキ (試料番号9)
- 6. 樹皮 (試料番号16)
  - a. 木口, b. 柱目, c. 板目

 200μ m:a  
 200μ m:b,c

第62図 上野町遺跡出土の木製品② (顕微鏡写真)

## 2. 顕徳寺遺跡の出土獣骨

### はじめに

顕徳寺遺跡（大分市大字大分字顕徳寺に所在）は大分川左岸に位置し、大分川や大野川などによって形成された沖積低地上に立地する。これまでの発掘調査では、8世紀から9世紀にかけての遺物包含層や16世紀後半代の溝跡などが検出されている。このうち、溝跡SD2では獣骨が検出された。そこで、骨同定を行ってその種類や部位等を明らかにし、当時の動物利用に関する情報を得ることとした。

### ①試料

分析試料は、SD2から出土した獣骨2点である。このうち、1点はNo.2とNo.42の番号が記され、顎骨が観察される。もう1点はNo.4と記され、比較的保存状態がよい。2試料ともそれぞれ複数点の骨が入っており、いずれも試料受領時に、当社技師が樹脂により保存処理を施している。

### ②分析方法

試料運搬に先立って、その崩壊を防止するため、一部試料は土壌が付着した状態で保存処理を施したので、申等を用いて可能な限り土壌の除去を行う。一部の試料については、一般工作用接着剤を用いて接合を行う。この試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類および部位の特定を行う。計測は、デジタルノギスを用いて測定する。

### ③結果および考察<sup>(1)</sup>

#### (1) 出土骨について

検出された骨は、2試料とも、哺乳綱（Class Mammalia）脊椎動物門（Phylum Vertebrata）ウシ目（偶蹄目：Order Artiodactyla）ウシ科（Family Bovidae）ウシ（*Bos taurus*）に由来する。以下、試料ごとに結果を示す。なお、各計測値と在来ウシとの比較については、西中川ほか（1989）を参考とする。

#### ● No. 2, No. 42

一部接合する。ウシ左側下顎骨およびその破片である。計測値を表1に示す。なお、歯冠長および歯冠幅は咬面で、また歯冠高は舌側歯根分岐部から咬面中央の最低部までを、それぞれ計測している。下顎骨の骨体は、埋存時に保存されていたものと思われる。取り上げ時の破損等もあって、現状では完全に修復できない位に破損する。ただし、第2前臼歯から第3後臼歯まで植立して残され、保存も良好である。下顎枝部分が残されておらず、完存する下顎骨でなかったものと思われる。この下顎骨の全長は、口之島在来牛雌に一致する。

#### ● No. 4

一部接合する。ウシ左側橈骨とその破片である。近位骨端を残し、骨体も一部が残るのみである。ただし、埋没時には今少しは残されていたと推定される。橈骨近位端幅は、83.70mm測る。この数値は、口之島ウシの雄に一致する。

#### (2) 総括

出土したウシの下顎骨は、現在臼歯列を残すのみである。そのサイズは、ほぼ日本在来ウシとして知られている鹿児島県口之島産ウシ雌に一致する。なお、橈骨の近位端幅が雄に一致するが、これは補修しているために原長と異なることも考えられる。口之島ウシは、もっとも小型のウシである。日本の古代から近世までの遺跡で出土するウシの遺骸では、このような小型の検出例が多い。おそらく、当時一般に飼育されていたウシであったと考えられる。

この二つの遺骸は、いずれもSD2の埋土中に廃棄あるいは流入した状態で出土している。過去の考古学的な調査事例では、ウシやウマの遺骸が、水神信仰とからんで祭祀的な扱いを受けたことが想定される出土例は多い。

そのような場合には、完存する頭骨あるいは下顎骨が検出される。本例もそうした例の一つと解釈される可能性もあるが、出土状態からはこの点についての最終的な結論については、保留しておくことが穏当であろう。

註（１）出土獣骨の同定・解析および本稿③の原稿執筆は、金子浩昌（早稲田大学）による。

#### 引用文献

西中川 駿・上村俊雄・松元光春『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛・馬の起源・系統に関する研究—とくに日本在来種との比較—』（昭和63年度文部省科学研究費補助金（一般研究B）研究成果報告書 1989年）

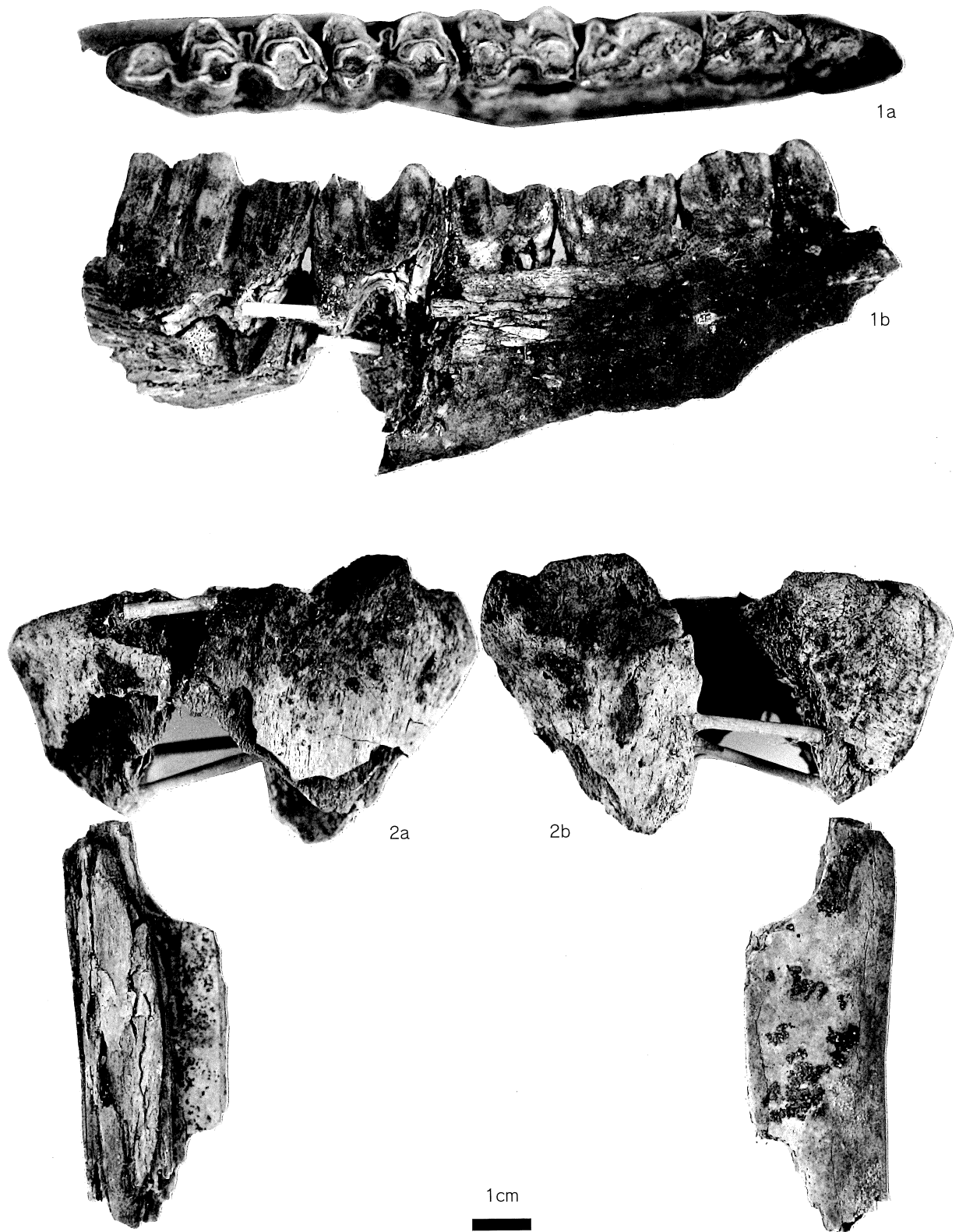
単位：mm

下顎骨	全長	346.00（推定値）					
	歯列長	130.68					
臼 歯	部位	P <sub>2</sub>	P <sub>3</sub>	P <sub>4</sub>	M <sub>1</sub>	M <sub>2</sub>	M <sub>3</sub>
	歯冠長	11.34	17.72	21.91	20.71	23.29	34.62
	歯冠幅（咬面）	7.83	9.51	12.06	13.58	13.84	13.88
	歯冠高	14.51	14.12	13.71	11.14	19.62	20.87

凡例）P：前臼歯 M：後臼歯

第13表 下顎骨の計測値





1. ウシ左側顎骨 (SD2 No.2,42) 2. ウシ左側橈骨近位骨端・骨体 (SD2 No.4)

第63図 顕徳寺遺跡出土獣骨

## 第5章 結語

本書に収録した上野町遺跡・顕徳寺遺跡は、ともに大分駅付近立体交差事業に伴う発掘調査によって発見された遺跡である。以下、今回の発掘調査で判明したことを箇条書きにして、結語に代えたい。

### 上野町遺跡

- ①大分市上野町1番地に所在する古代と中世を主体とする遺跡である。2002年1月7日から2月27日までの期間で、135m<sup>2</sup>の発掘調査を行った(1頁)。
- ②遺跡の層序をⅠ～Ⅴ層群に分別し、中世・古代1(9世紀中頃～後半)・古代2(8世紀末～9世紀前半)・弥生時代後期末～古墳時代前期初頭の4時期にわたる遺物・遺構を検出した(9～12頁)。
- ③9世紀中頃から後半の層位からは、大型土鍾79個・小型土鍾339個が集中する土鍾集中部SX006を検出した。大型土鍾はその形態やサイズから、底曳網などの袋網系漁網に使用されていた可能性が高く、周辺に漁撈を営む集団が居住していたことを推定した(50～57頁)。
- ④9世紀中頃から後半の層位から、円面硯(圈足硯)2個体・風字硯形土製品・長沙窯系黄釉褐彩水注の破片が出土した(31頁)。
- ⑤8世紀末から9世紀前半の層位から、墨書土器4点・円面硯(圈足硯)1個体が出土した(37頁)。
- ⑥Ⅱ～Ⅳ層群(9世紀中頃～後半)・Ⅴ層群(8世紀末～9世紀前半)出土土器の比較を行い、両者が層位的・型式学的に分離可能な資料群であることを確認した(46～50頁)。

### 顕徳寺遺跡

- ①大分市大字大分字顕徳寺に所在する古代と中世を主体とする遺跡である。2001年7月5日から8月31日までの期間で、100m<sup>2</sup>の発掘調査を行った(1頁)。
- ②発掘調査によって、16世紀後半の溝2条、古代から中世の遺物を含む包含層を検出した(60頁)。
- ③16世紀後半の溝SD1・SD2は、ほぼ同じ場所に構築されている。SD2からは獣骨(ウシ)が出土している(60～61頁)。
- ④溝の周辺には町屋の形成を示す遺構群は皆無であり、戦国期の府内町(中世大友府内町)の町屋が、この地点にまでは及んでいないことが確認された(69頁)。
- ⑤包含層は上層では中世と古代の遺物が混在するが、下層では古代の遺物のみが出土する状況が看取できた。特に下層の遺物は、数はすくないものの、8世紀末から9世紀前半の遺物が単純で出土している。また、包含層下層には焼塩壺の大型破片も出土しており、近隣の金池南遺跡との関連が注目される(63～65頁)。